
プリキュアオールスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8兄弟

ターザン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8兄弟

【Nコード】

N2165M

【作者名】

ターザン

【あらすじ】

ごく普通の平和な日々が流れていた世界に突如あらわれた謎の蜃気楼、それがあつた3つの世界を融合させ、そして世界最大の戦いの幕開けであった。

第1話 幕開け

ピピピッ！ピピピッ！

目覚まし時計の音がある少女の部屋に響きわたる。

「????」「ん〜、あと・・・5分だけ・・・ん?・・・え!?
もうこんな時間!?!」

この寝坊助の名前は夢原のぞみ、プリキュア5のリーダーことキュアドリームだ。今日も寝坊してしまったらしい。

のぞみ「急げ〜!」一方のぞみの住んでいる町に見慣れない写真館があった。

「光写真館」

という写真館である。その中からある男が出てきた。

「????」「どうやらこれも俺の世界じゃないらしいな。」

彼の名は門矢士。

世界の破壊者こと仮面ライダーディケイドだ。彼は様々な世界をめぐり自分の世界を探している。

すると後ろから親指が飛び出してきた。

ドス!!!

士「はははは!!!こらなつみかんはははは!」

彼の仲間、光夏美である。

夏美「士君、なにを一人で語ってるんですか!?!早くこの世界を調べましょう!」

士「はははは、そ・・・そうだな、ん?あれは・・・」
またまた一方

「????」「おい、ダイゴあれ!」

「????」「そんな・・・」????「まさか、あれは!!!」

ある三人の男は何かを見つけた。この三人は伝説の光の巨人、ウルトラマンティガ、ダイナ、ガイアに変身できるマドカ・ダイゴ、アスカ・シン、高山我夢だ。

ダイゴ「どうして・・・あれが!？」

何とか学校に間に合ったのぞみはなにか人だかりができているのを見つけた、そこにはプリキュア5の仲間たち、夏木りん、春日野つらら、秋本こまち、水無月かれん、美々くるみもいた。

のぞみ「ねえ、みんなどうしたの？」

りん「あつ、のぞみ・・・見てあれ。」

のぞみ「ん・・・何あれ!？」

士「あれは・・・」

ダイゴ「あの時の蜃気楼!!」

空にはまるで世界の終わりを予言させるような不気味な蜃気楼が浮かび上がっていた、その時のぞみ、士、ダイゴの三人だけ激しい頭痛とともに頭に不思議な映像が流れた。

つづく

第1話 幕開け（後書き）

思いついたので作ってみました よろしくお願ひします

第2話 マゼンタの訪問者

のぞみ「何、これ？」

のぞみの目の前に映ったのマゼンタに輝く何かによって破壊されつくした学校だった、そこには破壊された学校に巻き込まれた生徒もちろんプリキュア5のメンバーもその中であつた。

のぞみ「みんな!!！」

士「また厄介なことになつたな。」

士の目の前には見慣れた男、鳴滝がいた。

鳴滝「デイケイド、この世界もお前のせいで崩壊に向かっている。すべて貴様のせいだデイケイド!!！すぐに旅をやめろ!!！」

士「いい加減聞き飽きたセリフだな、それと俺に命令するな!!！」

ダイゴ「これは、あの時と違う風景？」

目の前にはマゼンタ色に輝く一人の人間？がいた。

ダイゴ「あれは・・・一体。」

????「の・・・、ぞみ・・・、のぞみ!!！」

のぞみはゆっくりと目を開けた、いつの間にか気絶したらしい。目の前には夏木りんが心配そうな顔をしていた。

のぞみ「りんちゃん、ここは？」

りん「保健室だよ、もういきなり頭押さえて倒れるんだもん。」

????「のぞみ、心配したぞ!!！」

そこにはかつてプリキュア5が救ったパルミエ王国の王子ココがいた。人間に化けて小々田コージとしてのぞみ達が通う学校の教師をやっている。

のぞみ「心配かけてごめん、でももう大丈夫だよ!!！」

りん「もう、あんまり無理しないでよ。」

なんとか体調を整えたのぞみは教室に入る。

のぞみ（そういえば、あれなんだったんだろ。）

戸惑うのぞみ、するとココ（小々田コージ）が口を開く。

ココ「えー、突然だけど今日から教育実習生がこのクラスにくるぞ、入って。」

教室の扉が開き、一人の男が入ってきた、首にマゼンタ色のカメラを下げている男だ。

のぞみ「あれ？あの色どこかで・・・」

男が口を開く。

「門矢士だ、今日からこのクラスに実習生として来た・・・よろしく。」

つづく

第3話 初代（前書き）

初代どうしが出会います

第3話 初代

士はこの世界では教育実習生と言うことになっているらしい、その日の放課後。

士「この俺に実習生の役をふるるとはいい度胸だな。」

士が不満げに呟くすると後ろからのぞみ話が話かけてきた。

のぞみ「士先生、こんにちは私・・・」

士「夢原のぞみ・・・だろ？」

のぞみ「すごい！もう覚えたんですね？」

士が得意げにはなす。

士「まあな、それとお前気をつけた方がいいぞ。」

のぞみ「？」

士「最近エターナルの襲撃がないから少したるんでるんじゃないか？」

のぞみは驚愕した、ただの教育実習生だと思つた男がエターナルの存在を知っていたからだ。

士「ま、がんばれよ。キュアドリーム。」士はその場から離れた。

そこにかれん、こまちが来た。

こまち「のぞみさん、どうしたの？」

かれん「なにかあつたの？」

のぞみ「あの人・・・一体」

????「お願い先生、今日だけは許して！」

先生「何が今日だけだ！ほぼ毎日だろ、何度遅刻したら分かるんだ！？」

遅刻した少女の名は美墨なぎさ、ふたりはプリキュアことキュアブラックだ。プリキュアの主人公はなにかと寝坊助みたいだ。その放課後なぎさはキュアホワイトこと雪城ほのか、シャイニールミナスこと九条ひかりと話していた。

ほのか「なぎさ今日も遅刻したね。」

ひかり「もう少し早く起きればいいんじゃないでしょうか？」なぎさ「早起きは苦手なの！」

たわいの無い会話をしていると、ある男が話かけてきた。その男はウルトラマンティガことマドカ・ダイゴだ

ダイゴ「ねえ、君たち。」

「……？、なんですか？」

ダイゴ「写真館でどこかわかるかな？」

ダイゴはあの屋気楼を見た時、頭に写真館の映像も見ていたのだ、行けばなにかわかるかもと探していた。

なぎさ「写真館？」ほのか「聞いたこと無いね。」

ひかり「私もわかりません。」

ダイゴは少し残念そうな顔した。

ダイゴ「そうか、ありがとう。」

ダイゴが立ち去ろうとすると大きな地震のようなものが起こった。

つづく

第3話 初代（後書き）

地震の原因なににしよつと考え中です

第4話 光の巨人（前書き）

ついに特撮の氷河期時代を終わらせた英雄が登場です

第4話 光の巨人

なぎさ「なに！？地震！？」しかし地震にしては間隔が空いて揺れている。

ダイゴ「違う、これは地震じゃない・・・まさか！！」

建物の影から赤色で頭が2つある巨大な生物が現れた。

ダイゴ「怪獣！あれはパンドン！？」
ほのか「なにあれ！？」

ひかり「こつちに来ます！」

なぎさ「ありえなくいい！」なぎさ達や周りの人々は逃げるがダイゴだけは逃げるどころか怪獣に向かって走っていく。

なぎさ「何してるんですか！早く逃げなきゃ！」

ダイゴ「君たちは先に逃げて！！」

怪獣の様子を見るのか建物に入り、屋上を目指すダイゴ。なぎさ達はそれを引き止めようとあとを追いかける。
ほのか「こ

んな時、ミップルやメップルがいてくれるば・・・」

なぎさ達はミップル、メップルという妖精がいなければ変身できないのだ。

ダイゴ「やっぱりパンドンか。」

屋上についたダイゴが呟く、なぎさ達も屋上にたどり着く。

ひかり「どうして、逃げないんですか！？」

ダイゴ「僕がやらなくちゃいけないんだ！！」

その時パンドンは火球を打ち出した
「・・・きゃあああ！」

！」「」火球によって下に行くための階段が破壊されてしまった。

なぎさ（もう、ダメ。）

なぎさがそう思った瞬間ダイゴは妙な形をした物を取りだした、そしてそれを空にかざし叫んだ。ダイゴ「ティガアアアアアア！！！」

その時空にかざしたものについているフタのような

ものが開きまばゆい光が視界を包んだ。

ほのか「何、今の？」

ひかり「見、見てください！」

なぎさ「……！」

そこにはダイゴの姿はなく、光に包まれた巨人がいた。これがマドカ・ダイゴがスパークレンズによって変身した3000万年前世界を救った超古代戦士、ウルトラマンティガだ。

つづく

第4話 光の巨人（後書き）

次回、バトルです

第5話 協力と真実（前書き）

今更ですけど主人公は土とのぞみとダイゴです

第5話 協力と真実

なぎさ「えっ!？」 ほのか「一体!？」

ひかり「どうなっているんですか!？」

三人は驚きを隠せないままウルトラマンティガの戦いを見ていた。パンドンは火球を連続で打ち出した、ティガはそれを切断技・ティガスライサーですべて撃ち落とした、するとティガの額のクリスタルがひかりだした。

なぎさ「体の色が青に変わった!」 これがウルトラマ

ンティガ・スカイタイプだ。攻撃力は劣るがマツハ7で空を飛ぶ事ができるのだ。

ティガは素早く空に飛び上がり旋回しながらパンドンに体当たり、勢いで押し倒した。しかしパンドンは反撃にでる。火球を連射してきた、飛行しながらかわすが動きを読まれ火球が直撃、そのまま真下に落下してしまった。パンドンの火球攻撃は続く、バリアをはるが持ちこたえられそうにない。

ティガ(このままでは、やられてしまう!)

なぎさ「どうしよう、ほのか!」

ほのか「そんなこと言われても・・・」

しかしその時

ひかり「・・・?、なにか聞こえますか?」

「「えっ?」」

ふたりはなんとなく空を見上げた、すると光の球が3つ降ってきた!

ガッン！！

1つはなぎさの額に直撃、2つはほのかとひかりの手の中に。

なぎさ「痛たた、あつメップル！」

ほのか「ミップル！」

ひかり「ポルン！」

願いが通じたのか、変身する時に必要な妖精が集まったのだ。

メップル「なぎさ、早く変身するメポ！！」 なぎさ「わかつ

てるわよ！これなら、あの巨人を助けられる。いくよ2人共！！」

ほのか「うん！」

ひかり「はい！」 なぎさとほのかは手を繋ぎもつ片方の手

を空に掲げる。

「デュアル・オーロラ・ウエーブ！！」

2人はオーロラに包まれ姿を変える。そしてひかりも

ひかり「ルミナス・シャイニングストリーム！」

ひかりはまばゆい光に包まれる。

なぎさ「光の使者、キュアブラック！！」

ほのか「光の使者、キュアホワイト！」

「2人はプリキュア！！！」

ホワイト「闇の力の僕たちよ！！」 ブラック「とつと

とお家に帰りなさい！」

そしてひかりはシャイニールミナスに変身した。

ルミナス「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てを1つにするために！！」

ブラックとホワイトはパンドンに攻撃を仕掛ける。ルミナスは防御力に優れているが、攻撃は得意ではないのだ。ルミナスはティガの

援護をする。

ティガ（そうか、あの子たちが噂されてたプリキュアか！？）

プリキュア達の攻撃にパンドンはひるみ隙ができた。

ルミナス「今です！」

ティガ（よし！）

ティガは元の姿に戻り、腕を前にクロスに突き出すそしてゆっくり真横に広げる、腕にエネルギーがたまった、そして腕をL字に組み白色の光線を打ち出す。これがティガの最強の必殺技・ゼペリオン光線だ！

パンドンはまたたく間に爆発する。

プリキュアとティガは変身前の姿に戻った。

ダイゴ「君たちが噂のプリキュアだったんだね。」

なぎさ「あの・・・あなたは一体」

ダイゴ「僕はマドカ・ダイゴ。」

なぎさ「あつ、美墨なぎさです、こっちは・・・」

ほのか「雪城ほのかと・・・」

ひかり「九条ひかりです。」

ダイゴは三人に今までの事を説明した。
ひかり「つまり現実世界がああな感じのようになるかもて事ですか？」

ダイゴ「ああ、以前出た屋敷の事覚えてる？」

なぎさ「えっ、あれが出たの今回が初めてじゃないんですか？」

ダイゴはなぎさの言った事が信じられなかった。

ダイゴ「じゃあ、ここは僕がいた世界じゃないのか!？」

ほのか「どういう事ですか？」

ほのかが問いかけた瞬間辺りが奇妙な風景に変わった。

なぎさ「何!？」

その時ある男が現れた。

????「僕が説明しましょう。」

つづく

第5話 協力と真実（後書き）

ある男の正体は少し先になります

第6話 花と空、大地と光（前書き）

題名のとおりわかる人には何が出るかわかるでしょう。

第6話 花と空、大地と光

とあるバッティングセンターにて・・・
カーン！！

アスカ「見たか！俺の超ファインプレー！！5回連続ホームランだぜ！！！」

我夢「アスカ、いつまでもやってる気？早く情報集めようよ。」

アスカと我夢は共同でダイゴが見た光写真館の情報を集めていたのだが

アスカ「やっぱり、横浜ベイスターズを代表する野球選手はバッティングセンターを見ると血が騒ぐって言うかさ！」

我夢「だからって、2時間はやりすぎだって。」

するとそこへ

????「いくよ、舞！」

????「手加減してよ咲！」

ある少女2人がキャッチボールをしていた。

????「あつ！」

????「きゃあ、もう咲！！！」

ごめん！つい力入っちゃった！」

????「うん、

その少女の名前は日向咲、美翔舞、ふたりはプリキュアSpiras
h Starことキュアブルームとキュアイーグレットだ。
アスカ「すげー、女の子なのに速い球なげるな。」

咲はアスカの言葉が聞こえたのか、笑顔で挨拶をしてきた。

咲「ありがとうございます、あたしソフトボールやってるんです！」

我夢「どつりで・・・君は？」

我夢は舞に尋ねた。

舞「私は美術部なんで運動はちよつと・・・」

すると外から悲鳴のようなものが聞こえた。

アスカ「何だ!？」

4人は外に出た、そこには巨大なハサミを持った怪物がいた。

咲「何、あれ!？」

舞「大きい!」

アスカと我夢はそれが何度も地球を襲ったバルタン星人だとわかつた。

バルタン星人はハサミからエネルギー弾を放つ。

バッテリーセンターは破壊されてしまった。

アスカ「あああ!5回連続ホームランの記録が!」

我夢「この状況でよくそんな事を・・・」

そんなとき咲と舞はフラッピとチョッピという妖精を呼び出した。

アスカ「なんだあ!？」

咲「人の喜びを奪うなんて許せない!」

舞「行こう!」

妖精は変身アイテム・クリスタルコミュニケーションとなり2人は手を繋いで叫んだ。

「デュアル・スピリチュアル・パワー!」

2人は光に包まれる。

咲「花開け!大地に!」

舞「羽ばたけ!空に!」

光に包まれた2人は姿が変わった。

咲「輝く金の花、キュアブルーム!」

舞「煌めく銀の翼、キュアイーグレット!」

「2人はプリキュア!」

舞「聖なる泉を汚す者よ!」

咲「あこぎな真似はお止めなさい!」

アスカと我夢は驚きを隠せない、アスカはともかく我夢はそれがプリキュアだとすぐわかった。だが不安があった、あのバルタン星人を2人で倒せるのかという事に。バルタン星人はまたエネルギー弾を打ち出してきた、ブルームはバリアをはり耐えきる。それと同時にイーグレットが追い討ちをかける。するとバルタン星人はその攻撃に倒れ込んだ。

ブルーム「なんだ、全然弱いじゃん。絶対好調なり〜！」

しかし、ブルームは何か吹き飛ばされた。

ブルーム「きゃああ!!！」

イーグレット「ブルーム・・・!!！」

イーグレットは目を疑った、先ほど倒したはずのバルタン星人が2人の後ろに立っていたからだ。バルタン星人は攻撃をくらう時分身をして攻撃をしのいでいたのだ。

ブルーム「うっ、」

イーグレット「大丈夫!？」

ブルームはなんとか立ち直る、しかしその時バルタン星人は分身を繰り返していた。その数は100いや500はいるだろう。

イーグレット「多すぎるわ、こんなの・・・」

バルタン星人は四方八方からエネルギー弾を打ち出した。バリアをはるがあまりの多さにバリアは破壊された。残りのエネルギー弾が2人を直撃、2人は地面に落とされる。だが意識はあるようだ。

バルタン星人は奇妙な笑い方をし2人とどめをさそうとした瞬間、

「ダイナアアア!!!」

「ガイアアアア!!!」

まばゆい光が当たりを包む、プリキュアは光の上に行った。

ブルーム「な・・・に・・・？」

イーグレット「!!!」

2人は赤と青の色をした巨人、赤い色をし胸部が黒い巨人の手の上にいた、巨人が2人を優しく手から下ろす。

ブルーム「信じらんない。」

イーグレット「一体、なにが。」

つづく

第6話 花と空、大地と光（後書き）

ガイアの技どうやって説明しよう。

第7話 古代怪人 対 プリキュア（前書き）

なんか長くなっ たかもしれないです

第7話 古代怪人 対 プリキュア

アスカと我夢はプリキュアを助けるためウルトラマンダイナ、ガイアに変身した。

バルタン星人の分身を一体ずつ倒していくがその多さに苦戦する2人。

ダイナ（多すぎる、きりがない！）

ガイア（どんどん増えていくぞ！？）

増えてつづけるバルタン星人に苦戦するがダイナがひらめいた！

ダイナ（やってやるぜ！！）

ダイナの額のクリスタルが輝き、ダイナの体は青と銀の体になった。これが超能力を自在に操れるウルトラマンダイナ・ミラクルタイプだ、ダイナは超能力で分身を全て消した。

バルタン星人は慌てたのか、空へ飛び逃げ出した。

しかし、ダイナはすかさず元の姿に戻り、胸の当たりで拳と拳をつけ斜め上、斜め下に伸ばす、エネルギーが両腕にたまる、ガイアは腕を横に大きく広げた後腕を閉じ、身をかがめるするとエネルギーがガイアの頭にたまり身を起こすとムチ状の光線が現れた、これがガイアの必殺技・フォトンエッジだ。それをバルタン星人に向かつて放つ、ダイナはそのまま腕を十字にくみ鮮やかな青色の光線を放つ、これがダイナの必殺技・ソルジェント光線だ。

バルタン星人に直撃、そのまま爆発を引き起こした。

ダイナ、ガイア、ブルーム、イーグレットは元の姿に戻った。

事情説明中・・・

咲「光写真館って、もしかしてのぞみの住んでる街にある所じゃない!?」舞「そういえば、前に行った時そんな所があったわね。」

偶然知っていた2人にアスカと我夢は感謝しつつ案内してもらう事に。

その頃、士は写真館に戻ろうと道を歩いていると足を止め大きな声を出す。

士「どこまでついてくるつもりだ、お前ら。」

士は後ろから跡をつけていた夢原のぞみ、キュアルージュこと夏木りん、キュアレモネードこと春日野うらら、キュアミントこと秋元こまち、キュアアクアこと水無月かれん、ミルキイローズこと美々野くるみの存在に気づいていた。

りん「先生があたし達の秘密を知ってるって聞いたからちよっと気になったのよ。」士「プリ

キュアの事か、何故知っているか気になってるなら教えてやる。」

6人に緊張がはしる。

士「俺は何でも知ってる男だからさ。」

6人は気が抜けるようにずっこける、まるで新喜劇だ。するといきなりりんは蜘蛛の糸に巻き付けられた。

りん「!!!、何!」

その後ろには蜘蛛人間のような者がいた、これが古代から蘇った怪人グロンギだ。

士「グロンギか、だが何故ここに・・・」

考えている内にりんはグロンギに引き寄せられる。

りん「くっ、はなして！」

のぞみ「りんち

やんが危ない！！みんな行こう！」

すると

4人はコンパクト型の変身アイテム、キュアモを取り出しダイヤルを入力。

「プリキュア・メタモルフォーゼ！！」

のぞみ、うらら、こまち、かれんは光に包まれプリキュアに変身した。

のぞみ「大いなる希望の力、キュアドリーム！」

うらら「はじけるレモンの香り、キュアレモネード！」

こまち「安らぎの緑の大地、キュアミント！」

かれん「知性の青き泉、キュアアクア！」

くるみは変身アイテム・ミルクィパレットを使った。

くるみ「スカイローズ・トランススレイト！！」

光に包まれ、くるみはミルクィローズに変身した。

くるみ「青い薔薇は秘密の印、ミルクィローズ！」

プリキュアはグロンギの蜘蛛の糸を素早く切り裂き、りんを助ける。

りん「よくもやったわね！」

りんもキュアモを使い変身した。

りん「情熱の赤い炎、キュアルージュ！」

士「お手並み拝見だな。」

グロンギは攻撃を仕掛ける、6人は素早くかわし攻撃を加える。ひるんだ隙にプリキュアは必殺技を繰り出す。

ドリーム「プリキュアシューティングスター！」

ドリームは光となり相手に突っ込む。

ルージュ「プリキュアファイヤーストライク！」

ルージュは炎の球をサッカーボールのように蹴る。

レモネード「プリキュアプリズムチェーン！」

光の鎖がグロンギの動きを止める。

ミント「プリキュアエメラルドソーサー！」

ミントは薄い円盤状の光を放つ。

アクア「プリキュアサファイアアロー！」

アクアは水を弓矢に変え、放つ。

ローズ「ミルキイローズブリザード！」

ローズは巨大な青い薔薇を打ち砕きブリザードを起こした。6人の攻撃はグロンギに直撃。

アクア「これで、一段落ね。」

ミント「そうね。」

しかし次の瞬間、倒したと思ったグロンギが立ち上がった。

ドリーム「そんな!?!」

ルージュ「あれだけの攻撃を受けたのに立つなんて!?!」

6人はグロンギの蜘蛛の糸の餌食になってしまった。

レモネード「くっ、切れません!」

ローズ「なんて力なの!?!」

グロンギは糸を持ち上げ、6人を地面に叩きつけた。

ドリーム「ああああ!?!」

ミント「このままじゃやられてしまつわ!?!」

レモネード「でも攻撃が効かないならどうしようもないですよ!?!」

ローズ「一体どうすれば!?!」

その時戦いを見ていた士がグロンギの前に立つ。

士「やれやれ、どうやらおれの出番らしいな。」

ルージュ「ちょっと、先生はやく逃げて！」

すると士はあるバックルを取り出し腰にあてるとベルトがのびバックルを装着した、そして横にあるケースからカードを取り出した。

ドリーム「何、あれ？」

士「よく、見ておけ、戦いのお手本を見せてやる。」

士は両手でバックルを開き、カードを持った手を前に突き出し叫んだ。

士「変身!!」

つづく

第7話 古代怪人 対 プリキュア（後書き）

次回、世界の破壊者登場です

第8話 デイクイド 対 プリキュア5 (前書き)

フレッシュ忘れてたあああ!!

第8話 デイケイド 対 プリキュア5

士はカードを指で裏返すとバックルに差し込む、バックルから低い機会音がなる。

「カメンライド・・・デイケイド!!」

士の周りに奇妙な影が現れた、それが士に集まりマゼンタ色に変わった。緑の複眼にマゼンタ色と白黒の姿、これが世界の破壊者・仮面ライダーデイケイドだ。

ドリーム「あれは!?!」

デイケイド「そこで休んで見てる。」

デイケイドはカードケースを剣に変形させる。グロンギに突っ込みなんの迷いもなく切りつける、グロンギは糸を吐き出しデイケイドの剣を持っている腕を固定した、デイケイドはカードを取り出しバックルに差し込む

「アタックライド・・・ブラスト!!」

デイケイドは剣を銃に変形させカードによってパワーアップした弾丸を浴びせる。

グロンギ「グオッ!」

デイケイド「とどめだな。」

銃をケースに戻し、デイケイドの紋章が書かれている金色のカードを取り出しバックルに差し込んだ。

「ファイナルアタックライド・・・デイディデイディケイド!!」
デイケイドの前に先ほどバツクルに差し込んだカードが無数に現れた、そして高くジャンプしカード目掛けてキックを繰り返す。これがデイケイドの必殺技・デイメンションキックだ。

しかし、もう一体グロンギが現れデイケイドに不意打ちをくらわす。

デイケイド「ぐあっ！チツ、調子に乗りやがって！」

デイケイドはクワガタのような絵が書かれているカードをバツクルに差し込んだ。

「カメンライド・・・クウガ！」

デイケイドは古代戦士・仮面ライダークウガに姿を変えた。

アクア「姿が変わったわ！」

ルージュー「どうなってんの!？」

デイケイド（クウガ）はそのグロンギにつかみかかり投げ飛ばした、そしてパンチやキックの連打を浴びせグロンギが弱ってきたところを狙い、クウガの紋章が書かれているカードをバツクルに差し込んだ。

「ファイナルアタックライド・・・ククククウガ！」

デイケイドの足にエネルギーがたまる、そのまま高くジャンプし空中回転した勢いでグロンギにキックを浴びせた。

グロンギの体に紋章が浮かび上がり爆発した。

ディケイド「ふう。」

ディケイドは元のディケイドの姿に戻った。その時、

ドリーム「やあー!!」

キュアドリームがディケイドに攻撃を仕掛けてきたのだ、間一髪攻撃をかわしたディケイドは言った。

ディケイド「おいつ、いきなり何すんだ!!」

ルージュ「どうしたの!? ドリーム!!」

ドリーム「さつき屋気楼出たでしょ? その時変な映像が頭に流れたの! あいつが学校を壊して世界を破壊しようとしていたの!」

5人は驚いた顔していた。そして・・・

ローズ「それが本当なら、戦うしかないわね。」

6人は戦闘体制に入る。そして土の仲間、光夏海がその様子を見ていた。

夏海「土君!!」

ディケイド「下がってる、なつみかん!」

そしてディケイドも戦闘体制に入る。

ディケイド「一度手合わせしたかったところだ、かかってきな。」

ディケイドは両手をパンパンとならす。プリキュアの6人はそれぞれ

れ別々に動き出した、ドリームとローズはデイケイドの前方から攻撃を仕掛けるがデイケイドはその攻撃を交わす

レモネード・ミント「たああ！」

デイケイドの後方からレモネードとミントが攻撃を仕掛けるがデイケイドは高くジャンプして交わす。しかしアクアとルージュがすでに上空で攻撃体制に入っていた。

ルージュ・アクア「やああ！」

デイケイド「何！？ぐあっ！！！」

攻撃はデイケイドに直撃、真下へ落下するがなんとか受け身をとるデイケイド。

デイケイド「大したチームワークだ、なら速攻でケリをつける！」

デイケイドはサメのような絵が書かれているカードをバツクルに差し込んだ。

「カモンライド・・・555（ファイズ）！」

デイケイドは赤い閃光に包まれ仮面ライダー555に変身した、すると何やら色と形が若干違う555のカードをバツクル差し込んだ。「フォームライド・・・アクセル！」

デイケイド（555）は目が黄色から赤に変わり、胸の装甲が肩パットのように変形した、デイケイドは腕に付いているブレスのボタンを押した。

「スタート・アップ」

じぶく

第8話 デイクイド 対 プリキュア5 (後書き)

次回、ある男の正体が判明します

第9話 決着、謎の青年（前書き）

ミスで削除してしまったので再投稿、急いで作ったので間違いがあるかもしれませんが、ご了承ください

第9話 決着、謎の青年

「スタート・アップ」

ディケイドの腕に付いているブレスから音声が鳴る、そしてドリムが瞬きをした時にはもうディケイドはいなかった。

アクア「どこ!?!」

その時、まだ着地していないアクアとルージュは赤い円錐形の物に拘束された。

ルージュ・アクア「!?!」

「ファイナルアタックライド・・・フアフアフアアイス!」

そして赤い円錐はドリル回転しながら拘束した2人に突き刺さる。

ルージュ・アクア「きゃあああ!?!」

ルージュとアクアはそのまま落下、ミントとレモネードがなんとか2人を受け止めた。

ディケイド「攻撃した後の隙が大きいぜ!」

そこには消えたと思っていたディケイドがいた、ディケイドは10秒間通常の1000倍の速さで行動できる仮面ライダー555・アクセルフォームにフォームチェンジしていたのだ。すると

レモネード「プリキュア・プリズムチェーン!」

レモネードは元の姿に戻ったデイケイドを光の鎖で拘束した。

レモネード「これであなたは、カードの力を使う事はできません！」
すかさずミントが

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー！」

エメラルドソーサーでデイケイドに攻撃を仕掛ける。しかし

デイケイド「あまい！」

デイケイドはエメラルドソーサーで鎖を切ったのだ。

ミント「そんな！」

デイケイドはカブトムシのような絵が書かれているカードをバツクルに差し込んだ。

「カメンライド・・・カブト！」

デイケイドは青い複眼に赤黒の体をした仮面ライダーカブトに変身し、またカードを使った。

「アタックライド・・・クロックアップ！」

デイケイドは555・アクセルフォームを超える速さで行動できるクロックアップ能力を使った。

ミント「また消えたわ！」

ディケイド「消えたんじゃない。」

レモネード「!!!」

ディケイドはミントとレモネードの後ろに立っていた。

ディケイド「速い動きにお前達がついてこれないだけだ!」

「ファイナルアタックライド・・・カカカカブト!」

ディケイドは必殺技・ライダーキックを2人に浴びせた。

ミント「くっ、」

レモネード「ごめんなさい。」

2人はその場に倒れた。

ドリーム「!!!、よくも!」

「カメンライド・・・ブレイド!」

ディケイドはさっきと違うカブトムシのような形をした仮面ライダー、ブレイドに変身した。

「アタックライド・・・マッハ!」

またディケイドは高速移動を始める。

しかしミルキイローズには考えがあった。

ローズ「いくら早く動いても全体攻撃には無力なはず!」

ミルクイローズは必殺技・ミルクイローズブリザードでブリザードを起こす。

デイケイド「考えたな、だが無駄だ！」

「アタックライド・・・メタル！」

鋼鉄のような体になったデイケイドにはブリザードは効かなかった。

「ファイナルアタックライド・・・ブブブブレイド！」

デイケイドはドリームに攻撃を仕掛けようとした。

ローズ「危ない！」

ローズはドリームを庇い、デイケイドの攻撃を代わりに受けてしまった。

ドリーム「ローズ！・・・絶対に許さない！」

デイケイド「やれやれ、まだ続けるのか。」

元の姿に戻ったデイケイドにドリームは攻撃を仕掛ける、その攻撃にデイケイドは多少押されている。

デイケイド「くそ、まずいな。」

ドリーム「とどめよ、プリキュア・シューティングスター！」

ドリームは光に身を包みデイケイドに突っ込む。

ディケイドは拳に全ての力を注ぐ、拳がマゼンタ色に輝く。

ドリーム「うわああああ！」

ディケイド「やああああ！」

辺りには衝撃がはしり、ディケイドとドリームは両方向に吹っ飛んだ。

ドリーム「くっ、・・・まだ」

ディケイド「や・・・るな」

2人は歩きながら近づいていく、まだ戦うつもりだ。しかしそこに

夏海「いい加減にしてください！」

夏海は親指を2人の首辺りに突き刺した。

ドストロス！

ディケイド「はははははははは、なつみかはははは！」

ドリーム「あはははは何するんではははは！」

笑いすぎたのか2人の変身が解けた。

夏海「土君は破壊者なんかじゃありません！」

のぞみ「・・・でも、私見たんです。ディケイドが全てを破壊するのを！」

「それは違う！」

誰かの声が聞こえた、ダイゴだった。
そこには、なきさ、ほのか、そしてひかりがいた。

のぞみ「三人共、どうしてここに!？」

「おい、ダイゴー！」

向こうから、アスカ、我夢、咲、舞が来た。

士「なんだかややこしいな、事情を説明してもらおうか。」

事情説明中・・・

士「誰なんだ？俺が破壊者じゃないって言ったのは？」

ダイゴは自分達に起こった事を話始めた。

数時間前・・・

ある青年が現れた。

青年「僕が説明しましょう。」

ダイゴ「君は？」

青年「僕は紅渡と言います。」

ひかり「あなたは何を知ってるんですか？」

渡「それを今から説明します。」

つづく

第10話 和解（前書き）

再投稿

第10話 和解

渡「あなたは今、ここは自分がいた世界とは違うと思いませんか？」

ダイゴ「ああ、見たことのない建物や風景、あきらかに違う。」

渡「それは違います、ここはまぎれもなくあなたがいた世界です、一部を除いては。」

ダイゴは驚いた。

ダイゴ「一部？どういう事だい？」

渡「ここは本来プリキュアがいる世界でした、しかしある侵略者がこの世界に現れ、プリキュア、仮面ライダー、ウルトラマンの世界を一つにしてしまったのです。」

なぎさ「どうして、その3つの世界を？」

渡「侵略者が世界征服に必要な人材を集めるためでしょう、ウルトラマンの世界では怪獣や宇宙人、仮面ライダーの世界ではショッカーなどの悪の秘密組織、プリキュアの世界ではエターナルやラビリンズなど悪の組織。」

ひかり「そんなに!？」

ほのか「それじゃあ世界征服なんて簡単すぎるじゃない!」

渡「落ち着いてください、まだ手はあります。」

ダイゴ「一体どんな？」

渡「全ての仮面ライダー、プリキュア、選ばれた8人のウルトラマンと協力するんです。」

ほのか「でも、何であなたがそんなことを？」

ほのか「が尋ねる。」

渡「僕も仮面ライダーの一人だからです。」

4人は驚いた、すると突然ステンドガラスのような模様をした怪人・ファンガイヤが現れた。

渡「くっ、世界のはざまにも奴らの手が伸びたか、キバット！」

すると機械型のコウモリが飛んできた、これがキバット・バット3世だ。

なぎさ「わっ、コウモリ！」

キバット「行くぜ渡〜！」

キバットは口を開き渡の手に噛みつく、渡の顔にステンドガラスのような模様が現れ、腰に赤いベルトが現れた。

渡「変身！」

渡はキバットをベルトに装着した、渡の姿はみるみる変わっていき何かが砕ける音が鳴り響いた、渡は吸血鬼をモチーフにした仮面ライダーキバに変身した。

キバ「あなた達はデイケイド・・・いや、土さんの所に急いでくださいー!」

ダイ

ゴ「そして気がついたら元の風景に戻っていて、なぜだか光写真館の居場所がわかっていたんだ。」

土「なるほど、大体わかった、つまり俺達は互いをつぶし合ってる場合じゃないって事だな。」

のぞみ「そうみたいですね・・・土先生、事情も聞かすみませんでした!」

土「いつもの事だ・・・慣れてる。」

土は得意げに話す、すると夏海が

夏海「そつだ、土君お客さんが家に来てます。」

土「俺にか?」

夏海はうなずく、土は写真館に戻ろうとした時、足を止めて言った。

土「立ち話もなんだ、一緒に来い。」

のぞみ「良いんですか?」

土「気にするな。」

ダイゴ「ありがとう、土。」

「・・・ちよっと」

士一同「？」

プリキュア5一同「私達の事・・・忘れてない？」

士一同「・・・あ。」

つづく

第10話 和解（後書き）

次回にフレッシュだすかもしれません。

第11話 休息（前書き）

フレッシュでます

第11話 休息

光写真館にて・・・

????「おかえり、おお今回は大勢来たね！」

彼の名は光荣次郎、夏海の祖父だ。

夏海「ただいまおじいちゃん、お客さんは？」

栄次郎「二階にいるよ、行ってあげなさい。」

士一同は二階の部屋へ行く。

その部屋には少女4人がいた、すると咲が

咲「ああっ！ラブに美希に祈里、それにせつなまで！」

無論知っているのは咲だけでなく、プリキュア全員が知っていた。
彼女達4人もプリキュアなのだ。

アスカ「君たちもプリキュアなの!？」

????「はい。あっ、事情はメールで聞いてます。」

この少女の名前はフレッシュプリキュアの
キュアピーチこと桃園ラブだ。

士「プリキュアってのも結構多いな、で俺
に何のようだ？」

口を開いたのはキュアベリーこと蒼及美希だ。

美希「その・・・何て言うか・・・。」

次に口を開いたのはキュアパインこと山吹祈里だ。

祈里「メガネをした変なおじさんがこの写真館に破壊者がいるって私達に言ってきたんです。」

士はため息をつき、言った。

士「鳴滝か・・・あいつ色々な所に俺の噂をながしやがって、それよりお前、何見てんだ？」

キュアパッションこと東せつなは士のマゼンタ色をしたカメラを見つめていた。

せつな「それ、カメラ？」

士「何だ？撮って欲しいのか？」

せつな「いえ、そういうわけじゃないわ。」

士「そうか。」

士は少しつまらなさそうに答えた。

のぞみ「そういえば、まだみんな自己紹介してないね！」

夏海「確かにそうですね。まずお互いを知ってこれからどうするか決めましょう。」

士達はそれぞれ自己紹介をし、今後の計画について話し合い、ひとまず解散した。

これから壮絶な戦いが始まる事も知らずに・・・

つづく

第11話 休息（後書き）

次回、奴ら登場かも。

第12話 復活！闇のプリキュア（前書き）

ダーク・プリキュア登場です。

第12話 復活！闇のプリキュア

・・・目覚めよ！！伝説の闇の戦士達よ！！」

「????」~~~~~

何者かが、伝説の黒き悪の戦士を蘇らせたのだ。

悪の戦士「全ては・・・のために。」

「???」「行け！プリキュア共を抹殺せよ！！」

士「おい、まだ買うのか!?!」

のぞみ「え?うん、いっぱい買ってみんなをびっくりさせちゃおうよ!」

のぞみは士やダイゴ達の歓迎会をしようと計画を立て、士と買い物に来ていたのだ。

士「買いすぎだろ、しかもいつから俺とお前はそんなに親しくなった?」
のぞみ「いいじゃん!学校では敬

語使ってるし。それより、次はあれを買おう!けって〜い!」

士「勝手に決めるな!!」

その時辺りは奇妙な風景に包まれた。

のぞみ「これは!？」

そしてメガネをかけた男が現れた。

士「またお前か、鳴滝。」

鳴滝「おのれ、ディケイド。この世界まで破壊するつもりか!？」

のぞみ「士先生は破壊者なんかじゃないよ!だって、怪物に襲われた私達を助けてくれたもん!」

士「のぞみ・・・」

鳴滝「まあ、いい。しかしこれだけは言っておく。貴様のせいで悪の戦士が蘇ってしまった。全て貴様のせいだディケイド!」

そして辺りは元の風景に戻った。

士「悪の戦士?」

のぞみ「士先生、あの人の言う事は気にしちゃダメだよ?」

士「わかっている。」

そして、光写真館にて・・・

こまち「では、士さん達とダイゴさん達がプリキュアの世界に来た事を記念に……」

一同「かんぱーい!!」

一同は楽しく飲み食いをしている。しかし士は隅っこで飲み物を飲み窓から空を見上げていた。

ダイゴ「どうしたんだ、士？」

のぞみ「なんか元気ないよ？」

士「……いや、なんだかな。本当に俺は破壊者ではないのかと思っ
てな。」

士は昼間鳴滝の言った言葉が気になっていた。悪の戦士が蘇ったという事だ。

士「俺がこの世界に来なければその悪の戦士は復活しなかったんだ
ろ? だったら……」

のぞみ「でも、そうじゃなかったら私達は出会わなかったんだよ？」

士「なに？」

ダイゴ「そうだ、僕は……いや僕達は士が破壊者だろうと何だろ
うとずっと仲間だ。」

士は気が抜けたのか、少し笑顔になった。

夏海「士君、いい笑顔です。そうだ三人共並んでください。士君のカメラで撮ってあげます。」

士、のぞみ、ダイゴは共に並び笑顔で写真を撮った。

のぞみ「士先生！この料理すごく美味しいよ！」

ダイゴ「これも、早く食べないとなくなる

よ。」

士「まったく、あんなに買ったんだ。そんな簡単に無くなるか。」

翌日

りん「昨日は楽しかったね。」

うらら「そうですね」

かれん「また機会があればやりましょう。」

こまち「そうですね！」

のぞみ「よしまた今度やるぞ〜！けつて〜い！」

くるみ「はしゃがないの！」

その時、6人の周りに爆発が起こった。

こまち「きゃあ！」

りん「何！？」

くるみ「向こうに何かいるわ！」

そこには謎の黒いローブを着た5人組がいた。

のぞみ「誰！？」

すると黒いローブを着た一人が口を開いた。

????「あら、忘れたの？」

のぞみ達はその声に聞き覚えがあった。

のぞみ「ま……さか……！」

その一人はローブを脱ぎ捨てた。

????「忘れるわけないわよね？大事な友達なんだから。」

のぞみ「ダーク・・・ドリーム！」

のぞみは目を疑った、かつて自分達を侵略者から守って消えてしまった、ダーク・ドリームが目の前にいたからだ。残りの4人もローブを脱ぎ捨てた。その4人は、ダーク・ルージュ、レモネード、ミント、そしてアクア、この5人こそかつてシャドウという侵略者がプリキュア5のデータを元に作りあげたダーク・プリキュア5だ。

のぞみ「そんな・・・どうして。」

ダーク・ドリーム（DD）は6人に言った。

DD「さあ、戦いをはじめましょう。」

つづく

第12話 復活！闇のプリキュア（後書き）

映画の時より強い設定でいきます。

第13話 プリキュア 対 プリキュア(前書き)

前もって

ダーク・ドリーム(DD)

ダーク・ルージュ(DR)

ダーク・レネード(DL)

ダーク・ミント(DM)

ダーク・アクア(DA)

て事で

第13話 プリキュア 対 プリキュア

DD「さあ、戦いをはじめましょう。」

のぞみは驚愕した。そこにりんが

りん「のぞみ！やるしかなさそうだよ！」

のぞみは戸惑ったが戦うしかないと思ったのか、キュアモを取り出した。

5人「プリキュア・メタモルフォーゼ！」

くるみ「スカイローズ・トランススレイト！」

6人はプリキュアに変身し戦闘体制に入る、するとDDが言った。

DD「そうそう、あなた達のおかげで私達も仲間の大切さを知ったの。」

ドリームはそれを聞いて少し気をぬいた。しかし

DD「仲間ってというのは……」

ドリーム「……！」

DDはドリームを押し倒した。

DD「自分のために使う大切な道具……でしょ？」

ルージュ「ドリーム！」

ルージュはドリームを助けようとしたが

DR「あんたの相手はあたしだろ！」

DRがルージュに攻撃を仕掛けた。気づけば全員が既に戦っていた。

レモネード「間違ってます！仲間は利用するための道具だなんて！」

DL「なにが？」

DLの後ろからDMが飛んで出てきた。DMは緑色の光球を何発も打ち出した。

ミント「危ない！」

間一髪ミントがシールドを張りレモネードは助かった。

DM「レモネード、あなたもじゃない。」

突然言われたレモネードは何の事かわからなかった。

DL「あなたも自分を守るために仲間の力を利用しているじゃない。」

ミント・レモネード「！！！」

アクア「はあああ!!」

DAはアクアの攻撃を何も動じずにかわす。

アクア「はあ、はあ。」

DA「もう疲れたの?」

アクア「そうだ、こいつらには疲れるって感情がないんだっ!」

すると上空からルージュが落下してきた。

ルージュ「う・・・」

アクア「ルージュ!大丈夫!」

そしてDRが上空から降りてきた。

DR「行くよ、DA。」

DA「ええ。」

2人はアクアとルージュに攻撃を仕掛ける。

アクア「プリキュア・サファイアアロー!」

アクアは水の矢を同時に三本DAとDRに向けて放つ。

しかしその時、DRがDAを盾にしたのだ。

ルージュ「!!、なんて事を!!」

DRはサファイアアローを直撃、その後ろからDRが攻撃を仕掛ける。

DR「ダークネス・ファイヤー!!」

アクア・ルージュ「きゃああ!!」

ミントとレモネードはDLとDMの言葉に惑わされ隙を作ってしまった。その際に2人は攻撃を仕掛ける

DM「ダークネス・スプレッド!!」

DL「ダークネス・フラッシュ!!」

ミント・レモネード「!!」

ミントとレモネードは攻撃を直撃してしまった。2人はその場に倒れこむ。

レモネード「私は・・・仲間を利用した?」

ミント「くっ、体が動かない。」

ローズ「やあ!!」

ローズはドリームと共にDDと戦っていた。DDは2人の攻撃を軽々とかわす。

ドリーム「違う!利用するのが仲間だなんて間違ってる!!」

DD「なにが？なにが間違ってるの？」

ローズ「いい加減にして！」

ローズは必殺技を繰り出す。

ローズ「ミルクイローズ・ブリザード！」

しかしブリザードさえも軽々とかわすDD。

ローズ「!？」

DD「そんな攻撃じゃ、私は倒せないわよ。」

DDはいつの間にかローズの間近にいたのだ、そしてローズにエネルギー弾を浴びせる。

ローズ「きゃああ！」

ドリーム「ローズ！、DDどうして？私達はあの時、友達に仲間になってくれたじゃない！」

DDはつまらなさそうな顔をして言う。

DD「だから、言ったでしょ？仲間は利用するための道具だって。」

DDは瞬間的にドリームの間近に接近し蹴りをドリームのふところに浴びせ、ふらついたところをまた蹴りを繰り出し、その蹴りはドリームの頭に直撃した。

ドリーム「ああ！」

その場に倒れ込むドリーム、DDはドリームの胸を思いっきり踏みつけながら言った。

DD「あなたがやってるのは、弱い者同士の馴れ合いでしかないの。仲間を利用する事で人は強くなれるの。」

ドリームは苦しそうに言う。

ドリーム「違う・・・そんなの・・・仲間じゃ・・・ない。」

DDは足にさらに力を入れ、ドリームを押しつぶそうとする。

ドリーム「く・・・あつ・・・」

DD「終わりよ、さよならドリーム。」

しかしどこからか声が聞こえた。

「それはかわいいそうだな。」

つづく

第13話 プリキュア 対 プリキュア(後書き)

次回、決着です

第14話 本当の仲間（前書き）

オリジナル必殺技発動です。士がダークプリキュアに大変な説教をしたそうです。

第14話 本当の仲間

「それはかわいそうな事だな。」

DDは声のする方を向いた。

そこには、士がいた。そしてこっちに向かって歩いてくるのだ。

ドリーム「士・・・先生！」

DD「見ない顔ね、それにかわいそうって何が？」

DDの問いに士は口を開いた。

士「仲間というのは、時に互いに悲しみあい憎しみあったりする、
だがそうなたとしても互いに励ましあい、許し合う心を持つ者同
士の事を仲間と言うんだ。」

ドリーム「互いを・・・」

ルージュ「励ましあい・・・」

レモネード「許し合う心を・・・」

ミント「持つ者同士が・・・」

アクア「本当の・・・」

ローズ「仲間・・・。」

DD「何が言いたいの!!」
士「お前達が生きているのは、仲間という言葉を使っただけの……ただのお遊びだ!!」

DDは士を睨みつけながら言った。

DD「あんた！一体なんなの!？」

士はバックルを装着、カードを前に突き出しながら答えた。

士「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えて

おけ!!」

DD「!!」

士「変身!!」

士はカードをバックルに差し込み、両手でバックルを閉じた。

「カメンライド……デイケイド!!」

デイケイドはダークプリキュアに攻撃を仕掛ける。

DR「あたし達があんたなんかには負けるか!」

DRは連続蹴りを仕掛けたがデイケイドはそれを軽々とかわし、一瞬の隙に攻撃をした。

デイケイド「遅い!」

DR「くっ、バカな!」

DM「ダークネス・スプレッド！」

緑色の光球がディケイドを襲う。

ディケイド「なっ！ぐあっ！」

ディケイドはその攻撃に吹っ飛ばされた。

DR「よくも、こけにしてくれたわね。これで終わりだあ！」

DRは手から黒い炎の鳥を出しディケイドに放つ。

だがDRだけでなく、他のダーク・プリキュアも必殺技を繰り出した。
てきた。

ドリーム「危ない！」

プリキュア5とミルキィローズは必殺技を繰り出した。

プリキュア5「プリキュア・レインボー・ローズ・エクスプロージ
ョンー！」

ローズ「ミルキィローズ・メタル・ブリザード！」

それぞれの必殺技は激しくぶつかり合う。だが少しだけダーク・プリキュアの必殺技が押し勝ってしまった。残った威力がディケイドとプリキュア達を襲う。

ディケイド「ぐあああああつ！」

プリキュア「きゃああ！」

ディケイドとプリキュアは互い吹っ飛ばされた。

DD「何が本当の仲間よ！仲間は利用する事に意味があるのよ！」

ディケイドとプリキュア達はなんとか立ち上がり、ドリームが言った。

ドリーム「ううん、違うよ。」

DD「何ですって！」

ドリーム「仲間は利用するんじゃくて、信じるんだよ。仲間を信じればそれが自分の力になるの！」

ディケイド「・・・なるほどな。」

DD「くだらない！信じるなんて時間の無駄よ！」

ディケイド「仲間を信じる事のできないお前達には、わからないだろうな。俺達は仲間を信じる事で数多くの戦いを戦い抜く事ができた、今の自分がいるのは仲間が自分を支えてくれたからだ！・・・そうだろ？」

ドリーム「うん！」

するとディケイドのカードケースから二枚のカードが出てきた。それは何も書かれていない状態からある絵が書いてある状態に変わった。

た。

デイケイド「これは・・・!?!」

デイケイドはバツクルにそのカードを差し込んだ。

「ファイナル・フォームライド・・・ドドドドドリーム!」

デイケイド「ドリーム、ちょっとくすぐったいぞ。」

ドリーム「へ?」

デイケイドはドリームの背中をトンと叩いた。するとドリームの体は光輝き背中から七色の蝶の羽が生えた。

ドリーム「なっ!なにこれ!?!」

ルージュ「ド、ドリーム!?!」

レモネード「すごいです!」

ミント「ドリーム、すごくキレイ!」

アクア「関心してる場合じゃないでしょ!」

ローズ「それ

デイケ

イド「これが俺とお前の力だ!ドリーム、手を奴らに向けて突き出せ!」

ドリームは手を突き出した、すると白色を光がダーク・プリキュアを包む。

DD「あああっ!」

するとダーク・プリキュアの姿はみるみる変わっていき、気づけばそこにはダーク・プリキュアはいなく五体の怪人がいた。

ミント「これはどういう事!?!」

デイケイド「なるほど、奴らはダークプリキュアに化けていたって事らしい。」

ドリーム「友達になりすまして悪さするなんて・・・許せない!行こう、士先生!」

デイケイド「よし、やるか!」

デイケイドはカードをバツクルに差し込んだ。

「ファイナル・アタックライド・・・デイデイデイケイド!」

デイケイドはさらにもう一枚カードを差し込んだ。

「ファイナル・アタックライド・・・ドドドドリーム!」

デイケイドの前にはデイケイドの紋章が刻まれたカードが、ドリームの前には七色に輝くバラの花がならんだ。

ドリーム「プリキュア・デイメンションスター!」

デイケイド「はああああ!」

2人は目の前の物を貫きながら怪人に突っ込み、その攻撃は怪人五体を一撃で吹き飛ばした。

デイケイド「やったな。」

ドリーム「ありがとう、土先生・・・大切な事教えてくれて。」

土「そんなたいそうな事をした覚えはない、気にするな。」

ルージュ「そんな事言っちゃって、顔が赤いわよ!」

レモネード「あっ!本当です。」

ミント「土先生、かわいいですね。」

アクア「素直になればいいのに。」

ローズ「本当にね。」

土「ノノノ。う、うるさい!」

つづく

第14話 本当の仲間（後書き）

次回、何だすか考え中・・・

第15話 若き戦士（前書き）

ついに平成組がそろいます。

舞「アスカさんが勝ったああ！」

我夢「お疲れ様アスカ、仕事で見に行けなかったけどテレビで見
かり見たよ。」

咲「アスカさんすごいですよ！」

舞「あんな速い球投げるピッチャー初めて見ました！」

アスカ「いや、みんなのおかげだよ。ありがとう！」

4人は近くのファミレスでアスカの勝利記念会をしていた。

我夢「アスカは投球も食べる量も人一倍だからね。」

咲「本当にたくさん食べますね！」

舞「咲、それ人の事言えない。」

咲「ありゃ？」

「ハハハハッ！」

たわいのない笑い声が響く中、なにやら地響きがなりだした。

アスカ「なんだ？」

嫌な予感は的中、外にはどくる怪獣・レッドキング、キングジョーが町で暴れていた。

咲「わっ！怪獣！」

アスカ「たくっ！少し休ませろよ！」

アスカは不機嫌そうにファミレスから外に出て変身アイテム・リーフラッシャーを取り出した。

我夢「一人じゃ危険だ！僕も行く！」

我夢も怪獣と戦うために変身アイテム・エスプレンダーを取り出した。

アスカ「ダイナアアアア！」

我夢「ガイアアアア！」

リーフラッシャーとエスプレンダーが光輝き、2人はウルトラマンダイナ、ウルトラマンガイアに変身した。

咲「私達も行こう！」

舞「うん！」

2人は手を繋ぎ、クリスタル・コミュニケーションを使った。

咲・舞「デュアル・スピリチュアルにパワー!!!」

2人は光に包まれる。

咲「花開け！大地に!!!」

舞「羽ばたけ！空に!!!」

そして2人の姿が変わった。

セリフ省略・・・(長い。)

ブルーム「なんか省略させられちゃったけど、これで戦える!」

イーグレット「ウルトラマンを援護しなきゃ!」

ブルームとイーグレットはウルトラマンの援護に入る。

ダイナ(おらっ!くらえ!)

ダイナは力でレッドキングを殴り飛ばした。レッドキングは倒れる寸前に岩石を口から吐き出したがブルームがそれを打ち砕いた。

ブルーム「いったく、けっこう固いわね。」

ガイアはキングジョーに攻撃するが鋼鉄の体にはビクともしない。
イーグレットはキングジョーの攻撃からガイアを必死に守る。

ガイア（こうなったら・・・）

ガイアはポーズをとると体が赤く光輝き、赤、黒、青、銀の体をした最強の形態、ウルトラマンガイア・スプリームバージョンになった。

先ほどのガイアとは速さは劣るがパワーは桁違い、キングジョーの体を拳で貫いた。そしてキングジョーをレッドキングのところに投げ飛ばした。

ダイナ（行くぜ！）

ガイア（よし！）

ブルーム「行こう、イーグレット！」

イーグレット「うん！」

ダイナは腕にエネルギーを貯める。

ガイアは左手を胸に付け、右手を空に掲げる。そして左手を前に突き出し右手を大きく回し次に両手を大きく回す、ガイアに膨大なエネルギーがたまる。

ブルーム「大地の精霊よ・・・」

イーグレット「大空の精霊よ・・・」

イーグレット「今、プリキュアと共に！」

ブルーム「奇跡の力を解き放て！」

2人は腕を前に突き出した。

プリキュア「プリキュア・ツイン・ストリーム・・・」

ダイナは十字に腕を組みソルジェント光線を放ち、ガイアは両手を上下にスライドさせ最強の必殺技・フォトンストリームを放つ。

プリキュア「スプラーツシューー！！」

プリキュアは腕から光を放つ、怪獣はその攻撃に吹き飛んだ。

4人は変身を解いた。

アスカ「ふう、やっと休めるぜ。」

舞「お疲れ様。」

咲「どうしたんですか？我夢さん。」

我夢（あの怪獣がいとも簡単に・・・また嫌な予感がする。）

.....

????「くくくつ、貴様らの力いただいたよ、あとはもう少し時間を稼いでもらうためにあいつを送り込もう。」
不気味な声をした何者かが何かを企んでいた。

翌日

咲とアスカはキャッチボールをしていた。

アスカ「今日は何も起こらないな。」

咲「まあ、平和が一番ですよ。」

我夢「アスカ！咲！大変だ！！」

我夢が慌てて2人のところに来た。

アスカ「どうしたんだよ我夢。」

我夢「空を見て！」

咲「空？」

2人は空を見上げた、そこには3つの頭をした金色の体をした怪獣・キングギドラ（友情出演）が空を舞っていた。

アスカ「怪獣!?!」

咲「舞！・・・舞は！？」

我夢「さつき買物に行ったきりなんだ！早く探そう！」

一方舞は

舞「そんな、咲がいなきゃ変身できない！」

キングギドラは3つの頭から火球を吐き出し町を襲う。

人々「うわあああ！早く逃げろ！！」

舞「私も今は逃げないと！！」

しかしなぜかキングギドラは舞を集中的に攻撃してくるのだ。

舞「もしかして私を狙って！？きゃあ！！」

舞はキングギドラの攻撃に巻き込まれた。

舞（くっ、早く逃げなきゃ・・・）

しかし足がすくんで立つ事ができない。

キングギドラは舞に向けて火球を吐いた。

舞「きゃああああ！！・・・あれ、生きてる何で！？」

なにやら舞の周りは暗くなっていた、舞は恐る恐る上を見上げた。

舞「えっ！？・・・まさか!？」

そこにはティガ、ダイナ、ガイアでもない巨人がいた。
赤、銀、胸にはひし形のランプのような物、金色のライン、腕には
不思議な形をしたブレス。

それはウルトラマンの故郷、光の国の若き戦士・ウルトラマンメビ
ウスであった。

つづく

第15話 若き戦士（後書き）

咲「ねえ、何でセリフ省略したの？」

作者「え！？長いからだけど。最初の方でちゃんと言ったからいいじゃない！」

舞「セリフほど大切なものはないのよ？」

作者「2人共なんか目が怖いよ？えっ、ちよっ、まっ、ぎゃあああああ！！！！」

咲・舞「もう省略しない？」

作者「はい……。」

第16話 異次元（前書き）

少し短め？です。

第16話 異次元

舞「ウ・・・ウルトラマン!?!」

メビウスはキングギドラに向かって飛びつき攻撃を仕掛ける。しかし一つの頭に精一杯、残りの二つの頭の奇襲攻撃を受ける。メビウスはいったんそこから離れる、キングギドラは火球を吐いた。メビウスは腕に付いているブレスから光の剣・メビウスブレードを出し火球を全て切り捨てた。

舞「すごい・・・って、感心してる場合じゃない。どこかで様子を見ないと!?!」

舞はある建物の屋上に上り戦いを見守る。

メビウスは剣から光の刃を放ち、キングギドラの攻撃を停止させた。キングギドラに隙ができた。

メビウスはブレスに手を当て両手を横に大きく開いた、そして両手を上に掲げエネルギーをため十字にくみ黄色がかつた光線を放つ。これがメビウスの必殺技・メビウムシュートだ。キングギドラはその場で爆発した。

舞「やった!」

メビウスは光に包まれ、舞の前に青年の姿で舞い降りた。

舞「あの・・・あなたは?」

青年「ヒビノミライです、この世界のことは聞いています。」

ミライはウルトラの父からこの世界の事を聞いていた。

舞「あなたもウルトラマンなんですね？」

ミライ「はい、それよりまずは下に降りましょう。」

2人は建物から外に出た、そこには

咲、我夢、アスカがいた。

アスカ「お前！！ミライじゃねえか！？」

我夢「どうしてここに？」

ミライ「ウルトラの父からこの世界の危機を聞いてやってきました。」

舞は咲に事情を説明した。

咲「あの、舞を助けてくれてありがとうございます！」

ミライは少し照れてしまった、その時謎のワームホールが5人の前に現れた。

アスカ「なっ！なんだ！？」

咲「吸い込まれる！！」

ミライはなんとか助かったが4人はワームホールに吸い込まれてしまった。

我夢「ミライ！！写真館に行くんだ！」

我夢は吸い込まれる直前にミライにそう伝えワームホールごと消えてしまった。

ミライ「みんな!!!・・・写真館に行かなきゃ!」

ミライはなぜかその場所がわかった。

ミライ「ダイゴさん!?!」

ダイゴはちょうどよく写真館に来ていた。

ダイゴ「ミライ!?!どうして・・・」

咲「・・・!?!、ここは!?!」

舞「咲!気がついたのね?」

そこにはすでに目が覚めていた三人がいた。

アスカ「さっきの一体何だったんだ?」

我夢「わからない、でもわかるのは、ここは別の次元だって事だ。」

その光景、空は紫色に渦巻き、そこに地面が広がっているだけの不気味な光景だった。

舞「少し様子を見ましょう。」

その時、不気味な声が響いた。

???「はっはっはっ、ついに来たなウルトラマン！そしてプリキユア！」

咲「何！？なんなの!?!」

アスカ「来たって、お前が連れて来たんだろ!?!」

???「まあ、いい。貴様らに素晴らしいプレゼントがある。ゆっくり絶望の時を楽しんでくれ。」

そこに、怨念怪獣・EXタイラントが現れた。

アスカ「くそっ！ダイナアアア!?!」

我夢「ガイアアアア!?!」

2人はウルトラマンに変身した。

咲・舞「デュアル・スピリチュアル・パワー!」

2人はプリキュアに変身した。

ダイナはソルジェント光線、ガイアはクァンタム・ストリームを放ち、プリキュアはプリキュア・ツイン・ストリームスプラッシュを放つ。

しかしタイラントは腹の口のような物で光線を吸い込んでしまった。

ダイナ（何！？）

ガイア（光線が効かない！？）

ブルーム「どうすれば・・・」

イーグレット「何か来る！」

タイラントは吸い込んだ光線を全て打ち返した。

ダイナ（グアアアア！）

ガイア（うあああああ！）

ブルーム・イーグレット「きゃあああああ！」

絶対絶命のピンチに4人はどうなるのか。

つづく

第16話 異次元（後書き）

次回、あれが登場です。

第17話 勝利を信じる心(前書き)

ついにあの2人が登場です

第17話 勝利を信じる心

ダイナ（まずいぜ・・・このままじゃ。）

ガイア（まず大きさからして桁違いだ。）

ダイナ、ガイア、ブルーム、イーグレットはウルトラマンの倍以上の大きさをした怪獣・EXタイラントに苦戦していた。

ブルーム「あきらめちゃダメ！」

イーグレット「みんなの力を信じて！」

ダイナ（わかってるよ、本当の戦いは・・・これからだぜ！）

ガイア（行くぞ！）

ブルームとイーグレットはタイラントのバランスを崩すために足を集中的に攻撃する。

ブルーム「はあああ！」

イーグレット「えええい！」

タイラントはバランスを崩し、その場に崩れ落ちた。

ダイナの額のクリスタルが輝き、パワー重視のストロングタイプになった。
ダイナ（おおおるあああ！！）

ダイナはその力で立ち上がるとうとするタイラントの顔面を殴りつけ

その場に叩きつけた。

ガイアは最強のスプリームバージョンになり、ダイナと同様にタイラントをその場に叩きつけた。

ダイナ（とどめだ！）

その時タイラントは手に付けている鎖でダイナを捕らえた。
タイラントはダイナを振り回し、ガイア、ブルーム、イーグレットを巻き込んだ。

ガイア（ぐあっ！）

ブルーム、イーグレット「きゃあー！！」

タイラントはお返しとばかりにダイナをその場に叩きつけた。

ダイナ（うあっ！）

タイラントはガイアにも同じことをしようとしたが、ガイアは空を飛び、鎖をかわす。しかしタイラントは腹の口のようなところから冷凍ガスを上空のガイアに浴びせる。ガスは広範囲に広がるためガイアでもかわしきれなかった。

ガイア（か・・・体が・・・動かない。）

氷が溶けたがガイアはその場に落下した。ダイナとガイアの胸のランプは青から赤に変わり点滅しだした。

ブルーム「こうなったら・・・やろう！イーグレット！」

イーグレット「うん！」

ブルームとイーグ

レットは必殺技の体制に入る。

イーグレット「精霊の光よ！命の輝きよ！！」

ブルーム「希望へ導け！2つの心！！」

ブルーム・イーグレット「プリキュア・スパイラル・ハ
ート・スプラッシュ！」

ハート型のエネルギーがタイラントに放た
れる。

タイラントは苦しみだす、しかしそれもつかの間攻撃を打ち消し、
口から炎を吐き出した。

ブルーム「そんな！？」

イーグレット「きゃああああ！」

????「はっはっはっ、これで我々の勝利だ、とどめをさせ！！」
タイラントは立ち上がるうとするダイナとガイアに攻撃を仕掛ける。

ブルーム「ああっ！アスカさんと我夢さんがっ！」

イーグレット「やめて・・・やめてええええ！！」

????「大切なのは・・・」

ブルーム「!?!」

イーグレット「誰!?!」

ブルームとイーグレットの後ろには男が2人立っていた。

男1「どんな絶望に立たされても勝利を目指して、戦うことだ。」

男2「信じる心、その心さえあれば・・・不可能を可能にする。」

ブルームとイーグレットは前にアスカと我夢が言った言葉を思い出した。

咲「アスカさん。」

アスカ「どうした?」

咲「アスカさんは試合中に怖くなった事ってありますか?」

アスカ「ないよ、だって自分の周りには自分を支えてくれる仲間がいるからね、どんな状況になっても勝利を目指して戦う!って先輩から言われたから。」

舞「我夢さんは夢をあきらめた事ってありますか?」

我夢「うん、あるよ。捨てたというより捨てかけたが正しいかな？」

舞「捨てかけた？今でも夢を追いかけてるんですか？」

我夢「ああ、夢を捨てたと思ってたけどやはり捨てきれなかった。

その時にある先輩に教えてもらったんだ。信じる心さえあれば不可能を可能にできるって。」

ブルーム「あなた達はもしかして・・・」

イーグレット「アスカさんと我夢さんが言ってた・・・」

男1「俺は郷秀樹。」

男2「俺の名前は北斗星司だ。」

すると郷は何かを念じるように右手を空に掲げた。

北斗は胸の辺りで手をクロスさせ、ゆっくりと腕を回し瞬時に両手に付けている指輪を接触させる、

2人は光に包まれる。

ダイナ（くそっ、まずいぜ！）

ガイア（このままじゃー！）

タイラントは鎖を出しダイナとガイアにとどめをさそうとしたその時・・・

「????「なっ!?なんだ!?!」

タイラントの前に謎の光が2つ現れた。

ダイナ（あれは・・・）

ガイア（まさか!?!）

そこには郷秀樹が変身したウルトラマンジャック、北斗星司が変身したウルトラマンエースが立っていた。

「????「エースにジャックだと!?!」

エース（いい加減姿を現せ、ヤプール!?!）

ヤプール「・・・どうやら隠しても仕方がないようだな。」

謎の声の正体はエースの宿敵・異次元人ヤプールだった、ヤプールの姿を現した。

ダイナ（よかった、来てくれたんですね!?!）

ジャック（兄弟のピンチを放っておくわけにはいかないからな。）

ガイア（来る!?!）

エース（行くぞ!?!）

4人は空を飛び旋回する。

ヤプール「冷凍ガス発射だ！」

しかしタイラントはプリキュアの援護攻撃によりヤプールの命令に集中出来ない状態だった。

ブルーム「やらせない！」

イーグレット「大切な人達のために！」

ヤプールはプリキュアに向けて光のムチを出し攻撃を仕掛けようとするがそのムチはエースの切断技・ウルトラギロチン、ジャックの切断技・ウルトラスラッシュによって切断された。

タイラントは鎖を出そうとするがガイアのクアンタムストリームで阻止され、ストロングタイプのダイナに殴り飛ばされた。

エース（今だ！）

ジャック（このチャンスを逃すな！）

ダイナ（やってやるぜ！）

ガイア（行くぞ！）

ブルーム「イーグレット！」

イーグレット「うん！」

ダイナは元の姿に戻りエネルギーをためソルジェント光線をガイアはフォトンストリームを放つ。

イーグレット「精霊の光よ！命の輝きよ！」ブルーム「希望に導け！2つの心！」

ブルーム・イーグレット「プリキュア・スパイラル・ハート・スプラッシュユ！」

ブルームとイーグレットは必殺技を放つ。

ジャックは腕を十字に組み必殺技・スペシウム光線を放つ。

エースは両手を左側に大きく降りL字に組み、七色の光線・メタリウム光線を放つ。

ヤプールは逃げるようにその場から消えた。

全ての攻撃はタイラントに直撃、腹の口のような物で吸収するがそのあまりのパワーに吸収しきれずにタイラントはその場で爆発した。

エース（さあ、ここから出よう。）

ジャック（仲間が待っている。）

ダイナ（ヤプール・・・今度あったらぶっ飛ばしてやるぜ！）

ブルーム「でも、どうやってここから出るだろう。」

イーグレット「確かにね。」

エース（俺達にまかせてくれ！）

エースとジャックは手から七色の光線を出し、次元に元の世界に通じる入口を作った。

ブルーム（す．．．すごい。）

ガイア（よし、行こう！）

ブルームとイーグレットはダイナの手に乗り、6人はその入口に入ってしまった。

つづく

第17話 勝利を信じる心（後書き）

次回、なにがでるかわかる人達はわかると思います。

第18話 ウルトラマン死す!?(前書き)

では本編へ

第18話 ウルトランマン死す!?

アスカ達が異次元で戦いを終え、元の世界に戻ろうとしている一方・

ダイゴ「つまり、4人は別の次元に飛ばされたかもしれないって事？」

ミライ「はい、助けに行きたいのですがその次元にどうやったら行けるのか・・・」

士「あいつらの事だ、うまくやってるだろ。心配するな。」

ダイゴ「あの4人を信じよう、戻ってくるまで僕達は僕達にできる事をしよう。」

ミライ「ダイゴさん・・・GIG!」

ミライは目が覚めたように笑顔でそう答えた。その時外から笑い声と心配するような声が聞こえてきた。なぎさ達だ。

なぎさ「ヤッホー!」

ほのか「ちよっとなぎささ!」

ひかり「危ないですよ!」

なぎさは自転車で走りまわっていた。

なぎさ「大丈夫、大丈夫！・・・ってあれ！？」

ブレーキをかけるがなぜかブレーキがかからない。

なぎさ「ちょっと！何で！？・・・きゃあ！」

なぎさは建物の壁に激突、自転車ごとひっくり返った。

ほのか「なぎさ！？」

ひかり「大丈夫ですか！？」

なぎさ「いたたた、もうありえない！！」

どうやら自転車のブレーキが壊れていたみたいだ。

なぎさ「あゝあ、どうしよう。」

ダイゴ「まかせて、良い自転車屋さんを知ってるから。」

ミライ「ダイゴさん、まさか！？」

ダイゴ「そう、あそこ。」

なぎさ達「????」

なぎさ達はとりあえずダイゴについていった。

ほのか「ダイゴさん！結婚してたんですか!？」

ダイゴ「う、うん。小さいけど娘もいるし・・・」

なぎさ達「ええええええええ!!」

ハヤタ「自転車直ったよ。」

なぎさ「あっ、どつもありがとついでいます。」

なぎさ「すごい！まるで新品みたい!!」

ミライ「さすがハヤタ兄さんだ。」

ひかり「あれ!?!いたんですか?」

ミライ「台詞なかっただけでちゃんといました。」

すると誰かのお腹がなる音があった。

ダイゴ「誰?」

ひかり「私じゃないです、なぎささん?」

なぎさ「違つわよ!ミライさん?」

ミライ「ち、違います!」

ほのか「……………」

そこには顔を赤くしたほのかがいた。

ほのか「ごめんなさい……………」

なぎさ「なんだ、ほのかか。」

ダイゴ「もう昼か……僕がおごるよ、おすすめの店があるんだ。」

なぎさ「本当ですか!？」

なぎさは目を輝かせて言った。

ミライ「どこに行くんですか?」

ダイゴ「知り合いがやってるカレー屋……………」

ミライ「僕も行きます!」

ほのか「即答!？」

ミライはカレーが大好きらしい。

ダイゴ「すみません。」

「????」おお、ダイゴにミライ！そちらは？」

ダイゴ「この間言った、例の・・・」

ミライ（あれ？なんだろ、デジャブを感じる。）

ダイゴ「この人はこのカレー屋を経営してるモロボシ・ダンさん。」

ダン「ダイゴ、いつものでいいかな？」

ダイゴ「はい。」

5人は昼食をすませとりあえず写真館に行く事にした。

なぎさ「あゝ、もうお腹いっぱい！」

ほのか「すごく美味しかったわね。」

ひかり「また来ましょう。」

ダイゴ「気にいってくれて何よりだよ。」

その時ミライは何かを感じとった。

ミライ「ダイゴさん！なにか来ます！」

ダイゴ「え!？」

次の瞬間、地底から怪獣・ゴルザが現れた。

ダイゴ「ゴルザ！・・・ミライ行こう！」

ミライ「はい！」

ミライは腕を構えるとブレスが現れた、そのブレスに手を当て瞬時に斜め下にふり下ろす。ブレスが燃え上がる、そして腕を空に突き出した。

ミライ「メビウス！！！」

ダイゴ「ティガアアアアア！！！！！」

ミライはウルトラマンメビウスに

ダイゴはウルトラマンティガに変身した。

なぎさ「ほのか、ひかり！行くよ！」

ほのか「うん！」

ひかり「はい！」

なぎさとほのかは手を繋いだ。

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」

ひかり「ルミナス・シャイニングストリーム！」

三人はプリキュアに変身した。

ホワイト「闇の力の下部達よ！」

ブラック「とつととお家に帰りなさい！」

ルミナス「光の心と光の意思、全てを一つにするために！」

ティガとメビウスはゼペリオン光線、メビウムシユートを放つ、しかしゴルザは光線を体内へ取り込んでしまった。

メビウス（そんな！？）

ティガ（しまった！）

ブラックとホワイトはゴルザの腹目掛けて殴りつけた、ゴルザは少し苦しんだがすぐに体制を整えブラックとホワイトを振り払った。

ブラック・ホワイト「キヤア！」

ゴルザはメビウス目掛けて頭から紫色の光線を放った。

メビウスはシールドを張り光線に耐え続ける、ティガはその隙に上空に飛びハンド・スライサーを放つがゴルザは光線の的をいきなりティガに変えた。

メビウス（！？）

ティガ（なっ！）

光線はハンド・スライサーを簡単に押し返した、ルミナスは急いでティガのもとに向かいシールドを張る。

ルミナス「くっ！なんて強い光線！」

その隙にブラックとホワイトは手を繋ぎ手を上に掲げ呪文のようなモノを唱えた。

ブラック「ブラック・サンダー！」

ホワイト「ホワイト・サンダー！」

黒い稲妻がブラックの手に

白い稲妻がホワイトの手に宿った。

ホワイト「プリキュアの美しき魂が！」

ブラック「邪悪な心を打ち砕く！」

ブラック・ホワイト「プリキュア・マーブル・スクリュー！」

手を前に突き出し一旦突き出した手を戻した。

ブラック・ホワイト「マックスー！」

再び手を突き出し、黒と白が混じった衝撃波がはしる。

その衝撃波はゴルザに直撃、ゴルザは攻撃を中断した。

ブラック「今よ！」

ティガとメビウスは再び光線を放ちゴルザを倒した。

ホワイト「やった！」

ルミナス「やりました！」

しかしメビウスとティガは突然出現した謎のカプセルに閉じ込めら

れた、プリキュアは突然の事に驚きを隠せない。

メビウス（これは！？）

ティガ（まさか！？）

カプセル内にガスが発生し、ティガとメビウスを苦しめる。

ブラック「何！？」

ホワイト「あれは一体！？」

ルミナス「ああ！！ウルトラマンが！！」

ティガとメビウスを閉じ込めたカプセルな消え、中から銅の塊・ブロンズ像になってしまったティガとメビウスが出てきた。

ホワイト「ミライさんとダイゴさんが！」

すると空から黒い渦が降り立ち、宇宙人が現れた。

????「計画通りだ。」

ブラック「あんた！何なの！？」

????「我が名はヒッポリト、この世界は今から我々の物だ！」

ルミナス「ふざけないでください！この世界は渡しません！」

ヒッポリト「ウルトラマンを倒した我に貴様らごときがかなうとで

も言っのか？」

ヒツポリトはプリキュアをバカにした言い方で答えた。

ヒツポリト「まあ、良い。じっくり滅びの時を味わうがいい。」

不気味な笑い声と共にヒツポリトは消えた。

ブラック「まちなさい！」

ホワイト「ブラック！まずはみんなに事情を説明して体制を整えましょう！」

ルミナス「今の状態での戦闘は無理です！」

ブラックは少し悔しそうにしたが、一旦写真館に戻る事にした。

つづく

第18話 ウルトラマン死す!?(後書き)

ウルトラマンどうなる!?

第19話 みんなの声（前書き）

訂正版・投稿

第19話 みんなの声

士「あいつらが負けたのか。」

なぎさ達は先ほどの事を説明した。

ほのか「はい、何か銅の塊になってしまつて。」

夏海「土君、どうするんですか?」

士「なんとかなるだろ、心配するな。」

ひかり「そつでしようか?」

翌日

大雨が降る中、ティガとメビウスはブロンズ像のままだった。
なぎさ達は今日も光写真館に来ていた。

士「おい、ひかり何でなぎさはあんなに落ち込んでいるんだ?」

ひかり「おそらく昨日の事だと思います。」

ほのか「なぎさ、元気だして!きつとなんとかなるわ!」

なぎさ「なんとかって、何でわかるの？」

なぎさは昨日目の前で起こった事がよほどショックだったのだろう。

ほのか「なぎさ……」

ひかり「なぎささん……」

なぎさ「私、行ってくる！」

なぎさは大雨の中傘をささずに走り出した。

ほのか「なぎさー！」

なぎさはブロンズ像になってしまったウルトラマンの所へ行った。

なぎさ「ダイゴさん、ミライさん、教えてください、私はどうしたらいいんですか？」

ティガ（……………）

メビウス（……………）

なぎさは強い雨に打たれながら呟いた。

なぎさ「あなた達に倒せなかったあいつを私達は倒せるんですか？」

ティガ（……………）

メビウス（……………）

なぎさは雨に打たれながら涙を流した。
するとある男がなぎさに傘を差し出した。

「……」そのままじゃ、風邪をひくよ。」

なぎさ「……………モロボシさん。」

カレー屋にて

ダンはなぎさにカレーを作った。

ダン「はい、どうぞ。」

なぎさ「ありがとうございます。」

ダンはなぎさの心を読んだかのように言った。

ダン「ダイゴとミライの事が気になったのかな？」

なぎさは驚愕した。

なぎさ「どうしてその事を!？」

するとある男がカレー屋に入ってきた、自転車屋のハヤタだ。

ハヤタ「あいつらは俺達の兄弟だからな。」

なぎさ「兄弟？」

するとほのかとひかりも入ってきた。

ほのか「なぎさ!ここにいたのね！」

ひかり「びしょ濡れじゃないですか!？」

なぎさ「ほのか、ひかり。」

ダンはなぎさに言った。

ダン「なぎさ、君はダイゴ達にどうすればいいか聞いていたね？」

ほのか「あのウルトラマンがダイゴさんってわかるんですか!？」

ひかり（もしかして・・・）

ハヤタ「君達にもできる事はある。」

なぎさ「それは何ですか!？」

ダン「聞いたら意味がないよ、自分で見つけなきゃ。」

なぎさ「あつ、すいません。」

なぎさはかすかに笑った。

すると奇妙な笑い声が聞こえた。

ハヤタ「この声は!？」

なぎさ「ヒッポリト!！」

なぎさ達が外に出た、そこには雨の中にたたずむヒッポリトがいた。

ヒッポリト「この世界に未来はない、滅べ!滅べ!」

ヒッポリトの右にはエレキング、左にはジェロニモンもいた。

ほのか「怪獣が三体!？」

ひかり「私達にできるでしょうか?」

なぎさ「行こう!三人共、ダイゴさんとミライさんを助けよう!」

ほのか「なぎさ・・・うん!」

ひかり「やりましょう!」

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウェーブ!」

ひかり「ルミナス・シャイニングストリーム!」

三人はプリキュアに変身しヒッポリトに攻撃を仕掛けた。

ブラック「たああ！」

ホワイト「やああ！」

しかしヒッポリトにはビクともしなかった。

ヒッポリト「貴様らの力はその程度か！！！」

ヒッポリトは2人をなぎ払った。

そして胸の赤いランプから赤い光線を放った。

ヒッポリト「死ねええ！」

ルミナス「危ない！」

ルミナスはシールドを張り2人をかばうがシールドは破壊されてしまった。

ルミナス「きゃあああ！」

ブラック「ルミナス！」

ホワイト「そんな！」

エレキングは尻尾でブラックを巻きつけ電流を流し、ジェロニモンは背中に付いている羽をホワイトに向けて放った。

ブラック「きゃあああ！！！」

ホワイトは羽を交わすが一つの羽が肩に突き刺さってしまった。

ホワイト「きゃあ！」

三人は地面に落とされる。

ルミナス「そんな・・・私の防御力でもはがたたないなんて。」

ホワイトは突き刺さった羽を抜いた。

ホワイト「うっ！どうすれば。」

ブラック「もう力が入らない。」

ヒッポリト「はははは！その絶望した顔、最高だ！」

ブラック「くっ、負けたくない、みんなを・・・守りたい！」

「その心さえあれば、大丈夫だ。」

聞き覚えのある声が聞こえた。

ヒッポリト「なっ！？貴様らは！？」

そこにはダンとハヤタがいた。

ブラック「ダンさん！」

ホワイト「ハヤタさん！」

ルミナス「どうして、ここに？」
するとダンが口を開いた。

ダン「人々はみな、ウルトラマンの勝利を信じている。」

ハヤタ「俺達はその声を聞き、戦い続けてきたんだ。」

ブラック「人々の声？」

ハヤタ「ああ、君達プリキュアも同じだ。」

ダン「君達も人々のプリキュアを信じる声を聞き、ここまで戦い続けてきたんだろう？」

ホワイト「プリキュアを・・・」

ルミナス「信じる声・・・」

ブラック「あなた達・・・ひょっとして!？」

ハヤタとダンは静かにうなずいた。

ハヤタはカプセルのような物を取り出し、ボタンを押した。
ダンは赤い眼鏡のような物を取り出し、

ダン「ディア!!」

と叫びながら目に当てた。
2人の体が光に包まれる。

ヒツポリト「やはり・・・貴様らああ!!!!!!!!!!」

そこには赤と銀、胸に青いランプをした巨人がいた、ハヤタはウルトラマンに変身し、そして赤い体に銀のライン、額に緑のランプ、頭にブーメランをつけた巨人、ダンはウルトラセブンに変身した。

ブラック「やっぱり・・・」

ヒッポリト「行け！！エレキング！ジェロニモン！」

マン（行くぞ！セブン！）

セブン（はい！）

つづく

第19話 みんなの声（後書き）

次回、戦闘開始（二回目）

第20話 プリキュア&mp・ウルトラマン(前書き)

なんだかんだでもう20話です

第20話 プリキユア&mp・ウルトラマン

ウルトラマン、ウルトラセブンは戦闘体制に入る。

ブラック「私達も援護しよう！」

ホワイト「わかった！」

ルミナス「行きましょう！」

ウルトラセブンはエレキングに飛びついた。エレキングは尻尾でセブンを巻きつけようとするがセブンは額のランプから緑色の光線・エメリウム光線を放ちエレキングを応戦する。

セブン（電流にだけは気をつけなければ。）

エレキングは口から刃状の光を放ち、攻撃を仕掛ける、ブラックは力でその光を打ち砕く。

セブン（無理はするな！ブラック！）

ブラック「大丈夫！まかせてください！」

セブンはブラックに援護してもらいながらエレキングに攻撃を仕掛ける。

ジエロニモンは背中 of 無数の羽を放つ、ホワイトは必死にそれをか

わす、ウルトラマンは切断技・八つ裂き光輪を放ち羽をすべて切り刻んだ。

ヒッポリト「おのれ・・・こしゃくな！」

ヒッポリトは赤いランプから光線をウルトラマンに放つ、ルミナスはシールドを張り光線を防ぐ。

ルミナス「さっきのようにはいきません！」

ルミナスは光線を防ぎきつたのだ。

ヒッポリト「くっ、ならばこれだ！」

ヒッポリトは手を掲げるとなにやら黒い渦が降りてきた、渦からは青い目、銀、黒の体をした巨人が現れた。

マン（何！？）

セブン（あれは！？）

ブラック「ティガ！・・・じゃない！」

ホワイト「似ているけど、まったくの別物よ！」

ルミナス「すごい欲望にかられています！」

それはかつて光の巨人だったが欲望に体を支配され闇の巨人となった戦士・イーヴィルティガだった。

イーヴィルはウルトラマンにティガと似た光線・イーヴィルショット

トを放った。

マン（うわ！）

ブラック「ハヤタさん！」

セブンは尻尾で攻撃をしようとするエレキングに頭につけた宇宙ブーメラン・アイスラッガーを放ち尻尾を切り刻んだ。
そしてセブンは腕をL字に組み、最強の必殺技・ワイドショットを放ちエレキングを撃破した、すぐにウルトラマンの助けに入る。

セブン（兄さん！）

しかしまだジェロニモンがいた、ジェロニモンはセブンに羽を放つ。セブンはなんとかアイスラッガーでそれを回避するがセブンはジェロニモンの相手をせざるおえなかった。

イーヴィルの力はウルトラマンでも手こずるほどだった。

ブラック「どうしよう。」

ホワイト「なんとか、ダイゴさんとミライさんを元にもどせれば。」

ルミナス「・・・そうだ！」

ヒツポリト「ウルトラマン、ウルトラセブン、貴様らもこれで終わりだ。」

イーヴィルは光線を放つ体制に入り、ジェロニモンは羽を放つ体制に入る。

セブン（まずい。）

マン（奴、なんて強さだ！）

その時何かがイーヴィルを押し倒し、黄色がかった光線がジェロニモンを直撃しジェロニモンは爆発した。

ヒツポリト「何!?!」

それはブロンズ像となつたはずのティガとメビウスだった。

ブラック「成功だね!」

ホワイト「まさか、ブラックサンダーとホワイトサンダーにこんな力が・・・」

ルミナス「プリキュアの力はやはりすごいです。」

ブラックとホワイトはティガとメビウスに聖なる雷を胸のランプに当て、復活の力を与えたのだ。

ティガ（ハヤタさんにモロボシさん!）

メビウス（遅れてすみません！）

マン（気にするな！それより・・・）

セブン（彼女たちと共に奴らを倒すぞ！）

ルミナスは相手の攻撃を防御する役割にまわり、他は戦闘の役割に回った。

イーヴィルはティガ、ウルトラマン、ブラック

ヒッポリトはセブン、メビウス、ホワイト

で分担した。

ブラック「やああああ！！！！！」

ブラックはイーヴィルの体勢を崩した、ティガはその隙にイーヴィルの後ろにまわり体をつかみ上空に投げ飛ばした。

イーヴィルはその体勢からイーヴィルショットを放つ、ティガはゼペリオン光線、ウルトラマンは腕を十字に組みスペシウム光線を放つ、イーヴィルショットは2つの光線に押し負け3人はイーヴィルを倒した。

ヒッポリト「この偉大なるヒッポリトが貴様らごときに負けるかああああ！」

ヒッポリトは口から紫の光弾を放つがルミナスはそれをシールドで防ぎ、ホワイトは力でその光弾を打ち返した。

ヒッポリト「バカな！？」

セブンはヒツポリトにつかみかかり地面に叩きつけ、メビウスはメビウスブレードでヒツポリトを切り裂く。

セブン（今だ！）

メビウス（はい！）

ブラック「ホワイト！」

ホワイト「ええ！」

ヒツポリト「なめるなああ！」

ヒツポリトは光線を放つがルミナスに防がれてしまう。

ルミナス「させません！」

その隙にティガ、メビウス、ウルトラマン、セブン、ブラックとホワイトはエネルギーをためた。

ブラック・ホワイト「プリキュア・マーブル・スクリュー！・・・マックスー！」

ウルトラマンはそれぞれ

ゼペリオン光線

メビウムシユート

スペシウム光線

ワイドショット

をヒツポリトに向け放った。

ヒッポリト「ぐあああ、ば・・・バカなあ!」

ヒッポリトはまたたく間に爆発した。

ダイゴ「なぎさ、君の声・・・ちゃんと聞こえたよ。」

なぎさ「えっ!?!」

ミライ「体は動かなかったんですけど、意識はあつたんです。」

ほのか「そうだったんですか。」

ひかり「これも、ハヤタさんとモロボシさんのおかげですね?」

ハヤタ「なぐに、当然の事をしただけさ。」

ダン「5人共、またカレー食べに来てね、まってるから。」

なぎさ「・・・はい!」

なぎさにはいつもの笑顔が戻っていた。

つづく

第20話 プリキュア&mp・ウルトラマン(後書き)

次回、フレッシュ組登場です

第21話 失った仲間（前書き）

よく考えたらフレッシュ組変身するの初だったとさっき気づいた。

第21話 失った仲間

「????」「なぜだ、なぜ闇の戦士が勝てない・・・そうだ、奴らの仲間を操って戦わせれば奴らは勝手に勝手に自滅するだろう、見ているプリキュア。」

何者かが不気味に笑う。

ラブ「あゝ、おいしかった!」

士「なんで俺がおごるはめに」

美希「ババヌキで負けたんだから、あきらめなさい。」

せつな「カレー、初めて食べた。おいしいね。」

祈里「おかわり!」

士「待て!おい!」

ラブ達はババヌキをし、負けた者が何かおごるといふ条件で士に勝負を挑んでいたのだ。

士「俺は究極を超えている!」

そうやって勝負を望んだが

ラブ「究極を超えているね。」

士「うるさい！」

ダン「はい、勘定。」

安い。さすがダイゴがすすめた店だけあるな。」

士「おつ、意外と

ラブ達と士は写真館に戻る事にした。

その途中、時間を支配しようとする怪人・イマジンが五体現れた。

せつな「！！、怪人！」

士「俺は今気がたってるんだ、すぐに終わらせてやる、変身！」

士はデイケイドに変身した。

ラブ「みんな！行くよ！」

ラブ達は変身アイテム・リンクルンを取り出しそれに付いているローラーを回す。

ラブ達「チェインジ・プリキュア・ビートアップ！」

4人はそれぞれ桃、赤、青、黄の光に包まれ、プリキュアに変身した。

ラブ「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ！」

美希「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ！キュアベリー！」

祈里「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ！キュアパイン！！」

せつな「真つ赤なハートは幸せのしるし！熟れたてフレッシュ！キュアパッション！！」

ピーチ「レッツ！！」

「プリキュア！」

士「行くぞ！」

ディケイドはカードケースを剣に変形させイマジンに攻撃する。プリキュアもイマジンに攻撃を仕掛ける。

イマジン「ぐほっ！！」

ディケイド「くらえ！」

ディケイドはカードをバツクルに差し込んだ。

「アタックライド・・・スラッシュ！」

剣はマゼンタ色に輝き、イマジンを切り裂いた。

イマジン「ぎゃああ！」

イマジンは爆発した、プリキュアもイマジンを応戦する。するとイマジンは見慣れない光線を放った。

ピーチ「わっ！」

ベリー「きゃあー！」

パイン「うっ！」

パッション「何！？」

イマジンは光線を出した後、ひとりでに消えた。

その光線にピーチはなんとかわわした。他のベリー、パイン、パッションは光線を受けてしまった。

ディケイド（イマジンにあんな技あったか？）

ピーチ「大丈夫！？三人共！！」

するとベリー達はいきなりピーチに攻撃を仕掛けてきた。

ピーチ「きゃあー！ちょっと冗談はやめて！！」

ディケイド「まさか！」

ディケイドはパインに足をかけその場に転ばせた。

ディケイドはパインの目をみた。

ディケイド「やはりな。」

それはいつものパインの優しい黄色い瞳ではなかった。

ディケイド「ピーチ！！こいつらはさっきの光線で洗脳されている
」！

ピーチ「そんなー!!じゃあどうすれば!」

デイケイド「一旦引くぞ!こっちに来い!」

デイケイドはピーチの手を握るとカードをバツクルに差し込んだ。

「アタックライド・・・インビジブル!」

デイケイドとピーチは姿を消した。

そしてベリー達は突如現れた謎の者に連れて行かれた。

デイケイドとピーチは壊れかけた廃工場に身を隠した。

士「たくつ、厄介な事になったな。」

ピーチ「・・・私のせいだ。」

士「?、いきなり何言って・・・」

ピーチ「だって、私がああ光線からみんなをまもればあんな事には
!」

士「自分一人でどうにかなる状態じゃなかったろ、自分ばかり責め
るな。」

????「いい言葉だ。」

士・ピーチ「!」

???。「感動的だな、だが無意味だ。」

そこには黄色い仮面ライダー、グレイブがいた。

士「なぜお前がここにいる？」

グレイブ「デイケイド、貴様をあの方の所に連れて行くためだ。」

士「そいつが誰かは知らんが断る、変・・・

「

しかし士は後ろから洗脳された三人に不意打ちをくらった。

士「ぐあっ!!！」

ピーチ「土さん!!！」

生身の士ではプリキュアの攻撃に耐えられなく気絶してしまった。

グレイブ「俺はこいつをあの方の所に連れて行く、あとは頼んだぞ。」

「

ピーチ「土さん!!！」

しかしピーチの前にベリー達が立ちはだかる。

ピーチ「ベリー!!！お願い、目を覚まして!!！」

だがベリーはピーチに攻撃を仕掛ける。

ピーチ「きゃあ!!・・・パイン!!！パッション!!！」

パインはピーチの首を締め上げ、パッションはピーチの腹に蹴りを入れる。

　　ピーチ「くっ、みんな！」

　　ピーチはなんとかベリー達の洗脳をとこうとするが、その願いむなしくベリー達はピーチに攻撃を続ける。

　　ピーチ「み・・・んな・・・。」

　　ピーチはその場に倒れてしまった。

　　ベリー達はグレイブのもとに戻った。

　　ピーチはなんとか立ち上がり、あざだらけの体を休ませるように壁によりかかりながら座り込んだ。

　　ピーチ「ベリー・・・パイন・・・パッション・・・土さん・・・。」

　　ピーチは涙を流しながらすべて自分のせいだと悔やんだ。

　　ピーチ「私が・・・私がちゃんとしていれば・・・こんな事には・・・
　　私は・・・私は・・・。」

　　その時、ピーチの後ろから足音が響いた。
　　しかしピーチは自分の事で頭がいつぱいだった。
　　足音の主はピーチに向かって呟いた。

　　「????」見つけたぞ。」

つづく

第21話 失った仲間（後書き）

次回、あのお方が登場します！

第22話 プリキュアの資格(前書き)

ではじめる

第22話 プリキュアの資格

聞いた事のない声に少しも反応しないピーチ、声の主はピーチの前に立ち、いきなりピーチの顔を殴りつけた。ピーチは地面に勢いよく転がる。

ピーチ「っ!!いきなり・・・何を!!」

声の主はピーチの首をつかみ、片手で体を持ち上げた。

声の主「いつまで過ぎ去った過去を悔やんでいるつもりだ。」

声の主の右手から奇妙な機械音が鳴る、そして首をつかんだ手に力を入れる。

ピーチ「くっ・・・あっ!」

しかしピーチはかすかに笑っていた。

声の主「・・・死にかけるのがそんなにうれしいか?」

ピーチ「だって・・・私が・・・いなくなれば・・・みんな・・・ちゃんと・・・プリキュアとして・・・戦って・・・いけるから・・・」

声の主はその言葉聞き、手に力を入れるのをやめた。

声の主「お前まさか・・・自分がいなくても良いとも思ってるのか!?!」

声の主はピーチを地面に投げ飛ばした。

声の主「今のお前には、プリキュアを名乗る資格はない……。」
主の右手の拳が震えていた。

ピーチ「ごほっ！ごほっ！……どういう……事？」

声の主「俺の知っているプリキュアは……そんな奴じゃない。」

ピーチは傷だらけの体をなんとか起きあがらせる。

声の主「俺はかつて、ディケイドに右手を奪われた。」

ピーチ「士さんに!？」

声の主「そうだ、組織を裏切った代償としてな。」

ピーチ「組織……?」

声の主は続けた。

声の主「あいつはその組織のボスだった、だが今のあいつはれっきとした仮面ライダーとして世界を救うために戦っている!……命ある限り戦う、それが仮面ライダーだ。」

ピーチ「……それとこれとどういう関係があるのよ!？」

声の主「プリキュアだって同じだ!たとえ相手が何でも、人々の笑顔のために仲間のために戦う、それが……プリキュアだろ。」

ピーチ「人々の・・・仲間の

ため・・・？」

声の主「お前が1人でも欠けたら・・・それはプリキュアではなくなる、お前がいてみんながいて・・・初めてプリキュアができるんだ。」

ピーチ「!!!」

ピーチは何かに気づいたようだった、そこに怪人・イマジンの大群が現れた。

イマジン「へへへへへっ!!!キュアピーチ、貴様もあの方の所に連れて行く!」

ピーチ「くっ、まだちゃんと動ける状態じゃないのに!」

すると声の主は自分の右手を握りしめはじめた。

声の主「下がっている。」

ピーチ「？」

声の主は右手を力の限り引っばる、すると右手は火花を散らしながらとれたのだ。

声の主「ぐううう!!!!!!」

ピーチ「!!!、機械の・・・腕？」

すると声の主はキャノン砲のような物を苦しそうに腕に取り付けた。

声の主「くっ、……戦うとは……」
いう事々……。」

声の主はイマジン軍団にキャノン砲を向けた。

ピーチ「待って!!名前を……あなたの名前を教えて!!」

声の主「……結城丈二。」

結城は腕のキャノン砲を放ち、イマジンの軍団を一瞬で吹き飛ばした。

ピーチ「……!!」

結城はその場から立ち去ろうとする。

ピーチ「待って!!」

ピーチは急に立ち上がるつもりだったのでバランスを崩し転んでしまった。
その時、結城の音が響いた。

「命ある限り戦え……たとえ孤独でも……」

ディケイド「ぐああああ!!」

士はグレイブに連れて行かれる途中に目を覚まし、グレイブに抵抗してディケイドに変身し戦っていたのだが。

グレイブ「この俺に勝てると思っただか？それにこっちはプリキュアもいるんだぞ。」

ディケイドは苦戦していた。

ディケイド（あのカードが使えれば・・・）

グレイブ「終わりだ。」

グレイブとプリキュアは一斉に攻撃を仕掛ける。

ディケイド「くっっ！」

その時

「プリキュア・ラブ・サンシャイン！」

桃色の光が4人を襲う。

グレイブ「なっっ！」

そこには傷だらけのピーチがいた。

ディケイド「お前！その体・・・」

ピーチ「みんな！」

グレイブ「またやられに来たか、また仲間どうしでやり合っがいい！」

ベリー達はピーチに攻撃を仕掛ける。

ディケイド「ピーチ！」

ピーチはなんの迷いも無く、ベリー達に攻撃を返した。

ピーチ「やあ！」

グレイブ「!？」

ディケイド「あいつ……」

グレイブは驚愕した、なぜさっきまで仲間をあんなに大切に思っていたピーチがベリー達に攻撃したのかを考えていた。

グレイブ「何故だ！何故迷いも無く仲間を攻撃できる！」

ピーチ「仲間だからよ！」

ディケイド「!！」

ピーチ「仲間だからこそ、仲間が間違ってる事をしたら正す必要があるの！」

グレイブ「そんな物……無意味だ！」

グレイブはベリー達と共にピーチを襲う。
やはりピーチの体は回復しきっていないようだ、攻撃をかわすが何
発か直撃している。

ピーチ「くっ！きゃあ！」

ピーチはディケイドの所に飛ばされた。

ディケイド「ピーチ！お前、なんでいきなり……」

ピーチ「私、命ある限りみんなと幸せをゲットしたいから……み
んなを助きたいから！」

ディケイド「!!……なるほどな。」

するとディケイドのカードケースから世界が融合した時に力を失っ
たカードが一枚でてきた。

ディケイド「やつとか。」

ピーチ「？」

ディケイド「ここからが本番だ。」

ディケイドはタッチパネルが付いているマゼンタ色の物に先ほどの
カードを差し込み、パネルに映ったそれぞれの紋章に触れた。
低い機械音なる。

「クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電
王、キバ、ファイナル・カメンライド……ディケイド!!」

ディケイドの両肩と胸に9人の仮面ライダーのカードがつき、額に

ディケイドのパワーアップした姿が書かれたカードがつく、そして緑の複眼はマゼンタ色に体は銀、黒、マゼンタ色のライン、これが9人の仮面ライダーの最強の力を使う事ができる仮面ライダーディケイド・コンプリートフォームだ。
先ほどのアイテムをベルトに装着する。

ピーチ「すごい……!」

変身した際に出たディケイドの衝撃波はベリー達の洗脳をといた。

ベリー「……あれ、私達」

パイン「今まで……」

パッション「何をしていたの？」

グレイブ「馬鹿な!!洗脳がとけるなんて!!」

ディケイド「ベリー、パイン、パッション、お前達はあいつに操られていたんだ。」

パイン「ええ!」

ベリー「そんな!」

パッション「許さない!」

グレイブ「だが貴様らごときが俺かなうはずがない!行け!」

グレイブはイマジン軍団を呼び出し攻撃を仕掛けた。

ディケイド「イマジンには・・・これだ。」

ディケイドはパネルに触れた。

「電王！カメンライド・・・ライナー。」

するとディケイドと全く同じ動きをする仮面ライダー電王・ライナーフォームが現れた。

ディケイドは電王の紋章が刻まれたカードをバツクルに差し込んだ。

「ファイナル・アタックライド・・・デデデ電王！」

ディケイドの後ろから4つの電車が走ってきた、足元には線路が現れそれに乗リイマジン軍団に電王と共に突っ込んだ。

ディケイド「やああああ！」

ディケイドと電王はイマジン軍団を切り裂き全滅させた。

グレイブ「くそ！貴様らごときにあの軍団が！」

ディケイド「今だ！ピーチ！ベリー！パイン、パッション！」

4人は頷いた。

ピーチ「行くよ！」

ピーチはアイテム・ピーチロッド

ベリーはベリーソード

パインはパインフルート

パッションはパッションハープ
を出した。

ピーチ「届け！愛のメロディー！」

ベリー「響け！希望のリズム！」

パイン「癒せ！祈りのハーモニー！」

パッション「吹き荒れる！幸せの嵐！」

ピーチ達は力をたくわえる。

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャイン・フレッシュ！」

ベリー「プリキュア・エスポワールシャワー・フレッシュ！」

パイン「プリキュア・ヒーリングプレアール・フレッシュ！」

パッション「プリキュア・ハピネス・ハリケーン！」

ハート型、スピード型、ダイヤ型のエネルギー光弾と激しい旋風が
巻き起こる。

グレイブ「くっ、こんなもの！」

グレイブはプリキュアの技を打ち消そうとする。

ピーチ「私達の力は！」

ベリー「あなたなんかに！」

パイン「消せるほど！」

パッション「弱くないの！」

グレイブ「くっ、ぐあああ！」

グレイブはプリキュアの技に耐えきれず吹き飛んだ。

ベリー「やった！」

ピーチ「やった・・・ね」

ピーチはその場に倒れ込んだ。

パッション「ピーチ！」

パイン「大丈夫!？」

ピーチ「えへへ、少し無理しちゃった。」

ピーチは仲間を無事に取り戻せた事に喜びを感じ笑顔になった。他の者達もそれにつられ笑顔になった。

ディケイド（礼を言うぜ・・・結城丈二。）

UJU

第22話 プリキュアの資格（後書き）

次回、ちょっとみんなを休ませます

特別編 オンドウル(前書き)

今回は息抜きです、自信ありませんがよければどうぞ。

特別編 オンドウル

とある日、士達は激戦を繰り広げていた。

士「これで全て決まる、全てが終わるんだ。」

のぞみ「士先生、どうする?」

ダイゴ「!」

トランプで

士「なああああ!ババだあああ!」

のぞみ「やった!また私の上がり!」

ダイゴ「士はババに縁があるんだね・・・ああっ!!ババだ!」

りん「よくトランプでそんなに盛り上がるわね。」

なぎさ「りんは一番最初に上がったから盛り上がらなかったんだよ。」

舞「あっ!また士さんの負け!」

士「なんでだ、俺は究極を・・・」

祈里「もういいよ。」

アスカ「ダイゴも結構ババ引くけどな。」

我夢「ア、確かに。」

ダイゴ「うっ！」

ラブ「でもこのランプ、不思議だね？」

夏海「たしかに、そうですね。」

かれん「全部に絵が書いているわね。」

咲「しかも全部怪人みたい。」

ひかり「不思議ですね。」

????「デイケイド！」

うらら「何ですか!？」

ハヤタ「敵か!？」

ミライ「味方か!？」

郷「次回に!」

北斗「つづく!」

くるみ「続かないわよ!」

ほか「一体誰!？」

士「お前はたしか・・・剣崎か!？」

剣崎「ゾウダ、イバズグニゾドガーゾブオズデド！」

美希「・・・へっ?」

こまち「差し支えなければもう一度お願いします。」

剣崎「ダガタ、ゾドガーゾブオズデド！」

りん「・・・は?」

夏海「ぞ・・・が?」

剣崎「デイガブ!ゾドガーゾブオズデドイッデドウンザ！」

士「聞き取れないのも仕方ないだろ、奴は・・・」

そう!彼こそ平成仮面ライダーの五代目・仮面ライダーブレイド、オンドウル語を話す、剣崎一真だ!

剣崎「もうやめろ!オンドウル語とか話してないから!」

(ここからは日本語に訳していきます。)

剣崎「俺ははじめから日本語話してるからな!!勘違いするな!」

せつな「オンドウル語って何?」

夏海「どこの国の言葉でしょうか?」

士「違う、オンドウル語は剣崎のかつぜつが悪すぎて一部の奴らによって作られたいわばおふざけた。」

剣崎「俺はともかく剣崎を演じた俳優さんに失礼だろ！やめろ！」

こまち「ソデヨデイ、ドウドウデガードブオズデナ・・・いたた、かんじゃった。」

剣崎「真似しなくていいよ、ともかくそのカードにはアンデッドという怪人が封印されてるんだ、普通の人が扱うと危険なんだ。」

夏海「それは大変です！早く捨てなきゃ！」

うらら「そうですね、今剣崎さんにわたします！あつ。」

舞「カード・・・」

ほのか「落としちゃった。」

キィィィン！！

ダイゴ「うわ！えーと・・・コメット！」

ハヤタ「違う！アンデッドだ、しかもすぐ懐かしい名前だしたな！」

剣崎「くそ！みんな外にでて！！！」

わあああああ！

剣崎「よし！へシン！」

剣崎はブレイドにへシンした！

ブレイド「やめろ！変身だ！」

士「どーでもいいだろ！変身！」

「行くぞアンデット！！！」

ブレイド「ウエーイ！！！」

ディケイド「やああああ！！！」

どかーん！！

のぞみ「やった！！！」

アスカ「なあ、ウエーイってなんだ？」

ブレイド「／／／／いやっ！！！」

ミライ「やっとセリフがきた！！！」

うすら「ウエーイ！！！」

士「やめろ！やめろ！夢に出てくる！！！」

剣崎「そこまで言っな！俳優さんに失礼だ
ろ！こっつなったら叫んでやる！！！」

特別編 オンドウル（後書き）

次回、本編に戻ります。

第23話 奪われた変身(前書き)

「???」 やつと僕の出番か、待ってなよ土。」

第23話 奪われた変身

「?????」「貴様、なんだ?」

「?????」「次期世紀王とでも言っておこう。」

「?????」「この私になんのようだ。」

「?????」「奴らを倒す方法を教えてやろう。」

アス力達は異次元から元の世界に戻ってきた。

のぞみ「いや、咲や舞も無事で良かったよ!」

我夢「ありがとうございます、北斗さんに郷さん。」

北斗「兄弟として当然の事をしたまでだ。」

郷「じゃあ我々は元の役割に戻るとするか。」

ハヤタ「そうだな。」

ダン「いつでも家に来てくれ。」

ハヤタ達は帰っていった。

士「……で、これからどうするんだ？」

かれん「ひとまず、写真館に戻りましょう。」

祈里「そうだね。」

士達は写真館に戻った。

翌日

館に行ってくるね。」

ほか「私は図書

舞「あつ、私も行く！」

りん「図書館ね。」

ラブ「本か……考えただけで頭が痛くなる。」

のぞみ「私も。」

ほかと舞は図書館に行った。

.....

なぎさ「2人共遅いね。」

士「本を読むのに夢中になってんだろ。」

せつな「でも、もう日が暮れるよ?」

うすら「心配ですね。」

その時、士は外から不気味な気配を感じた。

士「何か出たな。」

のぞみ「えっ！もしかして怪人！？」

ラブ「だったら早く行かなきゃ！」

なぎさ「もしかしたら途中でほのかと舞に会えるかもしれない。」

咲「私達も行きます！」

士、のぞみ、なぎさ、咲、ラブは気配の感じる所に行った。

そこには怪人・グロンギ、アンウン、オルフェノクがいた。

士「変身！」

のぞみ「プリキュア・メタモルフォーゼ！」

ラブ「チェインジ！プリキュア・ビートアップ！」

なぎさと咲以外は変身し、戦闘を開始する。

なぎさ「もう！ほのか一体何してるのよ！」

咲「舞もいつまで図書館にいる気なんだろう！」

するとオルフェノクがなぎさと咲に言った。

オルフェノク「あの2人は来ないぞ。」

なぎさ達は驚愕した。

デイケイド「どういう事だ！」

アンノウン「しりたければこれを見よ。」

アンノウンが指を鳴らすと奇妙な映像が現れた。

そこにはほのかと舞がいた。そして鎖で吊されていた。

なぎさ「!?!」

咲「舞！」

どうやら声は通じるようだ。

舞「咲！」

ほのか「なぎさ!?!」

アンデッド「時は来た！」

ドリームと戦っているアンデッドはドリームの腕を掴みだした。

ドリーム「!?!、何!?!」

アンデッドに桃色の光が流れ込む。

するとドリームはのぞみの姿に戻って しまった。

のぞみ「なっ、何で!?!」

アンノウンはピーチの首を掴みだし、アンノウンに光が流れ込む。
そしてピーチもラブの姿に戻ってしまった。

ラブ「そんな!?!」

ディケイドはグロンギにカードケースを奪われた。

ディケイド「返せ!?!」

そして三体の怪人は

「貴様らに勝ち目はない。」

そう言って消えてしまった。

ディケイド「チッ、一体何だったんだ? カードケース盗みやがって、
どこか誰かみたいだ。」

????「呼んだかい? 土。」

ディケイドは元の姿に戻りため息をついた。

土「どこにいても出てくるんだな、海東。」

彼は世界中のお宝を集めている男、仮面ライダーディエンドこと海
東大樹だ。

海東「そう言うな、同じ境遇にさらされたんだから。」

士「同じ？ああ、お前もカードを盗られたのか、どんだけ盗まれるんだお前は。」

海東は少し寂しそうな顔をした。

のぞみ・ラブ「あれ!？」

士「どうした？」

のぞみ「キュアモが反応しないの!?!」

ラブ「私のリンクルンも反応しないわ!」

海東「当たり前さ、君達は変身能力を奪われたんだから。」

のぞみとラブは驚愕した。

なぎさ「もしかして、あいつらの目的は……」

咲「みんなの変身能力を奪うこと!？」

海東「そうさ、僕と士はなんとかディケイドとディエンドのカードは奪われなかったけどね。」

士「だったら話は早い、奴らを探すぞ。」

のぞみ「でも、どうやって……」

海東「そんな事もあるつかと奴らに発信機を取り付けておいたよ。」

ラブ「本当ですか!?!」

士「準備の早い奴だ、で・・・この世界ではなにを盗むつもりだ？」

海東「もういいよ、大切な仲間というお宝を手に入れたから、な？
士。」

海東は士の肩に手をかけるが士はそれを振りほどいた。

士「やめろ、気持ち悪い。」

海東「ひどい!?!」

のぞみ「私達も連れて行って!?!」

士「ダメだ。」

なぎさ「どうして!?!?!」

海東「君達は変身できない、はっきり言っが足手まといだ。」

ラブ「そんな・・・」

咲「足手まといいよ!?!?!」

士「!?!?!」

のぞみ「あの二人は大切な友達なの！！私達も救い出したいの！！」

海東「どうする？士」

海東は士に聞く。

すると士は答えた。

士「考えるのは面倒だ・・・しっかりとついて来いよ。」

なぎさ「ありがとうございます！」

海東（ふふっ、土らしいや。）

するとこのぞみは海東に聞く。

のぞみ「海東さん、あの怪人はどこにいるんですか？」

海東「ん？ああ、案内するよ。」

のぞみ「よし、行くぞ！けってい！」

そして士達は怪人を追うのだった。

つづく

第23話 奪われた変身(後書き)

次回、みんな叫びましょう。

第24話 太陽の戦士・笑顔を守る者（前書き）

皆さんお待ちかね、

題名でわかると思います

第24話 太陽の戦士・笑顔を守る者

士達は変身能力を奪った怪人を追って、ついに敵のアジトを発見した。

士「こんな地底にアジトを作るとはな。」

海東「発信機が落ちてる、ここで外れたか。」

なぎさ「地底だとやっぱり暗いね。」

のぞみ「一体なにが来るんだろう?」

咲「気をつけて行こう。」

ラブ「うん。」

6人はアジトに侵入した。

のぞみ「暗いね。」

士「なんだ?怖いのか?」

のぞみ「そんなんじゃないもん!」

すると何かが開く音がした。

なぎさ・咲「きゃあああああ!」

ラブ「なぎさ！！咲！」

すると辺りが明るくなり、目の前に黒いタイトスのような物を着た者・シヨッカー戦闘員がいた。

海東「雑魚が、行くよ土・・・変身！」

海東はシアン色のラインが入った拳銃にカードを差し込み引き金を引いた。

「カメンライド・・・ディエンド！」

海東は体がシアン、黒の色のライダー・ディエンドに変身した。

土「俺に命令するな！・・・変身！」

「カメンライド・・・ディケイド！」

土はディケイドに変身した。

ディエンド「数が多いな。」

ディケイド「これじゃあ2人の所にたどり着けないぞ！」

するとそのぞみとラブが戦闘員を引きつけた。

ディケイド「なにやってんだ！危険だぞ！」

のぞみ「私達にはこれくらいしかできないの！」

ラブ「先に2人の所に行つて！早く！」

ディケイド「くそ！絶対死ぬな！」

ディエンド「僕達に任せて！」

ディエンド達は先を急いだ。

のぞみ「さあ、こつちだよ！」

ラブ「ついてきなさい！」

のぞみとラブは二手に分かれた。

のぞみ「もつとついてきなさい！」

すると一人の戦闘員がのぞみを掴みだした。

のぞみ「しまった！」

のぞみは生身のまま壁に叩きつけられる。

のぞみ「きゃああああ！」

のぞみは崩れ落ちる。

のぞみ「くっ……どうしよう。」

のぞみは体の自由がきかなくなった。
戦闘員はのぞみに攻撃を仕掛ける。

のぞみ「くっ！」

????「そこまでだ！」

のぞみ「えっ!?!」

すると白い服を着た男が戦闘員を次々となぎ倒していく。

????「大丈夫か!?!」

のぞみ「・・・あなたは？」

戦闘員はその男を見て驚いている。

戦闘員「貴様っ!?!まさか!?!」

男は右手を上突き出すとゆっくり下に下ろす、そして右手を右側に大きく振り、左手を右から左へ大きく振り構える。

????「変・・・身!?!」

すると男の体は輝きだし姿が変わった。

戦闘員「!?!」

のぞみ「!?!・・・まさか!?!」

「俺は太陽の子！仮面ライダーBlack！！RX！！！！」

ラブ「！！、これだわ！」

一方、ラブは戦闘員が所持している武器を奪い、攻撃を仕掛けるが戦闘員にいともしき返されてしまった。ラブは戦闘員をできるだけ遠くに引きつけるしかなかった。

ラブ「はあはあ、あっ！」

ラブは焦りすぎたためつまづいてしまった。

戦闘員「ききき！ここまでだな！」

ラブ「どうしよう。」

戦闘員がラブに近づくと何者かに殴り飛ばされた。

戦闘員「ぎゃあー！」

「????」「よし！」

ラブ「だっ、誰！？」

ラブは驚きを隠せない。

「????」話はあとで!」

すると戦闘員は言ってきた。

戦闘員「貴様らが抵抗しても無駄だ、我々は人々を絶望の闇に包むのだ!」

すると男は拳を握りしめた。

「????」お前らなんかのために……これ以上誰かの涙は見たくない!」

男は腹に手をかざす、すると腹からベルトが現れた。

ラブ「!?!」

戦闘員「!?!、まさか!?!」

男は手を前に突き出し、ゆっくりと横に動かした後ベルトの横にっいているボタンを押した。

「????」変身!」

男の体はみるみる変わっていき、古代戦士・仮面ライダークウガになった。

ラブ「仮面ライダー!?!」

クウガ「行くぞ!」

R X 「覚悟しろ！」

ジュ
ジュ

第24話 太陽の戦士・笑顔を守る者（後書き）

はたして、みんな運命は！？

第25話 協力(前書き)

ラブとのぞみの行動はシンクロしている設定です。

第25話 協力

RX「とおー！」

RXは戦闘員を次々と倒していく。

のぞみ「す……すごい。」

その時、一人の戦闘員がRXの隙をつきのぞみを人質にとった。

のぞみ「なっ！はなして！！！」

RX「卑怯だぞー！！！」

戦闘員「ききき！卑怯は俺にはほめことばさー！！！」

するとRXの体が光出した。

のぞみ「えっ！？！」

戦闘員「なっ！？！」

RX「俺は太陽の王子！RX！！ロボライダー！！！！！」

RXは黒の体から黄色の体になり動きがまるでロボットのような物になった。

RX「ボルティックシューター！！！」

RXは拳銃で戦闘員を打ち抜いた。

のぞみ「なにがなんだか・・・」

RX「ここは危ない！ついて来るんだ！」

RXは元の姿に戻り、のぞみと行動する事にした。

のぞみ「あの・・・あなたの名前は」

???「俺は南光太郎、話は渡君から聞いているよ。」

光太郎は渡から世界の危機を知らされて来たのだ。

光太郎「彼はすごいよ、わざわざ俺の世界に来てこの世界の危機を知らせてくれるなんて。」

のぞみ「光太郎さん！お願いがあります！」

光太郎「？」

ラブ「赤い・・・仮面ライダー！？」

クウガ「おりゃああ！」

クウガは戦闘員と戦っていた。

戦闘員「素手で俺達に勝てるか!？」

戦闘員は鉄製の棒を振り回す。

クウガ「君!それ貸して!!」

ラブ「え!?あつ、はい!」

ラブは先ほど奪った武器をクウガに渡した。

クウガ「超変身!」

するとクウガの体は青いスマートな姿に変わった。
そして武器は青い杖に姿を変えた。

クウガ「ふっ!はっ!おりゃああ!」

クウガは戦闘員を杖で全てなぎ倒した。
クウガは青年の姿に戻った。

????「怪我ない?」

ラブ「あつ、はい。あの・・・あなたは?」

????「俺は五代雄介、話は聞いているよ。」

ラブ「おの!お願いがあるんです!」

雄介「？」

光太郎「えっ！？仲間が人質に！？」

のぞみ「はい、私達変身能力を奪われちゃって」

ラブ「私達、なんとか助けたいんです！」

雄介「わかった！」

光太郎「協力するよ。」

のぞみ「本当ですか！？」

雄介「うん、みんなの笑顔のためにもね！」

ラブ「ありがとうございます！」

なぎさ「……いたた、ここは？」

咲「落とし穴にはまったみたい。」

なぎさと咲は敵の罠にはまってしまったのだ、すると声が聞こえた。

「????」「かかったな、キュアブラック、キュアブルーム。」

なぎさ「誰!?!」

「????」「私はシャドームーン。」

咲「シャドームーン?」

シャドー「ここからは貴様らの力が邪魔になる、だから貴様らをここに閉じ込めておく事にした。」

咲「ふざけないで!」

なぎさ「早く出しなさい!」

声は途切れた。

なぎさ「どうしたらいいんだろう。」

咲「みんなが来てくれるといいんだけど。」

「はあああああ……。」

深いため息をつく2人、しかし2人は気づいていなかった。
頭上に黄色い玉が飛んでいるのを。

UJU<

第25話 協力（後書き）

次回、なぎさに何かが起こる

第26話 イマジン・パラダイス!! (前書き)

イマジン・パラダイス!!

第26話 イマジン・パラダイス！！

なぎさと咲の頭上に4つの黄色の玉が浮いていた。

その玉はなぎさに当たるとなぎさの体から砂が出てきた。

咲「なぎさ！何、その砂！？」

しかしなぎさは咲の声に反応しなかった。

なぎさの目は赤く、髪の一部は赤に変わっていた。

咲「な・・・ぎさ？」

なぎさ「ちげえよ。」

するとなぎさは拳で壁に穴を開けた。

なぎさ「俺は・・・モモタロスだ！」

咲「！」

たしかにそれはなぎさではなかった。

すると咲はなぎさの開けた穴から向こう側がみえた。

咲「隠し通路？」

なぎさ？「たくっ！面倒くせえなあ、この壁ぶっ壊せばいいんだろ？」

なぎさ？は壁を殴り穴を大きくして2人は通路に出た。

咲「あなた、なぎさじゃないのね。誰なの？」

なぎさ？「だからモモタロスだつて（先輩は強引なんだつて。）
・！！」

咲「？」

するとなぎさの目と髪は赤から青にかわりいつの間にかメガネをか
けていた。

なぎさ？「こんな綺麗な女の子にそんな強引に言ってもダメさ、僕
にまかせて。（こら！亀野郎！）」

なぎさ？は咲の肩に手をかけ、なにやらホストのような口調で話す。

なぎさ？「ねえ、君。ちょっと聞きたい事があるんだけど、ここじ
やなんだからお茶でもしながら話さない？」

咲「へ！？いやっ、その・・・」

咲は戸惑いはじめる。

なぎさ？「とりあえずついてきて、良いところ知ってるから（ええ
加減にせえや！！）・・・！！」

なぎさの目と髪が青から黄色にかわる。

なぎさ？「かわいそうやる！少し落ち着かせてやれや！」

咲（なぎさって関西人だっけ？）

なぎさ？「とにかくや！君、深呼吸や！深呼吸で気分を（つまんな
ーい、僕にも出させてよー。）・・・！！！」

なぎさの目と髪が黄色から紫にかわる。

なぎさ？「ねえ、お姉ちゃん！僕と一緒に踊ろうよ！いいよね？答
えは聞いてない！」

なぎさ？は咲の手を握り、踊り始める。

咲「ちよっ！ちよつと待って！！！」

なぎさ？「えー、いいじゃん！もっと踊ろうよ！答えは聞いて（い
い加減にして！！！！）」

????「うおおお！！！」

4人の怪人のような者達がなぎさから飛び出して来た。

咲「なぎさ？あなたはなぎさなの？」

なぎさ「はあはあ・・・う、うん。」

????「すごいな、わいらを追い出すなんて。」

????「ほんと！予想外だよね？」

咲「あなた達は怪人なの？」

????「怪人は怪人だけどー、イマジン！」

????「怪人にはかわりねえじゃねえか！」

赤、青、黄、紫の色をしたイマジンが口論を始める。

咲・なぎさ「こっちは真面目に聞いているの!!！」

なぎさと咲は怒鳴りつける。

イマジンは一歩後ずさりをする。

咲「まずはあなた達の事を教えて。」

赤いイマジンは答える。

????「俺はモモタロスだ。決め台詞は俺、参上！」

次は青いイマジンが口を開く。

????「僕はウラタロス、決め台詞は僕に釣られてみる？」

黄色のイマジン

????「わいはキンタロスや！決め台詞は俺の強さにお前が泣いた、涙はこれで拭いとき！」

紫イマジン

????「ぼくはリュウタロスだよ！決め台詞は答えは聞いてない！」

なぎさ・咲（そこまで聞いてないんだけどなあ。）

つづく

第26話 イマジン・パラダイス!! (後書き)

次回、あれ参上!

第27話 俺、参上！（前書き）

参上しちやいます

第27話 俺、参上！

なぎさは4人のイメージに聞いた。

なぎさ「あなた達は他のイメージとは雰囲気が違うね。」

モモ「ああ、他の奴らのやってる事には興味がねえんだよ。」

ウラ「そついう事。」

キン「zzzzz。」

咲「立つたまま寝てる。」

リュウ「わーい！クマちゃんの寝坊助〜！」

すると向こうからショッカー戦闘員がやって来た。

戦闘員「あっ！貴様らこの通路を見つけてしまったのか!？」

なぎさ「えっ!?!ここにも敵がいるの!?!」

モモ「仕方ねえ、体借りるぜ！」

するとモモタロス再びなぎさの体に入りなぎモモとなった。

ウラ「名前のセンス無さ過ぎ。」

なぎモモ「(ちょっと！勝手に入らないですよ!) 少し我慢してる!」

するとなぎモモはベルトを取り出し、腰に巻いた。

なぎモモ「（何これ？）行くぜ！変身！」

なぎモモはベルトの赤いボタンを押した。ベルトからサウンドが流れるとなぎモモは四角いケースのような物をベルトにかざした。

「ソード・フォーム！」

ベルトから音声が流れ、なぎモモの体は何かにも包まれその周りを赤い物体が回る。そして赤い物体は体に装着され顔に桃の形をしたものが装着された。これが時間を支配しようとするイマジンと戦う戦士・仮面ライダー電王だ。

電王「俺、参上！」

咲「仮面ライダー！？」

ウラ「あらら、変身しちゃった。」

キン「しゃあないやろ、モモの字、一発かましたれ！」

リュウ「がんばれモモちゃん！」

戦闘員「でっ！電王だと！？なぜ貴様が・・・」

電王「ゴタゴタうるせーな、いいか？俺は最初から最後までクライマックスなんだ。途中で泣き言は聞かぬえぜ！」

電王は剣を取り出し、戦闘員達に攻撃を仕掛ける。

ウラ「ぼく達もなんとかしないとね！」

キン「せやな。」

リュウ「わーい！戦うぞー！！」

他の三人も戦闘員達に攻撃を仕掛ける。咲はそれを見るしかできなかった。

するとキントロスが

キン「ん？・・・自分だけ見てるだけってのも辛いやる！？」

咲「う、うん。でも私にはどうする事も・・・」

キン「わいにまかしとき！」

するとキントロスは咲の中に入った。

咲キン「（どうするの？）ええからまかしとき！」

すると咲キンはなぎモモが出したベルトと同じ物を取り出した。

咲キン「（これって！？）変身！」

咲キンはベルトの黄色のボタンを押し、ケースをかざす。

「アックス・フォーム！」

「フルチャージ！」

すると電Sは剣に

電Rは杖に

電Aは斧に

電Gは拳銃に

エネルギーがたまる。

電S「必殺、俺の必殺技！PART1」

電Rは杖を敵に投げつけた、敵には六角形の物ができる。

電Aは高く飛び上がる

電Gはエネルギー弾を構える。

電S「てりゃああああ！」

電R「たあ！」

電A「やああああ！」

電G「ふっ！」

電Sは剣で戦闘員を斬りつけ、電Rは敵目掛けて跳び蹴り、電Aは上空から落下しながら斬りつけ、電Gはエネルギー弾を放つ。戦闘員達は爆発した。

電A「ダイナミック・チョップ。（後から言うんだ。）」

イメージンは体から出た。

なぎさ「なんか疲れちゃった。」

モモ「ちとやりすぎたか？」

咲「かなりイメージンが出入りしなからね、体がついてこなかったんだよ。」

ウラ「まずデンライナーに乗って体をやすませなきゃ。」

なぎさ「そんな暇ない！早くみんなを・・・探さ・・・なきゃ・・・」

なぎさは疲れがピークを迎え倒れてしまった。

咲「なぎさー！」

キン「これはあかんで！」

リュウ「早くデンライナーを呼ぼうよ！」

モモ「わかってるよ！」

するとどこからか時を自由自在に走れる電車・デンライナーが現れた。

咲「どこから来たの!?!」

ウラ「早く乗って!!!その子長く保ちそうになさそうだから!」

リュウ「早く早く！」

咲達はデンライナーに乗り、時のハザマを走り出した。

つづく

第27話 俺、参上！（後書き）

次回、ゆっくりと考え中

第28話 究極の間、時の電車（前書き）

僕をもっと笑顔にしてよ、印象深い言葉です。

第28話 究極の闇、時の電車

なぎさ「う……うん。」

なぎさは目を覚ました、なぎさは布団の中に入っていた。

なぎさ「ここは……?」

何やら扉の向こうが騒がしい。

なぎさは扉を開けた。

モモ「止める！ハナクソ女！」

ある少女がモモの腹にせいけんずきを繰り出す。

???「バカモモ！！また関係ない人を巻き込んで……あんた達もよー！」

その少女の名前はハナ、デンライナーにいるイマジン達の元締めだ。

咲「いいのよハナちゃん！この人達は私達を助けてくれたんだから。」

ハナ「でもそのせいでなぎささんが倒れちゃったんでしょ？」

ウラ「それは……」

キン「せやけど……」

リュウ「僕が悪いの!？」

????「車内ではお静かに!」

????「コーヒー入りまーす。」

みんなが見た先には茶色い服を着た男と一緒にチャーハンを食べているなぎさとコーヒーを出している女がいた。

咲「なぎさ!いつの間に目が覚めたの!？」

なぎさ「さつき!」

????「話は聞きました、この子とあなたはプリキュアの力を持っていますね?」

彼はデンライナーのオーナーだ。そしてコーヒーを出しているのは乗務員のナオミだ。

咲「・・・はい、まあ今は奪われていますけど。」

ハナ「プリキュア!?渡が言ってたあの!？」

なぎさ「!!、そうだ仲間がさらわれたの!私行かなきゃ!」

ウラ「ダメだよ!まだ休んでなきゃ!」

オーナー「君はまだ完全に動く事はできません、途中でまた倒れてしまうでしょう。本来はパスが必要ですがやむを得ません、車内で休んでいなさい。」

なぎさ「ダメです！この間にもあの2人が・・・」

オーナー「車内の事はオーナーである私が決めます、君の外出を禁止します。」

なぎさ「そんな!？」

すると乗務員のナオミが

ナオミ「コーヒーどーぞ、飲んで落ち着いてください。」

なぎさ「えっ?あっ、はい。」

ハナ「あっ!ダメ!！」

咲「?」

するとなぎさは口からコーヒーをふきだした。

なぎさ「ぶふ!なっ、何これ!？」

イメージン達「美味しい!」

ナオミの作るコーヒーは不味いのだがイメージン達には好評なのだ。

ハナ「そっ、そうだ!オーナー、こいつらに協力してもらおうのはどうでしょう?」

オーナー「詳しく教えてもらえますか?」

RX「リボルクラッシュ！」

一方のぞみとRXは罠にはまった咲となぎさを探していた。

のぞみ「一体、2人はどこにいるんだろう?」

RX「きつと見つかるさ、焦らずに行こう。」

するとRXに何かが襲いかかってきた。

のぞみ「!?!」

RX「何者だ!?!」

???「僕は・・・ダグバ・・・ねえ、戦おう、そして僕を笑顔に
してよ。」

RX「ふざけるな!ライダーキック!」

しかしダグバはRXの技を片手で受け止めた。

ダグバ「君の力は・・・こんななんだ。」

のぞみ「そんな!?!」

RXはその場に叩きつけられた。

RX「ぐわあああ！」

ダグバ「つまらないなあ・・・もっと笑顔にしてよ。」

その時、デンライナーが現れ、のぞみとRXを連れて行った。

ダグバ「まあいいや、今度は楽しませてね？」

のぞみ「ああ！咲になぎさ！ここにいたんだね！？」

光太郎「ここは？」

咲となぎさは事情を説明した。

光太郎「なるほど、では早く他の仲間にも知らせないと。」

のぞみ「このコーヒーおいしいね！」

モモ「だろ!？」

のぞみはすっかりイマジンと打ち解け合っていた。

なぎさ（美味しいって・・・）

ハナ（よほどね・・・）

オーナーはチャーハンに刺さった旗が倒れ、ショックな顔をしていた。

オーナー「では、のぞみ君のお仲間を助けに行きましょう。」

つづく

第28話 究極の間、時の電車（後書き）

少し投稿遅れるかもしれませんが。

第29話 戦力集結（前書き）

思ったより早く投稿できました。

第29話 戦力集結

ラブと雄介は咲となぎさを探していた。

雄介「なかなか見つからないね。」

ラブ「どこにいるんだろう。」

すると突然壁に穴が開いた。

ラブ「何!?!」

雄介「!?!、お前は!?!」

それはかつて雄介が命を賭け倒した究極の闇のグロンギ、ン・ダグバ・ゼバだった。

ダグバ「さっきの奴よりは・・・楽しめるかもね。」

雄介「なんでお前が!?!」

ダグバ「・・・君、誰?」

ダグバには雄介の記憶がなかった。

雄介「記憶がない!?!・・・よし、変身!」

ラブ「雄介さん!」

クウガ「下がって！」

クウガはダグバに攻撃を仕掛けた。しかしダグバにはビクともしなかつた。

ダグバはクウガの首をつかみ、片手で持ち上げた。

クウガ「くっ！・・・うっ！」

ダグバ「どうしたの？もつと僕を笑顔にしてよ。」

そこにラブが

ラブ「雄介さん！しっかりして！」

ダグバ「君も僕と遊んでくれるの？」

ダグバがラブに向けて手をかざす。
するとラブの足が燃えだした。

ラブ「きゃあああ！！！」

雄介「ラブ！」

炎はなんとか消えたがラブは立てなくなった。

ダグバ「はははは、やっぱりリントが苦しむ顔は気持ちが良いな。」

グロンギにとって人間を殺すのは単なるゲームにすぎないのだ。リントとはゲーム的である人間の事である。

クウガ「よくも・・・よくも・・・」

クウガはラブの姿、そしてダグバの態度に怒りを覚えた。

クウガの拳が震えている。その時クウガの頭にある言葉が流れた。

「悲しい時こそみんなのために頑張れる男になれ、誰かの笑顔のために頑張れるって・・・すごく素敵な事だと思わないか？」

クウガ「！！・・・ごめん、俺忘れてたよ！」

クウガのベルトに金のアーマーがつき、赤い水晶が黒に変わった。

そしてクウガの姿は赤い目、両肩に大きな突起が出た黒い体になった。

これがもう一つの究極の闇と呼ばれたクウガ・アルティメットフォームだ。

本来は黒い目をし、世界を暗黒に包む悪しき姿だが雄介の心がそれに影響し、その姿を変えた最強の姿だ。

クウガ「おりゃあああ！」

クウガは拳でダグバに重い一撃を与えた。

ダグバ「ぐっ！！はははは」

ダグバも攻撃を仕掛けるがクウガはそれをかわす。

クウガ「うおおおおお！」

その隙にクウガは重い一撃を再びダグバに与える。

ダグバ「ははははははははっ！」

その時、不気味な声が響く。

???「ダグバ・・・いったん退け。貴様はクウガには勝てない。」

ダグバ「嫌だよ・・・君に命令される筋合いはないよ。」

???「ならば、カズくだ。」

ダグバの後ろにブラックホールのようなものが出現し、ダグバは吸い込まれた。

ダグバ「くっ・・・くそ！！・・・やめろおおおおお！！！」

・・・

雄介「ラブ・・・大丈夫？」

ラブ「うん、なんとか・・・うっ！」

ラブは立てない状態になっていた。

雄介「どこか・・・休める場所があれば・・・」

するとデンライナーが現れた。

ラブ「何！？」

雄介「ええ！？電車！？」

ナオミ「どーぞ、お乗りください。」

とりあえず休むためにラブを運ぶ雄介。

のぞみ「ラブ！！」

ラブ「のぞみ！それにみんな、これは一体・・・」

説明中・・・

雄介「そうか・・・ありがとうみんな。」

キン「礼を言われる事でもあらへん！」

光太郎「良かったな、のぞみ。仲間が無事で。」

のぞみ「うん、心配したんだよ？」

ラブ「ありがとう、痛っ！」

ハナ「ああ！動かないで、もう少しで手当てが終わるんだから！」

ラブ「ごっごめん！・・・痛っ！」

のぞみ「後は士先生だね？」

光太郎・雄介「土!？」

ラブ・のぞみ「!!!」

雄介「土がいるの!？」

ラブ「あれ?言わなかったっけ？」

のぞみ「光太郎さんは渡さんに聞いたんじゃないんですか？」

光太郎「いや、俺はこの世界が危ないとしか・・・」

モモ「よし!じゃああいつの所に行くか!」

????「僕も行くよ!」

のぞみ「?」

咲「誰?」

イマジン達・ハナ「あっ・・・」

????「遅くなっちゃったね。」

イマジン達・ハナ「良太郎!!!!!!!」

彼は仮面ライダー電王本来の変身者・野上良太郎だ。

モモ「お前!どこ行ってやがったんだよ!」

良太郎「ちよつと時間のハザマで迷子になっちゃった。」

ウラ「相変わらず悪運だけは強いね。」

光太郎「だけどこんなにライダーが集まったんだ。」

雄介「士を助けられるかもね?」

ハナ「これで歩けますよ、ラブさん!」

ラブ「ありがとう、ハナちゃん」

咲「でも私達はどうすれば・・・」

なぎさ「プリキュアには変身出来ないし・・・」

キン「安心せえ!」

リュウ「そういう時は僕達が助けるから!」

のぞみ「本当に!?!」

無理はさせないからね!」

ウラ「本当だよ!

モモ「よし、行くぜ!」

一同「おおおおお!.....!.....!.....!」

239

第29話 戦力集結（後書き）

次回、あの2人登場させるかもしれません。

第30話 究極の闇との戦い(前書き)

あの2人は次回にということにします、すみません。

第30話 究極の闇との戦い

ディケイドとディエンドはある巨大な扉の前にいた。

ディケイド「この先でいいのか？海東。」

ディエンド「僕にわかるわけないだろ？とりあえず入るよ。」

ディケイド「俺に命令するな。」

ディケイドとディエンドは扉を蹴破った。

そこにはダグバ、ほのか、舞がいた。

ダグバ「へえ、今日は色んな奴が来るんだね。」

ほのか「土さん！」

ディケイド「お前は他のグロンギとは違うらしいな。」

ディエンド「あいつはダグバ、究極のグロンギだ。」

ダグバ「君達、僕を笑顔にしてくれる？」

ディケイド「ああ、あの世でな！」

ディケイドとディエンドは攻撃を仕掛ける。

舞「ダメ！！」

光太郎「なんてひどい事を!!」

雄介「許さない!」

モモ「行くぜ!お前ら!」

のぞみ・ラブ「うん!」
モモタロスはなぎ
さに、ウラタロスはそのぞみに、キンタロスは咲に、リュウタロスは
ラブに取り付いた。

良太郎「みんな、行くよ!」

それぞれベルトを装着する。

一同「変身!」

「ソードフォーム!」

「ロッドフォーム!」

「アックスフォーム!」

「ガンフォーム!」

「ライナーフォーム!」

5人の電王にブラックRX、クウガ、ディケイド、ディエンドが揃
った。

ダグバ「楽しめそうだね。」

電S「てりゃああああ！」

ダグバは電Sの剣を片手で受け止めた。

「フルチャージ！」

電Rはライダーキック、電Aは斧で斬りつけ、電Gはエネルギー弾を放つ。

電S「好きじゃねえがオトリだよ！」

電Sは剣にエネルギーをため、四方向に攻撃が放たれた。しかし、ダグバは桃色の波動を放ち攻撃を打ち消した。

電R「（あれって!?!）」

電G「（プリキュアのカ!?!）」

ダグバ「これで終わり？」

そこにRXとクウガとディケイドが必殺技を繰り出す。

三人「トリプルライダーキック！」

ダグバ「つまらないね。」ダグバは闇のエネルギー波を出し三人を吹き飛ばした。

そこに電王ライナーフォーム（電ラ）が必殺技を繰り出す。

電ラの足下に線路が現れ後ろから4つのデンライナーが走ってきた、

電ラは線路に乗りダグバに突っ込む。

電ラ「電車斬り!!!」

「ファイナル・アタックライド・・・デイデイデイエンド！」

デイエンドは拳銃から強力なエネルギーを放つ。
しかしダグバにはきかなかつた。

ほのか「くっ、な・・・ぎさ。」

舞「み・・・んな。」

その間にもほのかと舞は炎に苦しめられていた。

電S「（このままじゃまずいよ！）そんな事言われてもよぉ！」

電A「（早くしないと！）あいつ強すぎるで！」

ダグバ「そろそろ、終わりにしようか。」

ダグバはほのかと舞に手をかざす。

クウガ「2人共！やめろ！」

ダグバ「ははははっ、ははははっ!!!」

ダグバが火を放とうしたその時、ダグバに何やら光の刃と青、桃色のエネルギーが直撃する。

ダグバ「何？」

????「させません！」

????「仲間を傷つけるなんて許せない！」

????「美しき姫のため、我も戦おう。」

じじく

第30話 究極の闇との戦い（後書き）

new電王びーじゅ?

第31話 奪還(前書き)

本編へ

第31話 奪還

ダグバ「君達・・・何？」

????「大地に咲く、一輪の花!!キュアブロッサム!!」

????「海風に揺れる一輪の花!!キュアマリン!!」

もう一人の方から美しい音色が流れる。

????「変身!」

「ウイングフォーム!」

その人物はなんと白い電王になったのだ。

????「降臨!満を持して。」

電S「(ブロッサムにマリソ!!)お前は手羽野郎!なんでここに!?!」

白い電王の名は電王・ウイングフォーム(電W)、ジークというイマジンが変身した姿。

そして桃色のプリキュアの名はキュアブロッサムこと花咲つぼみ、青色のプリキュア・キュアマリンこと来海えりかだ。

ブロッサム・マリソ「ハートキャッチ・プリキュア!」

電W「家臣共、助けに来たぞ感謝するがいい!」

ディケイド「そんな事言っていないで2人を助ける！」

ダグバ「もっと僕を笑顔にしてよ。」

ダグバはほのかと舞に火を放とうとする。

電W「そうはさせまい！」

電Wは二刀をダグバに投げつける。

ダグバ「あはは、楽しいね。」

ダグバは二刀を弾き返す。

電W「ははははっ、掛かったな！」

ダグバ「!!!!」

二刀はブーメランのように動き、ほのかと舞を縛っていた鎖を切り、ブロッサムとマリンが2人を受け止めその場から離れた。

ブロッサム「大丈夫ですか!？」

マリン「怪我はしてない？」

ほのか「なんとか・・・」

舞「ありがとう。」

ブロッサム「仲間を苦しめて笑うなんて・・・私、堪忍袋の尾が切れました！！！」

ブロッサムはエネルギー弾を放つ。

ダグバ「こんな物。」

しかしその後ろからマリリンが迫っていた。

マリリン「2人の力！返してもらおうよ！」

「フルチャージ！」

電Wは二刀を二色に輝かせてダグバに投げつける。

ダグバは波動を出す、二刀は波動を切り裂きダグバのベルトに直撃した。

ダグバ「ぐわあああ！」

ベルトから力が流れ出す。

エネルギー弾は連射されダグバを襲い、マリリンはベルトに攻撃を仕掛ける。

マリリン「とりゃあああ！！！」

ベルトは粉々に砕け散った。

流れ出た力が電R、電Gに宿る。

電R「どーやら、僕達はあるしかなさそうだね。」

電G「桃ちゃん！亀ちゃん！熊ちゃん！トリちゃん！良太郎！あれで行こうよ！」

電ラ「！・・・わかった行こう！」

電S「よっしゃあああ！！、てんこ盛りだあああ！！」

イマジン達は体を離れ、良太郎の体に集まった。

「クライマックスフォーム！」

電王の体に青い翼が現れ、両肩にはアックスとロッドの顔部、胸にはガンの顔部分が装着され、ソードの顔部分が変形した。これが最強の姿、仮面ライダー電王・超クライマックスフォーム（電C）だ。

クウガ「よし！うおおお！！」

クウガはアルティメットフォームに変身した。

「ファイナル・カメンライド・・・ディケイド！」

ディケイドはコンプリートフォーム

に変身した。

のぞみ「プリキュア・メタモルフォーゼ！！」

ラブ「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！」

ほのか・なぎさ「デュアル・オーロラ・ウェーブ！！」

咲・舞「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

のぞみ達はプリキュアに変身した。ダグバはさっきとは口調が変わり、機械音が混じった声になっていた。

ダグバ「チクショウ！オレ・・・マケルワケガ！」

クウガ「様子が変わだ！」

RX「そうか、あれは雄介君が知っているダグバではなく、作られた偽物だったんだ！」

電C「？」

デイエンド「なるほど、そしてあのベルトがあいつの中枢だったのか。」

デイケイド「今なら行ける！」

それぞれ必殺技を繰り出した。

「ファイナル・アタックライド・・・デイディデイケイド！デイディデイエンド！」

電C「必殺！俺達の必殺技!!」

クウガ「おりああああ!!」

RX「ライダーキック！」

ドリーム「プリキュア・シューティングスター！」

ピーチ「プリキュア・ラブサンシャイン・フレッシュユー!!」

ブラック・ホワイト「プリキュア・マーブルスクリュー・マックス
!」

ブルーム・イーグレット「プリキュア・ツ
イン・ストリーム・スプラッシュユ」

電C「プリキュア& amp; ライダーバージョン!」

ブロッサム・マリ「プリキュア・大爆発!」

ダグバ「バカナアアアアアア!」

ダグバはその場で爆発した。

電C「よっしやああ!」

.....

それぞれのディケイド以外のライダーは元の世界に戻っていった。

数日後

士「なんだか疲れる事ばかり起こるな。」

夏海「世界を救うためです、頑張ってください。」

ダイゴ「みんな、聞いてくれ。」

一同「?」

アスカ「ウルトラマンの故郷である光の国で事件があつたみたいなんだ。」

我夢「僕達はハヤタさん達と一緒に光の国にいかなきゃならないんだ。」

のぞみ「えっ！じゃあもう会えないの!？」

ミライ「光の国の状況次第ですね、でもそんなにかからない気がします。」

つぼみ「それなら安心ですね。」

ダイゴ「じゃあ行ってくる。」

祈里「そんな急に!？」

アスカ「なるべく早く状況が知りたいからな。」

士「わかった、無事を祈つといてやるう。」

ダイゴ「ありがとう。」

ダイゴ達はウルトラマンに変身し、光の国に向かった。

そして闇の中、不気味な声が響く。

「……？」俺は全ての破壊者だ。」

じじく

第31話 奪還（後書き）

次回、ハートキャッチとgogogoかな？

第32話 過去の自分（前書き）

さあ、クライマックスヒーローズ・オリジナルキャラクター登場です。

第32話 過去の自分

「はあ、はあ。」

誰かが息を切らしながら何かから逃げている、キュアアクアだ。アクアは倒壊した建物の中に隠れこむ。

アクア「どうして、何であの人が私達を・・・」

するとアクアが見た方向にブロッサムがいた。

アクア「ブロッサム！！まずは合流しなきゃ・・・」

「ファイナル・アタックライド！！」

アクア「！！！！」

「デイデイデイデイケイド！」

アクア「きゃあああああ！！」

ブロッサムはアクアの悲鳴を聞き、その場所に行った。

ブロッサム「アクア！！」

そこにはアクアの絵が書かれたカードを拾い上げているデイケイドがいた。

ブロッサム「土さん！どうしてこんな事を！？」

ディケイド「言っただろ、俺は全ての破壊者だ。」

数時間前

のぞみ「みんな見て〜!!」

つぼみ「何ですか？」

えりか「あゝ、新しくできた遊園地ね。」

のぞみ「そう! つぼみとえりかが来たお祝いで行こうよ!」

士「何でもかんでもお祝いだな。」

りん「でも、誰と行くの？」

のぞみ「予定が空いてるのが私達とつぼみ達だから士先生も行こう
」!

士「悪いが俺はそんな子どももみたいなどころには行かん。」

のぞみ「うゝ、じゃあ私達で行っちゃうからね!!」

そしてのぞみ達はつぼみ達を連れ、遊園地に来たのだが

こまち「こまちは!?!」

つぼみ「どついう事ですか!?!」

辺りは破壊された遊園地で広がっていた。

のぞみ達「プリキュア・メタモルフォーゼ!」

つぼみ達「プリキュア・オープンマイハート!」

一同はプリキュアに変身した。

マリン「あそこに何かいるは!」

ルージュ「怪人!?!」

ドリーム「!?!、あれは!?!」

そこにはディケイドがいたのだ。

レモネード「土さん!先に来てたんですね!」

ディケイド「.....」

レモネード「土さん?」

「ファイナル・アタックライド・・・ディディディディケイド!」

レモネードはディケイドの必殺技を直撃した。

ブロッサム「レモネード!」

レモネードはカードの姿になり、ディケイドに拾い上げられた。

ローズ「どういう事！士！」

ディケイド「プリキュアの力を集め、俺の力にする。まずははじける力を手に入れた。」

ルージュ「一体どうして!？」

ディケイド「俺は全ての破壊者だからだ。・・・死ぬ」

アクア「みんな！逃げましょう！」

・・・

そしてみんなはバラバラに逃げた。

ディケイド「既に俺は知性、情熱、青い薔薇、安らぎの力を手に入れた。」

ブロッサム「そんな!？」

ドリーム・マリン「ブロッサム!!」

ブロッサムの所にドリームとマリンが駆けつけた。

ディケイド「丁度良い、まとめて掛かって来い。」

ドリーム「やめて!!! 士先生とは戦いたくな・・・」

「アタックライド・・・クロックアップ！」

ドリーム「!!!」

「ファイナルアタックライド・・・デイデイデイデイケイド!!!」

ドリーム

「士・・・先生。」

ドリームはデイケイドの攻撃を直撃、カードにされた。

デイケイド「希望の力、これで貴様らだけだ。」

ブロッサム「やるしかないんでしょうか？」

マリリン「そうみたいね。」

ブロッサムとマリリンは戸惑いながら戦闘体制にはいる。

「アタックライド・・・ギガント！」

デイケイドは4弾ミサイルを出した。

ブロッサム「まずいです！」

マリリン「かわすわよ！」

2人はミサイルをなんとかかわし、必殺技を出す。

ブロッサム・マリリン「プリキュア・ダブルシュート!!!」

デイケイド「馬鹿め！」

「アタックライド・・・ブラスト！」

ディケイドの弾丸はプリキュアのエネルギー弾を全て撃ち落とした。

マリ「そんな！」

ディケイド「終わりだ。」

「ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド！」

ディケイド「だあああー！」

ブロッサム「どうすれば！」

マリ「くっ！」

するとどこからかマゼンタ色の光弾が放たれ、ディケイドを吹き飛ばした。

ディケイド「ぐっ！なんだ？」

「???」人の許可なしに姿真似て悪事働くな。」

ブロッサム「へっ!?!？」

マリ「っ・・・土!?!？」

そこにはもう一人のディケイドが現れた。

デイケイド「いい加減正体現せ。」

デイケイド「・・・良いだろう。」

するとプリキュアを倒した方のデイケイドは緑の複眼から青に、体はマゼンタ色から黒に変わった。

奴こそデイケイドのかつての姿・ダークデイケイド（ダディ）だ。

ダディ「お前は邪魔だ。」

ブロッサム「黒いデイケイド!？」

マリン「一体どういう事なの!？」

デイケイド「俺はかつてある悪の組織のボスだった、あれはその時の俺の姿だ、そして俺は記憶を失い今の姿になった。あれは俺の過去の姿だ。」

ダディ「おしゃべりはそこまでだ。」

ブロッサム「そうだったんですか。」

マリン「関係ないわ、あなたは私達の仲間だから。」

デイケイド「当然だ、行くぞ!!！」

つづく

第32話 過去の自分（後書き）

次回、ネタが尽きた。
よく考えなければ。

第33話 10号(前書き)

似た者どうしのあの人登場！

第33話 10号

デイケイドはダデイに攻撃を仕掛ける。

デイケイド「はっ!!」

ダデイ「貴様は俺自身、倒せるかな？」

ブロッサム「私達の事も忘れては困ります!!」

マリン「うりゃああああ!!」

ダデイに攻撃を加える三人、しかしダデイは攻撃を簡単に弾き返した。

ダデイ「無駄だ、悪の心を無くした貴様に俺は倒せない。」

デイケイド「悪だとか正義だとか興味がねえな!!」

デイケイドはカードケースを剣に変えダデイを斬りつける、ダデイも剣を持ちデイケイドに反撃を加える。

デイケイド「ちっ!!どうすれば!!」

ブロッサム「私はあきらめません!!」

マリン「当たり前でしょ!!」

「プリキュア・ダブルシユート!!」

ダディ「同じ攻撃が通用すると思ってるのか？」

「アタックライド・・・ブラスト！」

ディケイド「させるか！」

「アタックライド・・・ブラスト！」

ディケイドはダディの弾丸に対抗する。

ダブルシユートはダディに直撃、ダディはひるんだ。

ディケイド「よし！」

「ファイナルカメンライド・・・ディケイド！！」

ディケイドはコンプリートフォームに変身した、しかし

ダディ「・・・後悔させてやるぜ。」

「ファイナルカメンライド・・・ディケイド」

ダディは黒がかったマゼンタ色のコンプリートフォームになったのだ。

ディケイド「何！？」

ブロッサム「土さんと同じ！？」

マリン「これじゃ勝負つかないじゃない！」

ダディ「貴様と同じにするな。」

デイケイド「だったらこれだ!」

「ファイナルアタックライド・・・デイデイデイケイド!」

デイ「後悔させてやるぜ。」

「ファイナルアタックライド・・・デイデイデイケイド」

デイケイドとデイは必殺技をぶつけ合った。

辺りは爆風にのまれる。

ブロッサム「きゃあ!」

マリ「土!?!」

そこにはデイに首を絞められているデイケイドがいた。

デイ「こんなものか?」

デイケイド「くっ!」

ブロッサム「このままじゃ土さんが!」

マリ「一体・・・どうすれば!」

デイ「終わりだ!」

音が聞こえた。

すると低いバイク

デイケイド「まさか・・・」

ダディ「なんだ!？」

ブロッサム「誰か来ます!」

マリン「一体何!？」

バイクは止まり1人の男が降りた。

ダディ「何だ? 貴様。」

???「俺は村雨良だ。 貴様の好きにはさせん!」

男はベルトをつけていた、両手を斜め上と下に突き出し叫んだ。

「変身!」

男のベルトは光輝き、赤いライダーに変身した

村雨「仮面ライダーZX!^{ゼクロス}」

ブロッサム「仮面ライダーですか!？」

ダディ「ZXか、だがどうやってこいつを助けるつもりだ?」

ZX「十字手裏剣!」

ダディ「!？」ZXは手裏剣を投げ、ダディを攻撃、ダディはディケイドを手からはなした。

デイケイド「来てくれたのか、ZX。」

ZX「俺とお前は似た者どうしだからな。」

ブロッサム「何が似ているんでしょうか？」

マリン「まあ、聞かないでおこう。」

デイケイド「行くぞ！ZX！」

ZX「よし！！！」

ブロッサム「私達も行きます！」

マリン「当たり前でしょ！」

「ファイナルアタックライド・・・デイディデイケイド！」

ZX「ゼクロスキック！」

ブロッサム・マリン「集まれ！！2つの花の力よ！！」

ブロッサムとマリンにピンクとブルーのエネルギーがたまる。

ブロッサム・マリン「プリキュア・フローラルパワー・フォルティ
ッシモ！」

ハート型のエネルギーがダディを襲う。

ダディ「くっ！」

ダディは攻撃から逃れた、しかしプリキュアのカードは落としていた。

ブロッサム「良かったです、無事に取り戻せて。」

マリン「でもどうやって元に戻すの？」

ディケイド「まかせておけ。」

ディケイドはカードにマゼンタ色のエネルギーを送る。するとカードは光り出し元の姿に戻った。

ルージュ「あゝ、やっと戻れた！」

ZX「意識はあったのか？」

ローズ「ええ、何が起こったかは全部わかるわ。」

ブロッサム「あとは遊園地ですね。」

ルージュ「うわゝ、よく見たらボロボロ。」

ディケイド「それは直るのを気長に待つしかないだろ、戻るぞ。」

.....

シャドー「情けないぞダークディケイド！」

「????」そう奴ばかり攻めるな、フュージョンが良い人材を連れてきたようだ。」

フュージョン「最凶最悪のウルトラマン、ベリアルだ。」

ベリアル「へへっ、世話になるぜ。」

シャドー「見るからに凶悪そうな面構えだな。」

ベリアル「なんだと!?!」

「????」そう熱くなるな、まず互いを知ろうではないか。」

フュージョン「先ほども言ったが我が名フュージョン、プリキュアに憎しみを持つ究極の存在だ。」

ダディ「ダークデイケイド、全ての破壊者だ。」

ベリアル「へへっ、ウルトラマンベリアルだ。」

シャドー「シャドームーン、時期世紀王だ。そういえばお前の名前はまだ知らないな。」

フュージョン「確かに、お前が今回の計画を立てたのだ、名前ぐらい名乗ってもらおうか。」

「????」ホッホッ、そうだな・・・モーフアとでも名乗っておこうか。」

ついに最悪の存在が揃った組織、果たして次の計画は何か。

つづく

第33話 10号(後書き)

次回、舞台は光の国へ

第34話 最悪の合体（前書き）

ではどう・・・ちょっと！何ですかベリアルさん！！

いや、なんか疲れたから一休みしようかと。

なんかキャラ違くない？

第34話 最悪の合体

ここはウルトラ戦士の故郷M78星雲通称・光の国・・・

ガイア（すごいな、ここが光の国か・・・）

ティガ（すごい輝きだ。）

ダイナ（すごいだろ、俺は二回目だけだな！）

セブン（そうはしゃくな、遊びに来たのではないぞ？）

エース（まあまあ兄さん、彼らも初めての事なのだから。）

ジャック（それにしてもどこで事件が起きたんだ？そんな雰囲気じゃないぞ？）

するとあるウルトラ戦士が言ってきた。

ウルトラ戦士（事件？なんの事だい、この国はいつもどおり平和だよ？）

マン（なんだと！？）

するとウルトラの父からウルトラサインが出された。

ダイナ（ベリアルが地球に！？）

メビウス（急ぎましょう！！このままではベリアルが地球に行って

しまいます!!)

ティガ(よし!行こう!)

ウルトラ8兄弟は地球に向かう。

その途中、ベリアルとフュージョンを見つけた。

ダイナ(させるかよ!ベリアル!!)

ベリアル(来たな、ウルトラ兄弟!!)

フュージョン「貴様らの力を我が物にする、そしてプリキュアを葬るのだ!」

エース(そんな事はさせない!)

ウルトラ兄弟は攻撃にでる。

全員で光線を放った、しかしフュージョンはそれを全て体に取り込んだのだ。

ベリアル(すごいな、あれを取り込むとは。)

ガイア(光線が効かない!?)

セブン(こうなったら切断技だ!!)

セブンはアイスラッガー

マンは八つ裂き光輪
を放つ。

フュージョン「無駄だ。」

フュージョンは体をくねらせ攻撃を避ける。

ティガ（切断技まで！？）

マン（仕方ない、打撃で行くぞ！）

ティガ、ダイナ、ガイア、メビウスはベリアルと

マン、セブン、ジャック、エースはフュージョンに攻撃を仕掛ける。

エース（エースファイヤー！！）

エースは手から炎を出す。

フュージョン「力を我が物に」

フュージョンはエースファイヤーでさえも取り込んだ、そしてエースに襲いかかった。

マン（エース！！）

マンはスペシウム光線でエースを助けようとするがフュージョンに光線を取り込まれてしまった。

エース（くっ！ぐあ！）

エースはフュージョンに取り込まれてしまった。

メビウス（エース兄さん！）

ベリアル（お前の相手は俺様だろ！！）

メビウスはベリアルにメヒュームシユートを放つ、ベリアルはそれを軽々と弾き返した。

フュージョン「一つに」

メビウス（！！！！）

気づいた時にはメビウスまでもがフュージョンに取り込まれてしまった。

ティガ（そんな・・・メビウスが！！）

フュージョン「ベリアルよ、早めに片付けるために我と一つにならんか？」

ベリアル（へへっ、面白そうだな。）

フュージョンはベリアルを取り込み姿を変えた。

マン（姿が変わった！？）

ジャック（なんとおぞましい姿だ。）

ベリアルとフュージョンは合体し、力を増幅させた。

ベリアル「すげー、こんなに快適なのか。」

ティガ（くっ、2人を返せ！！）

ダイナ（まで！！ダイゴ！！）

フュージョン「くだばれ。」

フュージョンはエースの技・メタリウム光線を放った。

ティガ（ぐわああああ！！）

ガイア（エース兄さんの技を！？）

マン（奴は取り込んだ者の力を使う事ができるのか！？）

ベリアル「次は貴様だ、ウルトラマンティガ！！」

しかし他の兄弟がティガを助ける。

ダイナはソルジエント光線

ガイアはクアンタムストリーム

マンとジャックはスペシウム光線

セブンはワイドショット
を放つ。

セブン（ダイゴ！！お前は地球に行け！！）

ティガ（えっ！？）

ダイナ（士達にこの事を伝えるんだ！）

ティガ（でも君達は！？）

マン（まかせておけ、早くいくんだ！）

ティガ（くっ……絶対死なないでください！）

ティガは地球に向かう。

ベリアル「行かせんぞ！」

ゼペリオン光線でなんとかベリアルを食い止めその場を離れた。

……

士「何故レシピアがあるのにこんな味になるんだ!？」

かれん「あつ、あら、可笑しいわね。」

なぎさ「士さん、これはどうです?」

士「……塩辛いんだよ!！」

すると玄関から物音がした。

夏海「?、なんでしょう。ちょっと見てきます。」

そこには傷だらけのダイゴが倒れていた。

夏海「ダイゴさん!！」

ダイゴ「……う、うん。」

ほのか「気がつきました？」

ダイゴ「あれ……ほのかちゃん、ここは!？」

ほのか「写真館です、少し落ち着いてください。」

士「何があつたんだ?説明してもらおうか?」

ダイゴは何があつたかを説明した。

のぞみ「大変!早く助けに行かなきゃ!」

士「馬鹿!どれだけ時間がかかると思ってる、それにダイゴは傷を負っているんだ、むやみに動かすわけにはいかないだろ。」

こまち「でも、どうすれば?」

士「奴が地球に来るのを待つ、そこで一気に叩く。」

夏海「すごい作戦ですね。」

祈里「でもそれが一番いいかもしれないね。」

ひかり「ではその怪物が来るのを待ちましょう。」

.....

フュージョン「ウルトラ兄弟を取り込んだ、後は地球にいる奴らだけだ。」

ベリアル「へへっ、地球でひと暴れしなきゃだな。」

ついにティガを除くウルトラ兄弟がフュージョンとベリアルに取り込まれてしまった、そして物語は終結に近づく。

つづく

第34話 最悪の合体（後書き）

あと5話くらいかな、どうしようかな？

第35話 怪人軍団と2人の探偵1人のライダー（前書き）

そろそろ決戦の日が近づいてきました。

第35話 怪人軍団と2人の探偵1人のライダー

ある夜、士、のぞみ、ダイゴはある夢を見た。
それは悪の組織に世界が破壊される夢だ。

のぞみ（くっ……ダメ、もうやめて!!）

士（くそ……どうしてこんな事に!!）

ダイゴ（一体……どうすれば。）

翌朝

りん「どうしたの？のぞみ、具合悪そうだよ？」

のぞみ「うん、変な夢見ちゃって……」

こまち「無理はしっちゃダメよ？」

そこに士がやって来た。

士「のぞみ、なにか変な気配がしないか？」

のぞみ「へ？……たしかに何かどんよりした空気が流れてるよっ
な。」

するとそこにプリキュアメンバー全員と夏海がやって来た

うらら「どうしたんですか？大勢で慌てて。」

夏海「みんな来てください！大変なんです！」

士達は夏海達が言うままついていった。

気づくとそこは町外れの崖が広がる何も無い場所だった。

のぞみ「ここに何かあるの？」

なぎさ「崖の下を見て！！」

崖の下にはシャドームーン、ダークデイケイド率いる怪人軍団がいた。

シャドームーン「来たか。」

士「面倒だな、どうする？」

のぞみ「やるしかないじゃん！夏海さんは下がってて。」

士「そう言っと思ったぜ、変身！」

のぞみ達「プリキュア・メタモルフォーゼ！」

くるみ「スカイローズ・トランススレイト！！」

ラブ達「チェインジ！プリキュア・ビートアップ！」

なぎさ・ほのか「デュアル・

オーロラウェーブ！」

ひかり「ルミナス・シャイニングストーリー」

ムー!!」

咲・舞「デュアル・スピリチュアルパワー!!」

つぼみ・えりか「プリキュア・オープンマイハート!!」

ディケイドとプリキュアは崖から飛び降り、怪人軍団に立ち向かう。怪人はシヨッカー戦闘員、下級グロンギ、アンノウン、ミラーモンスター、オルフェノク、アンデット、まかもう、ワーム、イマジン、ファンガイア、そしてマスカレイドドーパントだった。

ディケイド「こんな雑魚達でよく世界征服を企むもんだな!!」

ディケイドは次々と怪人を倒していく。

ブラック「これくらいならなんとかかなりそう!!」

ホホワイト「油断は禁物よ!!」

ルミナス「援護します!!」

マックスハート組はルミナスに援護されながら怪人を倒していく。

ブルーム「でもどうしてこんな弱い怪人ばかり!?!」

イーグレット「わからない!!」

スプラッシュスター組は疑問に思いながら怪人を倒していく。

ドリーム「それにしても数が多い!!」

ルージュ「確かにね！」

レモネード「こんなに多いのに何故町外れのこんな場所に待機して
いたんでしよう!？」

ミント「わからないわ！」

アクア「今は目の前の事に集中しましょう!！」

ローズ「そうね！」

プリキュア5は敵を倒すことに専念する。

ピーチ「倒してもきりがない！」

ベリー「・・・やっぱり何かがおかしいわ！」

パイン「でも一体何が!？」

パッション「何か企んでるのは違いなさそうよ！」

フレッシュ組は何かあると感じ警戒しながら敵を倒していく。

ブロッサム「はあはあ、だんだん疲れてきました。」

マリン「それはみんな同じ・・・!、まさか!！」

ハートキャッチ組は何かに気づいた。

ダディ「そろそろだな。」

シャドー「よし、行け！！最強の怪人軍団よ！」

シャドーは今の怪人軍団より倍多く、桁外れな強さを持つ怪人軍団を呼び出し、プリキュアとデイケイドに攻撃を仕掛ける。

デイケイド「なっ！ぐああああ！！」

ピーチ「そんな！きゃあ！！」

ドリーム「力がさつきと違いすぎる！！」

ブロッサム「私達を弱らせてから叩く作戦だったんですか！？」

ブラック「まずいわ！きゃあ！！」

ブルーム「あああっ！！」

プリキュアとデイケイドは力に押され、ふっ飛ばされた。

パイン「っ・・・強い。」

ルージュ「くっ、体が動かない。」

しかしドリームが無理に立ち上がり、敵陣に突っ込む。

ドリーム「うわあああああ！！！！！！！！」

デイケイド「ドリーム！！やめろ、おい！！！！！！」

ドリームは敵に攻撃するが簡単に受け止められ、シャドームーンと
ダークデイケイドの所に投げられた。そしてダークデイケイドがド
リームを踏みつける。

ドリーム「あぁっ!!」

デイ「馬鹿な女だ、力もないくせにでしゃばりやがって。」

ドリーム「あなた達のカ・・・本当のカじゃない!!」

シャドー「きれい事を・・・。」

ドリーム「きれい事でも何でも良い!!力は腕力や権力だけじゃな
い!!仲間を信じる心や許し合える心が本当のカなの!!」

デイケイド「ドリーム・・・」

デイ「フンッ。」

シャドー「その口、今すぐたたけなくしてやるっ。」

シャドームーンはサタンサーベルでドリームにとどめをさそうとな
る。

ドリーム「!!!!」

ブラック「ドリーム!!」

ブルーム「そんな・・・」

「ダディ」いつまでしゃべっているつもりだ！」

シャドー「貴様ら何者だ!？」

フィリップ「僕達は2人で1人の探偵さ。」

翔太郎「行くぜ、フィリップ。」

翔太郎はベルトを装着する、するとフィリップの腰にもベルトが現れた。

そしてフィリップは緑のメモリ、翔太郎は黒のメモリを取り出し構える。

翔太郎・フィリップ 「!!!変身!!!」

フィリップは緑のメモリをベルトに差し込む、するとそのメモリは消え翔太郎のベルトに移された。フィリップは倒れ込む。

ミント「危ない!!!」

ミントがフィリップを受け止める。

翔太郎「安心しな、フィリップの魂が俺の体に移っただけだ。」

ミント「えっ!？」

翔太郎は緑のメモリを差しなおし、黒のメモリを差し込みベルトを左右に開いた。

「サイクロン! ジョーカー!」

ボイスとサウンドと共に翔太郎の体が半分緑と黒、赤い複眼の姿に変わった。

これが仮面ライダーWだ。

W「さあ、お前の罪を数えろ！」

変身と同時に起こった旋風で軍団は吹き飛んだ。

W「大丈夫か？」

ドリーム「ありがとう、あなたも仮面ライダーなんだね！！！」

ダディ「チツ、1人増えたからってこの状況は変わらんぞ！！！」

W「（正確には2人だ。）それに、助っ人が俺達だけって誰が言った？」

シャドー「何！？」

ルミナス「！！、見てください！！！」

ルミナスが崖の上を指差す。

全員が崖の上を見る、そこには二十数人の男が立っていた。

「そこまでだ！！！」

UJU<

第35話 怪人軍団と2人の探偵1人のライダー（後書き）

次回、ついに!!

第36話 全員集合(前書き)

ついに来ました！

第36話 全員集合

「?????」そこまでだ!!!」

シャドー「貴様らは!?!」

ホワイト「あの人達は一体……」

イーグレット「あの怪人を知っているみたい。」

「?????」最近奇襲が来ないと思ったたらこんな組織を作っていたとはな!!!」

「?????」だがその組織も今日で壊滅だ!!!」

ダディ「偉そうに……何だ貴様らは!!!」

「?????」俺は本郷猛!!!ライダー……変身!!!」

「?????」俺は一文字隼人、変身!!!」

「?????」俺の名は風見志郎、変身……ブイスリヤア!!!」

「?????」俺は結城丈二、ヤア!!!」

「?????」俺は神敬介だ!!!大・変・身!!!」

「?????」山本大介!!!アアマアゾオン!!!」

??? 「俺は城茂!!!変身・・・ストロンガー!!!」

??? 「筑波洋、スカアイ・変身!」

??? 「沖一也だ!!!変身!」

??? 「村雨良!変身!!!」

??? 「南光太郎!変身!!!」

??? 「風祭真だ!ぐっ・・・うおおお!!!」

??? 「俺は麻生勝だ、変身。」

??? 「瀬川耕司、変身!!!」

??? 「五代雄介!変身!!!」

??? 「津上翔一!!!変身!!!」

??? 「城戸慎司だ!変身!」

??? 「乾巧、変身!」

??? 「剣崎一真だ!!!変身!!!」

??? 「響だ。」

??? 「天童総司、変身。」

「????「僕は野上良太郎、変身。」

「????「紅渡だ!!!変身!!!」

「????「僕は吾郎だ!!!変身!!!」

その男達の体は光輝き、崖から飛び降り着地した。

ドリーム「まさか!!!」

レモネード「あれって……」

ベリー「みんな仮面ライダー!?!」

パッション「すごい。」

シャドー「くっ、貴様ら!」

そこには一号からGまでの計27人も仮面ライダーが集まった。

一号「プリキュア、君達も一緒に戦ってくれ!!!」

V3「俺達だけでは奴らには勝てない!」

W「引き受けてくれるか?」

G「仮面ライダーとプリキュアのマリアージュは最高の相性だ。」

プリキュア達は当たり前のように頷く。

一号「ありがとう・・・よし、行くぞ！」

プリキュア達は立ち上がり、仮面ライダーと共に敵陣に突っ込む。

ダディ「奴らを殺せ！！」

怪人が一斉に迫る。

まず一号、クウガ、ホワイトが敵を倒していく。

クウガ「はっ！たあ！！」

ホワイト「えい！やあ！！」

一号「！！、ホワイト危ない！！、とお！！」

一号はホワイトに攻撃をしようとした怪人を蹴り倒した。

ホワイト「ありがとうございます！！」

次にブルーム、電王だ。

電王「てりゃあ！たりゃあ！」

ブルーム「たあ！！」

電王「へへん、俺！」

電王・ブルーム「参上！！」

電王「ん？」

ブルーム「えへへ、真似しちゃった!!」

電王「へっ！勝手にしろ。」

次にG、アクア、デイケイドだ。

デイケイド「はっ！やあ!!」

Gは胸に手をあて剣を出現させる、アクアはトルネードフルーレを出す。

G「やあ!!たあ!!」

アクア「後ろはまかせて!!はあ!!」

Gとアクアは敵を切り倒していく。
次にブラック、RX、blackだ。

ブラック「たあ!とりゃ!・・・ちよつと離して!!」

RX・black「ライダーパンチ!!」

RXとblackはブラックを助けた。

ブラック「ごめんなさい、迷惑かけて」

black「気にするな。」

RX「よし!!一斉に行くぞ!!」

三人は上空に飛んだ。

R X ・ b l a c k ・

ブラック「トリプルキック!!」

怪人を一気に倒していく。次にスーパー1（S1）とルージュだ。

S1「ふっ!やあ、はあ!!」

ルージュ「プリキュア・ファイヤーストライク!!」

S1「火炎放射発射!!」

2つの炎が怪人を襲う。

S1「よし!!」

ルージュ「やったね!!」

S1とルージュはハイタッチをした、次にアマゾン、真、響鬼だ。

真「ぐおお!!」

アマゾン「ききい!!」

怪人軍団をなぎ倒し、一体の怪人を2人でつかみ崖から飛び降りる、そこに響鬼が怪人の背中に火炎鼓を取り付ける。

響鬼「音撃弾・爆裂強打!!」

飛び降りながら怪人に音撃棒・烈火を叩きつけ怪人を倒す。

真「よし・・・」

アマゾン「ききい!!」

響鬼「いつちよあがり!!」

次にブレイド、ローズだ。

ローズ「ミルクィローズ・メタルブリザード!!」

ブレイド「よし、行くぞ!」

ブレイドはブリザードの勢いに乗り必殺技・ライトニングソニックを繰り出す。

そして怪人を吹き飛ばす。

次にミント、スカイライダー、龍騎だ。

スカイ「はああああ!!」

龍騎「あつ!!空飛んでる!!こっとなったら俺も・・・」

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー!!」

龍騎「よっしゃ!これだ!!」

龍騎はエメラルドソーサーに乗ったのだ。

ミント「えっ!?!」

スカイ「ありゃ!?!」

龍騎「だああああ!!」

龍騎は剣で怪人を斬りつける。

次はW、X、アギトだ。

「ヒート! メタル!」

X「ライドル・スティック!」

アギト「ストーム・ハルバート!」

三人は杖で怪人をなぎ倒していく。

次にイーグレット、ベリー、パイン、ZXだ。

イーグレット「てやあああ!!」

パイン「たあ!!」

ベリー「やあ!!」

ZX「集中爆弾!!」

ZXは爆弾でプリキュアを援護する。

次にV3、ライダーマン、キバ、レモネードだ。

レモネード「プリキュア・プリズムチェーン!」

ライダーマン「ロープアーム!」

2人で敵の動きを止める。

V3「よし、行くぞキバ！」

キバ「はい!!！」

「ウエイク・アップ!!！」

「V3きりもみキック!!！」
で倒した。次にパッション、ストロンガー、カブト、555だ。
怪人を必殺技

パッション「私達は上空の敵を始末しましょう!!！」

ストロンガー「だがあんなに高く飛んでるぞ?」

555「スカイライダーも忙しそうだぜ?」

パッション「まかせて、吹き荒れる!幸せの嵐!プリキュア・ハピ
ネスハリケーン!!」

ハリケーンを起こし、敵を落とす。

敵はまた空を飛ばうとする。

ストロンガー「させん!エレクトロファイヤー!!」

カブト「クロック・アップ!!」

555はアクセルに変身した。

「スタート・アップ!!」

ストロンガーから一直線上に電流が走る。555とカブトは素早く

移動し必殺技を繰り出す。

555「やああああ!!」

カブト「はあっ!!」

怪人を倒した、次に二号、ブロッサム、マリン、Z.O、Jだ。

「プリキュア・ダブルシュート!!」

2色のエネルギー弾を怪人にぶつける、
二号、Z.O、Jが必殺技を繰り出す。

「ライダートリプルキック!!」

怪人は一気に爆発を起こした。

数ものこり少ない。最後はデイケイド、ドリーム、G、ストロンガー、ルミナスだ。

G「だああああ!!」

ストロンガー「やああああ!!」

ドリーム「たあああ!!」

デイケイドはカードを使った。

「ファイナル・フォームライド・・・ドドドドリーム!!」

ドリーム「わああ!!土先生、いきなりやめてよ結構びっくりするんだから。」

ディケイド「わかった、ドリームあれをやるぞ。」

ディケイドはカードを取り出した。

ドリーム「!!、わかった。」

その時ドリームの後ろから怪人が襲ってきた。

ドリーム「ええ!!！」

しかしルミナスのバリアーで難を逃れた。

ルミナス「大丈夫ですか？」

ドリーム「助かったよ〜！」

「ファイナル・アタックライド・・・ディディディケイド！ドドドドリーム!!！」

ディケイド「だああああ!!！」

ドリーム「プリキュア・ディメンションスター!!！」

怪人軍団は爆発し全滅した、のこるはシャドームーンとダークディケイドだけだ。

つづく

第36話 全員集合（後書き）

次回、またまた苦難！？

第37話 究極合体獣（前書き）

今回は短めです。

第37話 究極合体獣

デイケイド「のこるはお前らだけだぜ。」

ドリーム「もうあきらめなさい!!」

シャドー「ふん、こんな展開は想定内だ!!」

シャドーはなんとダークデイケイドにサタンサーベルを突き刺した。

ダデイ「き・・・さま・・・何・・・を」

シャドー「貴様の力をこの俺によこせ!!」

ダークデイケイドは消え、その力がシャドーに流れる。
そして空からおぞましい姿の怪獣が現れた。

一号「あれは!?!」

ローズ「ダイゴが言ってた合体怪獣ね!」

ドリーム「フュージョンが生きてたなんて。」

フュージョン「シャドームーンよ我と一つに。」

シャドー「いいだろう。」

シャドーはフュージョンとベリアルの合体怪獣とさらに合体し、究極合体獣・バイオルサタンへと姿を変えた。

バイオル「ハツハツハツ、これが究極の力だ!!」

ルージユ「何なの・・・あれ!」

W「(閲覧を完了した、奴の全長は約100メートルになる。)なんだと!？」

バイオルはエネルギー弾を連射しライダーとプリキュアを爆発に巻き込んだ。

ライダー「ぐわああああ!!」

プリキュア「きゃああああ!!」

プリキュアとライダーは吹き飛ばす。

その時、

「ティガアアア!!!」

ダイゴはティガに変身し、怪獣に立ち向かう。

マリン「ダイゴじゃん!？」

ルミナス「でもまだ体の傷が・・・」

ディケイド「ああ、なんだか体がらしくない動きをしている。」

ティガは危機を感じたのか、ゼペリオン光線の体制に入る。

バイオル「させるか!!」

バイオルは取り込んだウルトラ兄弟をティガに見せた。

ティガ（!!!、みんな!）

パイン「ウルトラマン達が!？」

キバ「人質というわけか!!」

G「なんて卑怯な!!」

バイオルは黒い光線を放つ、ティガは慌ててゼペリオン光線を放ち
対抗するがいとも簡単に押し返されてしまった。

ティガ（ぐわああああ!!）

ブロッサム「ああ!!ダイゴさんが!!」

ディケイド「いい加減にしゃがれ!!」

ドリーム「許さない!」

「ファイナルアタックライド・・・ディディディケイド!」

ドリーム「プリキュア・シューティングスター!」

2人は必殺技でバイオルに攻撃するが、巨大な怪獣には、ビクとも
しなかった。

バイオル「貴様らの力は邪魔になりそうだ、別の次元に行かせてやるう。」

バイオルは爪で空を切るとそこからワームホールが出現し2人を吸い込んでしまった。

デイケイド「うわああああ!!」

ドリーム「きゃああああ!!」

ルージュ「ドリーム!!」

クウガ「デイケイド!!」

バイオルはティガに攻撃を加え、プリキュアとライダーにも黒い光線を放つ。

ティガ（うわああああ!!）

ライダー「ぬああああ!!」

プリキュア「きゃああああ!!」

バイオル「ハッハッハッ、世界は我々の物だ!!」

絶対絶命のピンチ、はたして究極合体獣・バイオルサターンを倒す事はできるのか。

UJU<

第37話 究極合体獣（後書き）

次回、衝撃の展開！！

第38話 光（前書き）

題名に背いて大サービスです！

第38話 光

ここはディケイドとドリームが飛ばされた謎の次元、ディケイドは士に、ドリームはのぞみの姿になっていた。

士「のぞみ、一体何だここは？」

のぞみ「わからないよ。」

すると2人は互いの姿が見えなくなった。

士「のぞみ!？」

のぞみ「士先生!？」

その次元にはそれぞれの思い出の一部が写真のように現れた。それが次々と碎けていく。

士「俺が撮った写真が!!やめる!!」

のぞみ「やめて!! 私達の思い出を消さないで!!」

最後に歓迎会の時に撮った写真が残った。

士「この写真だけは・・・やめてくれ!!」

のぞみ「お願い!!やめて!!」

しかしその写真も碎けてしまった。

士「！！！！」

のぞみ「そんな!？」

士「結局・・・全てを失う定めだったか。」

のぞみ「もう・・・何も思い出がない。」

そう絶望していた時、一つの映像が現れた。

士「まだ俺にも思い出が?」

のぞみ「違う・・・これは!？」

それは勝ち目のない相手に立ち向かうプリキュア、仮面ライダー、
ティガの映像だった。

龍騎「負けるかああ!!」

ローズ「必ずみんなを救い出す!」

ティガ（うおおおおお!）

士「みんな、こんな状況でも・・・」

のぞみ「あきらめず戦ってる！」

すると別の映像が多数現れた。

それはウルトラマンが敗北する映像だった。

士「これは……」

のぞみ「ウルトラマンが……」

マンはゼットンの光線で倒れ

ジャックは二体怪獣に攻撃され

ティガは石化

ダイナは怪獣の体内に閉じ込められ

数々のウルトラマンの映像が流れた、そして人々があきらめずウルトラマンを応援し、光になる映像が流れた。

士「人々が……光に……」

のぞみ「ウルトラマンはみんな……こんなにもたくさんの人々に……」

士「支えられていたのか!？」

black「悪に

生きる道はないと思い知れ！」

クウガ「これ以上誰かの涙は見たくない!!」

ブラック「私達は負けない！」

士とのぞみは互いの姿が見えるようになった。

士「のぞみ……」

のぞみ「土先生……」

その時2人の体がひかりだした。

士「これが……人の光……」

のぞみ「すごい暖かい……人は光になれる……」

2人は互いに手を握り互いに微笑む。

「光よおおおおお!!!!!!!!!」

その時、バイオルサタールの前に光が現れる。

バイオル「何だ!?!」

ティガ（この光は!?!まさか!?!）

士とのぞみはデイケイドとドリームの姿で元の次元に戻った。

V3「2人共!無事だったか!?!」

デイケイド「来たか。」

するとバイオルサタールの周りに多数の光が現れる。

バイオル「!!!、そんな……そんなはずは!?!」

その周りにはゾフィー、タロウ、レオ、ジョーニース、80、グレート、パワード、ゼアス、ナイス、コスモス、ネオス、ネクサス、マックス、ヒカリそしてゼロの計15体のウルトラマンがいた。

イーグレット「ウルトラマン!？」

ピーチ「あんなにたくさん!!!」

ディケイド「・・・光か。」

ウルトラマンはエネルギーをバイオルの体内にいる兄弟に送った。

バイオル「ぬあああああ!!!」

バイオルの体内からマン、セブン、ジャック、エース、ダイナ、ガイア、メビウスが飛び出した。ティガにもエネルギーが送られる。

ダイナ（ひどい目にあっただぜ!）

マン（兄弟達が来てくれた!）

8兄弟は上空に飛び、兄弟と合流する。

ガイア（来てくれたんですね!?!）

レオ（当たり前だ、俺たちは兄弟だからな。）

ゼロ（そういう事だ。）

セブン（行くぞ!!!）

ウルトラマンはバイオルに向かって飛び立つ。

バイオル「おのれええ！」

バイオルは触手を何本も伸ばしてきた。

セブン（ゼロ！マックス！）

ゼロ（わかってるよ！）

マックス（よし！！）

三人は頭から宇宙ブーメランを飛ばし触手を切った。

ダイナはソルジェント光線を放つがバイオルの手につかまれた。

ダイナ（くっ！離せよ！！）

そこにゼアスが回転かかと落として手を蹴り飛ばした。

ゼアス（大丈夫か！？ダイナ！！）

ダイナ（助かったぜ！ゼアス！！）

マン、ジャック、パワーはバイオルに向かってスペシウム光線を放つ、3つのスペシウムが合わさり強力な威力になりバイオルを襲う。

マン（よし！！）

ジャック（ひるんだぞ！）

パワード（このチャンスを逃すな！）

レオ、80がバイオルに突っ込む。

レオ（行くぞ！80！！）

80（はい！！）

レオはレオキック

80はムーンサルトキックでバイオルを押し倒す。

バイオルは光弾を連続で放つ、しかしネオスとナイスが腕をクロスさせ光線を放ち全て打ち消す。

ナイス（どーだ！父さんパワーだ！！）

ネオス（お前の好きにはさせない！）

その際にメビウスとヒカリが

ヒカリ（行くぞメビウス！）

メビウス（わかった！）

ヒカリとメビウスは力を一つにし、メビウス・フェニックスプレイブに姿を変えた。

メビウス（グレート兄さん！）

グレート（わかってる！）

メビウスとグレートは両腕から剣を出し、バイオルの攻撃を切り落としていく。ガイアがフォトンエッジでバイオルを押すが後ろから触手が迫る。

ガイア（！！！！）

ジョーニース（させるか！！）

ジョーニースは光弾を放ち触手を打ち消す。

ガイア（すまない！）

ゾフィーとコスモスは片手から一直線の光線を放ちバイオルをひるませる。

バイオル「何故だ！！何故我が押されている！！」

コスモス（お前には仲間がいない！）

ゾフィー（取り込んだ奴らも自分が利用するためだけに集めたんだろ！！！！）

バイオルは攻撃を仕掛ける、しかしエース、ティガ、ネクサスは腕をL字に組み光線を放ち攻撃を押し返す。

エース（俺たちは仲間だけじゃない！！）

ネクサス（たくさんの人々の光にも！）

ティガ（支えられてるんだ！）

そこにタロウがキングブレスレットを槍に変えバイオルに突き刺した。

タロウ（人の光をなめるな！！）

バイオルはウルトラ兄弟の力にだんだん弱ってきた。

バイオル「我は消えん！行け、我が下部達よ！」

バイオルは小型の飛行怪獣と地上には怪人を出した。

ドリーム「また怪人！？」

555「面倒くせえなあ。」

アクア「でも先ほどよりは数が少ない！！」

ディケイド「行ける！」

バイオルは逃げ出した。

マン（ダイゴ！！お前は奴を追え！）

メビウス（こいつらは任せてください！）

ティガ（みんな・・・わかった！）

ティガはバイオルを追うため空を飛び、水中に入ってしまった。

۲۳۲

第38話 光（後書き）

BGMをかけるとしたら 今回は遠き呼び声の彼方へ

次回は光を継ぐ者の闘争
ですかね？

第39話 最終決戦！！（前書き）

ついに戦いは終わりを迎える。

第39話 最終決戦！！

ティガは水中でバイオルを追う。

ティガ（絶対に逃がさない！！）

バイオル「フン、貴様一人で我に勝てるんでも思ってるのか！？」

ティガは攻撃を仕掛ける。

バイオルにつかみかかり、打撃を加える。

バイオル「それで攻撃しているつもりか！？」

バイオルはティガをエネルギー弾でふっ飛ばす、しかしティガは体制を立て直し再び立ち向かう。

ティガ（みんなのために、僕は戦う！）

バイオル「馬鹿めっ・・・くっ、何！？」

ティガの攻撃が効いたのだ、気づけばティガの体は倍以上大きくなり金色に光っていた、これが人々の光によって誕生した最強のティガ・グリッターティガだ。

ティガ（お前との戦いもここで終わらせる！！）

ティガは拳をバイオルに突き出す、すると金色のエネルギーがバイオルを襲う。

バイオル「ぐっ！何だこれは!？」

ティガ（これがお前が絶対に知る事のない人々の光だ!！）

ティガは腕をクロスに突き出しゆっくり横に大きく広げ、エネルギーをためる。

バイオル「くそ、終わりだ死ね!!!！」

バイオルは黒い光線を放つ。

ティガは腕をL字に組み、金色がかつた白色の光線を放つ。

ティガの光線はバイオルを光線を一気に押し返す。

バイオル「馬鹿な!!!ぐわああああ!！」

光線はバイオルに直撃、バイオルは先ほどの場所へ引き返す、元に戻ったティガはバイオルを追う。

バイオル「奴らを始末すれば、ティガにも隙ができ・・・何!？」

そこにはバイオルが出した怪獣、怪人を全て倒したウルトラマン、プリキュア、仮面ライダーがいた。

一号「これで貴様を守る者はいなくなつた。」

そこにティガも到着する。

ティガ（みんな!!!とどめだ!!!）

ドリーム「うん!!」

ディケイド「わかっている!」

バイオルに向かつて

マンはスペシウム光線

セブンはワイドショット

ジャックはシネラマショット

エースはメタリウム光線

ゾフィーはM87光線

タロウはストリーム光線

レオはシューティングビーム

ジョーニアスはプラニウム光線

グレートはバーニングプラズマ

ペシウム光線

ゼアスはスペシウシユラ光線

ナイスはミレニアムクロス

ティガはゼペリオン光線

ダイナはソルジェント光線

ガイアはクアンタムストリーム

コスモスはコズミューム光線

ネクサスはオーバレイ・シユトローム

マックスはマクシウムカノン

メビウスはメビュームナイトシユート

ネオスはマグニウム光線

ゼロはワイドゼロショット

を一気に放つ。

パワーDはメガス

80はサクシウム光線

ディケイド「俺たちも行くぞ!みんな!!」

ライダー「おう!!」

「オールライダーキック！」

オールライダーがエネルギーを帯び一斉にキックを繰り出す。

ドリーム「私達も行こう！」

プリキュア「うん！！！」

プリキュア全員はエネルギーをためる。

マックスハート「光の力！」

スプラッシュスター「大地の力！大空の力！」

g o g o「希望の力！情熱の力！はじける力！安らぎの力！知性の力！青い薔薇の力！」

フレッシュ「愛の力！希望の力！祈りの力！幸せの力！」

ハート「2つの花の力！」

プリキュア「今！！プリキュアの下に降りたまえ！！！」

「プリキュア・オールスター・エクスペディション！」

七色の星のエネルギーがバイオルを襲う。

バイオル「わ・・・我は・・・究極の存在・・・我が・・・敗北など・・・ありえん！ありえんのだあああああ！！！」

バイオルは膨大な光と共に消滅した。

ティガ（やった！）

ディケイド「ついに・・・」

ドリーム「倒した〜！」

プリキュア全員は飛び上がり
ライダーは共に握手をかわし
ウルトラマンはそれぞれ向かい合い頷く。
その時、全ての根源である闇の存在・モーフアが現れた。

ディケイド「！！！！」

ドリーム「なにあれ！」

二号「あのオーラ、奴が全ての根源のようだ。」

ルミナス「全ての・・・」

ローズ「根源・・・」

モーフア「フッフツ、あの怪獣を倒すとはな、少しあなどっていた
ようだ、だが我はあきらめん、必ずこの世界を我が物にするのだ！」

ティガ（ふざけるな！）

ディケイド「貴様の野望も・・・」

ドリーム「今日で終わりよ！！！！」

ティガ、ディケイド、ドリームの体が金色に輝く。

モーフア「この輝きは!?!」

ティガはゼペリオン光線

ディケイドはディメンションキック

ドリームはプリキュア・シューティングスター

を放つ、それぞれの技は金色を帯びモーフアに直撃する。

モーフア「ぐっ・・・我は全てを絶望で包むのだ!」

ティガ（無駄だ、どんな絶望の中でも、人の心から光が消え去る事はない!?!）

ドリーム「そうだよ!?!どんなに大きな絶望の中でも必ず光を見つけて出す事が出来るの!?!」

ディケイド「その光がどんなにちっぽけでも、その光を信じ突き進めば必ずその光を手にする事が出来る!」

モーフア「馬鹿な!?!・・・馬鹿なああああ!?!?!?!」

モーフアは消え去った。

プリキュア、仮面ライダー、ウルトラマンは喜びにひたる。

ティガ（やったね。）

ディケイド「ああ、これで全て終わったんだ。」

ドリーム「みんな！！お疲れ様！！」

しかし、喜んではいられない。

根源を倒した今、融合した世界は元に戻ろうとしている。
それが彼らの別れの時でもあるのだ。

つづく

第39話 最終決戦！！（後書き）

次回、ついに最終回！

最終話 再会を夢見て（前書き）

ついに最終話です。

最終話 再会を夢見て

夏海がみんなの所に駆けつける。

夏海「ついに終わりましたね。」

士「ああ、だが・・・」

のぞみ「どうしたの？」

ダイゴ「根源を倒した今、僕達は自分達の世界に帰らなければなら
ない。」

のぞみ「どういう事？世界は一つに・・・」

渡「根源を倒した今、融合した世界が元に戻ろうとしています。」

ひかり「つまり、もう会えないんですね。」

のぞみ「そんな!..!」

士「何で涙目になってんだ、世界は救われ

たんだぞ?」

ダイゴ「そうだよ、喜ばないと。」

のぞみ「でも・・・でも・・・」

士はのぞみの涙を手で拭い手を引っ張る。

士「これを渡さなきゃな。」

ダイゴ「これは・・・」

のぞみ「歓迎会の時の写真？」

士「出会いもあれば別れもある、だがそれが永久の別れと誰が決めた？これは俺たちが出会えた証だちょうど三枚作っておいた。」

ダイゴ「そうだね、僕と士とのぞみでそれぞれ持っておこう。」

のぞみ「ふふふ、すごいピンぼけ。」

士「それは気にするな！」

ダイゴ「でも・・・このピンぼけ、なんだか落ち着くな。」

のぞみ「うん、また会えるような気がしてきた。」

士「信じていれば必ず会える。」

咲「アスカさん！キャッチボール楽しかったです、また試合に招待してください！我夢さん！勉強教えてくれてありがとうございました！」

アスカ「ああ！！絶対に招待するよ！！」

我夢「また会えたら、わからない事何でも聞いてくれ！！」

舞「郷さんに北斗さん！私達に大切な事を教えてくれてありがとうございました！ミライさん！あの時は助けてくれてありがとうございました」

いました！」

郷「ああ！！」

北斗「君達は立派に成長した。」

ミライ「また会いましょう！」

なぎさ「ハヤタさん！自転車直してくれてありがとうございます！」

ほのか「モロボシさん！カレーすごいおいしかったです！」

ひかり「また行かせてください！」

ハヤタ「例を言われる事ではない、いつでも直してやる！」

ダン「いつでも来てくれ！」

ラブ「結城さん！あの時はありがとうございます！」

結城「ああ、お前がその様子なら俺は安心だ。」

つぼみ「期間は短かったですけど、みなさんありがとうございます！」

えりか「まあ会おうね！」

士達とダイゴ達の体がひかり始めた。

ダイゴ「どうやら、時間が来たみたいだ。」

のぞみ「どうして私達は体が光らないの？」

士「ここは元々プリキュアの世界だ、たがら消えるのは俺達だけなんだろ。」

三人は手を握り円になる。

士「いいか？よく覚えておけ、俺達は……」

ダイゴ「いつの日か、必ず……」

のぞみ「また会える。」

三人は微笑んだ。

そして士達とダイゴ達は光と共に消えた。

りん「なんか寂しくなっちゃったね。」

うすら「そうですね。」

のぞみ「寂しくなんかないよ？」

こまち「えっ？」

かれん「どっして？」

くるみ「さっぱりわからないわ。」

のぞみ「私達は・・・また会えるから。」

数日後

のぞみ「うわ〜！遅効だあ！！」

なぎさ「先生！今日だけは見逃して！！」

咲「やったあ！！5人連続三振！絶好調なり〜！」

ラブ「次のダンスコンテストは優勝だよ！！」

つぼみ「今日も1日頑張ります！」

夏海「ところで土君、今度はどこの世界なんでしょう？」

土「さあな、まあ俺は俺のやるべき事を見つけ出すまでだ。」

アスカ「ダイゴ、これからどうするんだ？」

我夢「ダイゴの頭の中ではもう決まってるんでしょ？」

ダイゴ「ああ、僕は・・・」

のぞみは相変わらず朝寝坊
士は自分の世界を見つけ出すために
ダイゴはまた何かを行うみたいだ
それぞれ別の役割を果たすためにそれぞれの世界を過ごしている。
そう、また会える日を夢見て・・・

完

最終話 再会を夢見て（後書き）

今までこの小説を読んでくれて本当にありがとうございました！

今後は特別編として気が向いたら投稿していくのでよろしくお願
いします。

あと、新しい小説も始めようと思いますのでそちらもよろしくお願
いします。

今まで応援ありがとうございました！

特別編 プリキュアとイマジン(前書き)

なんか似てると思って

特別編 プリキュアとイマジン

作者「はい！と言うわけで始まりました特別編〜！！」

パチパチパチパチ

作者「司会はターザンこと作者が担当させていただきます。」

士「まで！！まさかこんな事のために俺達を呼んだのか！？」

作者「どうしたんですか、せっかく物語は完結してこれから特別編を投稿していいこうと思ってるのに。」

士「だがな！」

作者「警備ロボ！」

士「なんだこいつら！？ウワアアアアア・・・」

のぞみ「むじい・・・」

作者「では、今回はトークショーです！今日のゲストはgoogleさんとイマジンさんです！」

のぞみ「えっ！？あっ、どうも〜！！」

りん「なんだか唐突ね〜。」

うすら「でもなんだか楽しそうです。」

「こまち」「そうね。」

かれん「一度イメージと話してみたかったのよ。」

くるみ「そうなの!？」

モモ「俺!参上!!!」

ウラ「君達、僕に釣られてみる?」

キン「俺の強さは泣けるで!!!」

リュウ「わ〜い!!今日はいっぱい話そう!答えは聞いてない!」

ジーク「降臨、満を持して。」

デネブ「本編に出てないけどなんか出ちゃったよ!」

作者「では、楽しんでってください!」

リュウ「ねえ!思ったんだけど、僕達って色が似てるよね?」

ウラ「確かに言われて見れば!」

のぞみ「本当だ!」

かれん「色的に私はウラタロスね。」

ウラ「かれんなかれんさんと同じだなんてうれしいな。」

モモ「つまんねえ駄洒落言ってんじゃねえよ!・・・で、俺は?」

りん「気になってたのね、色的に私じゃない?」

キン「わいは春の字やな?」

うすら「春の字で・・・(春日野の春)。」

リュウ「ぼくはくるみお姉ちゃんだね!」

くるみ「確かにそうね。」

こまち「私はデネブさんね。」

デネブ「そうか!よろしく!」

モモ「なにが!?!」

のぞみ「あ・・・私は?」

りん「あれ?そういえばピンクのイメージで・・・」

モモ「いねえな。」

ジーク「我は白だ、ほのかか舞であるう、いないがな。」

のぞみ「うわ〜ん!」

タッタッタッ！

こまち「のぞみさん！」

キン「追いかけるでー！」

夕日の海岸

ザザア〜ザザア〜

のぞみ「ぐす、私と一緒にの人なんて・・・いないんだ。」

???'「なにくだらない事で泣いてんの？」

のぞみ「ダークドリーム！」

DD「別に一緒の人がいなかったってあんたはあんたでしょ？」

のぞみ「！ー！」

リュウ「あっ！あそこにいた！」

かれん「ダークドリームもいるわ！」

キン「その様子やと、何かわかったらしいな。」

のぞみ「うん、ごめんねみんな。」

うすら「ダークドリームってなんのイメージと一緒になんでしょ？」

のぞみ「私とダークドリームは同じだから特にないと・・・」

DD「そりゃあネガタロスでしょ！」

のぞみ「いるの!？」

おわり

特別編 プリキュアとイメージン（後書き）

また特別編をお楽しみに

特別編 かれんとなぎさの料理（前書き）

天童を天道に修正！！

特別編 かれんとなぎさの料理

光写真館にて

士「くっ、なぜなんだ。」

かれん「えっ、何が!？」

なぎさ「なんか変?。」

士「なんでレシピがあるのにこんなに塩辛くなるんだ!。」

かれん「なっ、なんでかしら?。」

なぎさ「さあ?。」

夏海「士君、このチラシ見てください!。」

士「料理対決?。」

夏海「はい、なんでも町内一番を決めるみたいですが、私とラブで参加しようと思つて。」

ラブ「得意なハンバーグで勝負するんだ!。」

かれん「料理対決・・・。」

なぎさ「料理か・・・。」

士「料理が上手になりたいか？」

なぎさ「そりゃあ！」

かれん「当たり前じゃない！」

士「そう思って2人別々にゲストを呼んでおいたぞ、外に出る。2人は外に出た。」

かれん「この人達は？」

士「紹介する、天道とデンライナーのオーナーだ。」

天道「おばあちゃんは言っていた、この世にダメな人間はいないってな。」

オーナー「よろしくお願いします。」

そしてそれぞれ料理修行が始まった！

かれん・オーナー side

かれん「・・・山盛りのチャーハンに・・・旗？」

オーナー「旗を倒さずにチャーハンをスプーンですくって食べていき倒した方の負けです。」

かれん（料理とどんな関係が？）

なぎさ・天道 side

天童「まずはハシの持ち方からだ、その後に卵を割って焼いてもらう。」なぎさ（ハシなんて楽勝楽勝）

しかし

かれん「あれっ!?!」

オーナー「私の勝ちです、やり直し。」

天道「違う、ハシは指の第二関節の……」

なぎさ（ハシの持ち方ですでに三時間……。）

かれん（お腹が……）

なぎさ（指にたこできてる。）

料理対決当日

作者「さあ！ついに始まりました料理対決！司会は私ターザンこと作者がつとめます！」

士（またお前か！）

作者「では選手紹介をします！……エントリーNo.20！海東大樹！」

のぞみ「あれ！？海東さん！」

海東「優勝は僕のものさ。」

作者「エントリーNo.21！光夏海と桃園ラブ！」

夏海「頑張りましょう！」

ラブ「うん！2人で幸せゲットだよ！」

作者「エントリーNo.22！モロボシ・ダン！」

ダン「腕がなるな。」

ほのか「ダンさんまで・・・」

作者「エントリーNo.23！水無月かれんと美墨なぎさ！」

かれん「・・・」

なぎさ「・・・」

天道「まるで石のようだ。」

オーナー「2人を信じましょう。」

作者「料理は各自自由！制限時間は一時間！スタート！！」

ラブ「夏海さんは玉ねぎを切ってください、私は卵を割ります！」

夏海「まかせてください！」

ダン「まずはビールを赤ワインで！」

海東「僕に不可能はない。」かれん（修行らしい修行してないのに！）

なぎさ（ありえない！絶対ありえない！）

一時間後

作者「そこまで！では一番から審査員の所へ！その際に審査員を紹介しましょう！」

「審査員のヒビノミライです！」

「審査員のモモタロス！俺、参上！」

「審査員の九条ひかりです。」

ほのか「ひかり、見当たらないと思ったら……。」

士「一匹場違いな奴がいないか？」

ダイゴ「ミライはモロボシさんに入れるな……確実に。」

作者「では一番の方の料理から試食お願いします。」

モモ「！、なんでラーメンがこんなに甘いんだ！？」

一番の人「えっ!?!」

海東（僕はモロボシさんと夏メロン組にかれん組以外興味がないからね、消えてもらおうよ。）

士「海東の奴、インビジブルのカードで他の奴の調味料をすり替えたな。」

舞「ひどいな。」

作者「続いて海東選手!」

海東「僕はこれさ!」

おおおおおおおっ!!

こまち「すごい美味しそうなステーキ!」

海東「かの有名な松坂牛に最高級の調味料で作りあげたものだ。」

ミライ「美味しい!!」

モモ「やばい!こんな肉食ったことねえ!!」

ひかり「すごい。」

作者「続いてモロボシさんのサンアロハカレー!」

ミライ「美味しい!!」

モモ「こんなカレー食ったことねえ!!」

ひかり「すごい。」

つぼみ「あれ？デジャブを感じる。」

作者「続いて光夏海組！」

ミライ「美味しいハンバーグですね。」

モモ「肉汁がたまんねー！」

ひかり「ご飯が欲しくなります！」

夏海「やりました！」

ラブ「幸せゲット！」

作者「さて最後はかれん組！」

ひかり（大丈夫かな？）

モモ（南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。）

ミライ（なにが来るんだ？）

作者「おっとこれはまさか卵チャーハンか？」

海東（勝った！卵チャーハンごときが僕にかなうはずがない！）

ミライ「!!!」

モモ「!!!」

ひかり「!!!」

作者「審査員さん？なぜか固まっています。」

士「ダメだったか。」

えりか「でもなんか変だよ？手がふるえてるよ。」

「……………美味い!!!」

海東「何!？」

ミライ「一体何だ!？」

モモ「この未知の味、手が止まらねえ!」

ひかり「あれ!?!もう無くなってます!!!」

作者「これは優勝は一目瞭然!かれん・なぎさ組に決定です!」

海東「まさか、僕が卵チャーハンに負けるなんて。」

ラブ「すごいよ2人共!」

夏海「一体どうしちゃったんですか!？」

かれん「わっ、私はただオーナーとチャーハンに突き刺さった旗を倒さずに食べてただけで・・・」

なぎさ「私は天道さんにハシの握り方と卵の焼き方を教えてもらっただけど・・・」

オーナー「そのとおり。」

かれん「オーナー！一体どうして私は!？」

士「なるほどな。」

一同「？」

士「旗を倒さずにチャーハンをすくう、分量を間違えるかれんが旗を倒さないようにするにはチャーハンをすくう分量を見極める必要がある。」

我夢「なるほど、それで自然と分量を見極められるようになったのか。」

天道「調味料は極普通のものだが、料理に最適な分量にする事で、最高級のものを超える事ができる。」

なぎさ「すごい、ありがとう!」

オーナー「役にたてたのなら幸いです。」

天道「また呼んでくれ。」

数日後

士「ぐふっ！」

かれん「また・・・分量間違えちゃった。」

なぎさ「やっぱり、長続きしないね。」

士「お前らはもう料理するな。」

おわり

特別編 かれんとなぎさの料理（後書き）

次もお楽しみに

特別編 りんと舞と時々ホラー（前書き）

本編に出れなかった人登場

特別編 りんと舞と時々ホラー

ホラー・・・それは恐ろしい物

りんは学校に忘れ物をしたというので舞を付き添いに夜の学校に入
っていった。

りん「じ・・・じじ・・・ごめん、わざわざついてきてくれて。」

舞「あつ、うん。(かなり怖がってるな)。」

ガタツ！

りん「ひゃあああああ！・・・！！！！！！」

舞「りん！落ち着いて！！」

なにやらりんの教室から物音が・・・おお怖い！！

舞「開けて・・・みるわね。」

りん「う・・・ぐす・・・うん。」

りんさんかなり涙目です。

舞さん、勇気を振り絞り扉を開ける。

ガラツ！

そこには白い服をきた女の人が！！

「みくたくな〜。」

りん・舞「キイヤアアアア！！」

2人物凄い速さで駆けていきます、そのは速さ時速100キロメートル！！

りん「いやあ！！いやああああ！！」

舞「なにあれ！？」

「まああてえええ！！」

2人を追いかける白い服の女、はいはいどんどん2人に近づきます！！

りんさん既に気絶寸前です！

舞「りん！こつち！」

2人は部屋に入り、机の下とロッカーに身を潜めます。

「どこだあー！」

りん（無理！絶対無理！）

舞（あれは一体！？）

「この机の下が怪しいなあ。」

りん「!?!」

りんさん、ついに場所が見つかってしまいます、そして引きずり出されます!

りん「うう・・・ぐす・・・うわああん!?!」

舞「りん!」

泣き出したりんさんを見かねて舞さんロッカーから出ます。

舞「あなた誰!?!」

「・・・ぐす」

舞「へ!?!」

白い服の女はりんさん以上に泣き出します!

りん「ふえ!?!?なんで!?!?」

「僕も本編に出たかったああ!?!」

舞「待って!?!あなた・・・名前は?」

「・・・明堂院いつきです。」

りん・舞「いつき!?!?」

おわり

特別編 りんと舞と時々ホラー（後書き）

今回もありがとうございます！

特別編 メタモルフォーゼ（前書き）

色んな意味を書いてみました。

特別編 メタモルフォーゼ

作者「みなさんこんにちは！ターザンです！早速ゲストを紹介します！仮面ライダーディケイドの門矢士！」

士（毎回出てくるなこいつ・・・）

作者「そしてプリキュア5の夢原のぞみ、夏木りん、美々野くるみです！」

のぞみ「こんにちは〜。」

りん「何で私達こんなたくさん出てるんだろっ？」

作者「5が好きだから。」

くるみ「そういうと思ったわ。」

作者「そして特別ゲスト！左翔太郎とフィリップです！」

翔太郎「元気そうだな！」

フィリップ「では早速トークを始めよう。」

トークstart!!

のぞみ「はいはい！！ねえねえ、メタモルフォーゼってどういう意味？」

士「お前達がいつも口にしてる言葉の意味も知らないとはな。」

フィリップ「早速検索してみよう。」

翔太郎「頼むぜ、相棒。」

地球の本棚

フィリップ「キーワードは『変身』。」

ヒュバヒュバ！！

フィリップ「絞りきれないか……」

翔太郎「他のキーワードは……ん……」

士「『意味』なんてどうだ？」

フィリップ「キーワードは……『意味』」

ヒュバヒュバ！！！！

フィリップ「もう少しだ、最後は……そうだ、大事な言葉を入れてなかった……『メタモルフォーゼ』」

ヒュバヒュバ！！

キュイーン！！

フィリップ「閲覧は終了した、メタモルフォーゼの意味は……突然変異だ。」

のぞみ「とっ……」

りん「突然……」

くるみ「変異……」

……

のぞみ「現れたわねエターナル！行くよみんな……」

みんな「うん！」

「プリキュア・突然変異……」

……

士「お前達いつもそんな言葉を……」

のぞみ「えっ！？いやっ！？その……」

りん「否定できない……」

くるみ「私はスカイローズ・トランスレイトだから関係ないわ！」

フィリップ「その意味も閲覧した。」

翔太郎「どういう意味なんだ？」

フィリップ「翻訳するだ。」

くるみ「っ!!」

.....

くるみ「みんなを守るわ!」

「スカイローズ・翻訳する!」

.....

士「スカイローズは空の薔薇だ。」

くるみ「///わかってるわよ!!」

翔太郎「そもそもプリキュアってどういう意味なんだ?」

りん「あつ、確かにね。」

のぞみ「プリキュアのプリってなんだろ?」

くるみ「馬鹿ね、prettyのプリ、かわいいって意味よ。」

のぞみ「なるほど、でキュアは?」

フィリップ「キュアは救出するという意味だ。」

りん「かわいく救出するか。」

くるみ「素敵ね。」

のぞみ「そうだね・・・あっ！ねえねえ、Wはわかるけどディケイドってどういう意味？」

士「俺が変身するんだ、カッコいい意味に決まっている。」

フィリップ「ディケイドは十年という意味だ。」

士「なっ!?!」

翔太郎「仮面ライダー・・・」

のぞみ「十年・・・」

りん「・・・」

くるみ「ぷっ!」

ハハハハハハハハツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

士「笑うな!」

作者「世界の破壊者・十年、様々な世界を巡り、その瞳は何を見る？」

士「止めるおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

おわり

特別編 メタモルフォーゼ（後書き）

プリキュアオールスターズ×スーパー戦隊!!の方もよろしく願
いです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2165m/>

プリキュアオールスターズ×仮面ライダーディケイド×ウルトラ8兄弟

2010年10月9日21時48分発行